

八尾市文化財調査報告 35

史跡整備事業調査報告 1

史跡 心合寺山古墳基礎発掘調査報告書

1996. 3

八尾市教育委員会

頁・行	誤	正
2頁21行目	1964年(昭和29年)11月に	1954年(昭和29年)11月に
3頁註(10) ('大東家文書'抜粹)	(誤) <p>「大東家文書」(註10) 大東家文書は、明治時代の文書で、主に大東家が所有する文書を収めたものである。大東家は、明治時代に大手の洋服問屋として繁栄した。この文書には、大東家の歴史や経営状況などが記載されている。 </p>	(正) <p>「大東家文書」(註10) 大東家文書は、明治時代の文書で、主に大東家が所有する文書を収めたものである。大東家は、明治時代に大手の洋服問屋として繁栄した。この文書には、大東家の歴史や経営状況などが記載されている。 </p>
77頁6行目	後円部裾については	後円部裾については

はじめに

心合寺山古墳は、八尾市の東を画する高安山系の麓に築かれた、中河内最大の前方後円墳であります。現在も周濠の名残りである青い水面に、その優美な姿を横たえています。春は桜の木々に飾られ、秋は紅葉に彩られて、四季折々の美しい姿を見せ、市民の方々の散策の場、歴史を偲ぶ場として親しまれてまいりました。

しかし長年の風雪に晒された墳丘は損壊の進んでいる部分もあり、早期に保存の処置を講じる必要性が生じてきました。そこで八尾市教育委員会では、心合寺山古墳の保存と整備のための基本構想の策定を計ることとし、基礎的な資料を得るために発掘調査を平成4年度から行ってまいりました。そして平成6年度には、基本構想をとりまとめることができました。本書は3ヶ年の基礎調査の成果をまとめたものです。

基礎調査の結果、心合寺山古墳がこれまで考えられていたよりさらにひとまわり大きい、全長140mに及ぶ前方後円墳であること、古墳の主軸を南北方位に揃え高度な技術で築造されていることなどがわかつてまいりました。

心合寺山古墳は、私達の祖先が大切に受け継いできたからこそ、今まで美しい姿で残されてきたものであります。これから将来にわたり大切に守り伝えるべく、保存整備に向けて着実に努力していく所存であります。

最後になりましたが、基礎調査を進めるにあたりましては、地元の方々をはじめとする市民の皆様方、史跡整備委員の諸先生をはじめ、関係各位から、多大な御助力、御指導を賜りました。心より厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

八尾市教育委員会

教育長 西谷信次

例　言

1. 本書は、八尾市教育委員会が史跡整備事業として実施した、国史跡心合寺山古墳の基礎調査の為の発掘調査報告書である。
2. 調査は、心合寺山古墳史跡整備委員の御指導のもと八尾市教育委員会社会教育部文化財課が実施した。史跡整備委員の名簿は下記のとおりである。

村川 行弘 大阪経済法科大学 総合科学研究所所長 教養部教授
堅田 直 帝塚山大学 考古学研究所長 教養学部教授
和田 晴吾 立命館大学 文学部教授
井藤 徹 (財)大阪府文化財調査研究センター 調査部長
(当時、大阪府教育委員会文化財保護課 参事)
本中 真 文化庁 文化財保護記念物課
(平成5年度まで委員。当時、奈良国立文化財研究所 主任研究官)
加藤 允彦 奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター 保存工学研究室 室長
(平成6年度から委員。)
安井 良三 八尾市立歴史民俗資料館 館長

(順不同 敬称略)

なお現地調査は、本課技師吉田野々が担当した。調査期間は下記のとおりである。

第1次基礎調査 平成5年2月15日～3月31日
第2次基礎調査 平成5年7月20日～9月17日
第3次基礎調査 平成6年8月22日～9月8日

4. 本書「付論」に奥田尚氏（曙川小学校教諭）から玉稿を賜った。記して感謝の意を表します。

5. 現地調査等では、堀江門也氏、瀬川健氏、芝野圭之助氏、広瀬雅信氏、小林義孝氏をはじめとする大阪府教育委員会文化財保護課の方々からご指導をいただいた。また、下記の方々の御指導、御助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

青木勘時 青柳泰介 秋山浩三 天野末喜 石野博信 岩瀬透 一ノ瀬和夫 今尾文昭
植野治三 上田睦 岡崎晋明 奥田尚 金村浩一 鐘方正樹 河内一浩 上林史郎 北野重
国下多美樹 小池香津江 須藤宏 関川尚功 十河良和 田中一廣 棚橋利光 中塚良
中西克宏 別所秀高 堀田啓一 松田順一郎 宮川律 安村俊史 吉岡哲

(50音順 敬称略)

この他に御芳名を掲載しきれなかったが、多くの方々から御指導、御援助をいただいた。深謝いたします。

6. 現地調査にあたっては、下記の方々の参加、協力をいただいた。

安達志津子 池田茂樹 今木敏文 大嶋和則 片山武志 神村浩一 川端智 木村典子
清水妙香 田坂佳子 富永勝也 中村雅一 根上直子 濱田千鶴 福樹幹祐 堀本昌宏
松島賢浩 三笠駿一 山本一由 横山妙子 米原洋文 和田和哉

(50音順 敬称略)

有限会社 花田建設（第3次基礎調査）

7. 遺物整理・実測は安達志津子を中心に、浅井紀己子、堀本昌弘、濱谷百代、横山妙子が行った。
遺物図面のすべてと遺構図面の一部のトレースは、本課非常勤嘱託藤田典子が行った。また、本文中の観察表の作成は米原洋文が行った。

8. 現地調査にあたっては、八尾市立養護老人ホームから多大な御協力をいただいた。また、現地調査や本書の作成にあたり、(財)八尾市文化財調査研究会及び八尾市立歴史民俗資料館の方々からは諸々の御助言、御援助をいただいた。また、現地調査の進行及び報告書の作成にあたっては、文化財課全員の協力体制のもとでを行い、本課技師米田敏幸、畜齋から諸々の助言、助力を受けた。

9. 本書の編集及び上記4以外の執筆は、吉田が担当した。

本文目次

I. 環境と調査経緯	1
1. 位置と環境	1
2. これまでの調査・研究	2
3. 調査経緯	2
II. 基礎発掘調査の概要	4
1. はじめに	4
2. 後円部の調査	4
3. くびれ部の調査	10
4. 前方部の調査	16
5. 後円部裾北側平坦面・周濠部の調査	20
6. 前方部南西の調査	26
III. 出土遺物	27
1. 円筒埴輪	27
2. 形象埴輪・土師器	39
・出土遺物観察表	49
IV. 考察	
1. 墳丘プランについて	77
2. 形象埴輪の出土状況について	80
3. 築造時期について	83
4. まとめ	83
付論 1. 奥田 尚 「心合寺山古墳の埴輪・土師器に含まれる砂礫について」	85
(付載) 奥田 尚 「墓石の石種について」	93
2. 吉田 野々 「心合寺山古墳の造営背景についての一考察」	96

挿図目次

第1図	心合寺山古墳周辺図	1
第2図	調査区設定図	5
第3図	後円部北及び南トレンチ平面・土層図	7
第4図	後円部西トレンチ平面・土層図	8
第5図	後円部東トレンチ平面・土層図	9
第6図	くびれ部西トレンチ平面・土層図	11
第7図	くびれ部西トレンチ段築平垣面付近葺石平面図・見通し断面図	12
第8図	くびれ部西トレンチ拡張区平面・土層図	13
第9図	くびれ部西トレンチ拡張区検出葺石平面・立面図	14
第10図	くびれ部西トレンチ拡張区埴輪出土状況図	15
第11図	前方部西及び東トレンチ平面・土層図	17
第12図	前方部頂検出埴輪列平面・立面図	18
第13図	前方部南トレンチ平面・土層図	20
第14図	後円部裾北側トレンチ平面・土層図	22
第15図	後円部裾北側トレンチ拡張区平面・土層図	23
第16図	後円部裾北側トレンチ拡張区検出埴輪列平面図	24
第17図	後円部裾北側トレンチ拡張区検出埴輪列立面図	25
第18図	前方部南西トレンチ平面・土層図	26
第19図	遺物実測図 円筒埴輪底部	32
第20図	遺物実測図 円筒埴輪底部	33
第21図	遺物実測図 円筒埴輪底部・体部	34
第22図	遺物実測図(円筒埴輪)	35
第23図	遺物実測図(円筒埴輪口縁部)	36
第24図	遺物実測図(円筒埴輪口縁部)	37
第25図	遺物実測図(円筒埴輪口縁部・線刻のある埴輪)	38
第26図	遺物実測図(朝顔形埴輪・壺形埴輪)	42
第27図	遺物実測図(壺形埴輪・蓋形埴輪)	43
第28図	遺物実測図(壺形埴輪)	44
第29図	遺物実測図(蓋形埴輪)	45
第30図	遺物実測図(蓋形埴輪・家形埴輪)	46
第31図	遺物実測図(盾形埴輪・甲冑形埴輪・不明形象埴輪)	47
第32図	遺物実測図(土師器・弥生土器・その他)	48
第33図	心合寺山古墳墳丘プラン検討図	78
第34図	形象埴輪片出土分布図	81

図版目次

- 図版1 心合寺山古墳航空写真（南上空より）
心合寺山古墳航空写真（西上空より）
- 図版2 心合寺山古墳現況（新池西より）
調査状況（前方頂より）
- 図版3 前方部西トレンチ（西より）
くびれ部西トレンチ段築平坦面付近葺石（西下方より）
- 図版4 くびれ部西トレンチ（西より）
くびれ部西側墳丘裾（南より）
- 図版5 前方部頂埴輪列（北上方より）
前方部頂埴輪列（南上方より）
- 図版6 前方部頂埴輪列より後円部を望む
前方部頂埴輪列（東より）
- 図版7 前方部頂埴輪列 壺形埴輪
前方部頂埴輪列P付近
- 図版8 後円部裾北側平坦面及び周濠部痕跡（北より）
後円部裾北側平坦面及び周濠部痕跡（南より）
- 図版9 後円部裾北側平坦面上埴輪列（南上方より）
後円部裾北側平坦面（北より）
- 図版10 出土遺物 円筒埴輪底部
- 図版11 出土遺物 円筒埴輪
- 図版12 出土遺物 円筒埴輪口縁部
- 図版13 出土遺物 壺形埴輪
- 図版14 出土遺物 壺形埴輪等
- 図版15 出土遺物 壺形埴輪・不明形象埴輪
- 図版16 出土遺物 后形埴輪・甲冑形埴輪・家形埴輪

I. 環境と調査経緯

1. 位置と環境⁽¹⁾

心合寺山古墳は八尾市大竹4丁目・5丁目に所在する。八尾市の北東部、生駒西麓に立地する中河内最大の前方後円墳である。周濠を備え、墳丘の規模は140m前後を測る。心合寺山古墳の築造された時期は、古墳時代中期前半とみられ、この時代に中河内一帯を治めた地城首長墓と考えられている。

心合寺山古墳の立地する地形は、生駒西麓に形成された扇状地の先端部になる。標高35m～26mの西下がりの斜面上である。現在でも古墳の北側はため池が点在し、旧の谷地形を留めている。周濠の名残りである墳丘東西のため池の水位は、冬場では東が西より5m高い。この水位は現在は渡り土手により保たれているが、傾斜地に墳丘を築造するに先立ち、大規模な地業が行われたことは想像に難くない。

現在、心合寺山古墳と同時期の古墳は周辺に確認されていない。前期の古墳は、心合寺山古墳の北東方向の山麓に向山古墳、西ノ山古墳、花岡山古墳等がある。向山古墳は全長55mを測る前方後円墳とされるが、現在墳丘は採土工事により大きく削平され、墳丘の形状は判然としない。ここからは壺形土器が採集されている。西ノ山古墳は全長55mを測る南面する前方後円墳である。1881年の開墾時に発掘調査され、後円部の石棺から人骨の他に、銅鏡、銅鑓、鉄劍、玉類等が出土した。花岡山古墳は消滅したが、全長73mを測る西面する前方後円墳であった。川西編年Ⅱ期に相当する円筒埴輪が出土している。また、中ノ谷古墳は全長50mの前方後円墳または円墳で箱形石棺を内部主体とし、二体の人骨の他に、玉類、堅櫛、石製模造品、鉄刀等が出土した。当墳は中期に下る可能性もある。これらは心合寺山古墳の北東山麓に立地し、心合寺山古墳の前代の首長墓とみてよいであろう。

心合寺山古墳の次ぐ時期の古墳は見当らず、いったん首長墓系列は断絶する。中期末には、心合寺山



第1図 心合寺山古墳周辺図 (1/5000)

古墳の北西に近接して鏡塚が築造される。径28mの円墳もしくは墳長40m程度の前方後円墳とされるが、現在は墳丘が大きく削平されている。ここからは川西編年V期の埴輪が出土している。後期初頭には、心合寺山古墳の南方の扇状地上に前方後円墳の郡川西塚、郡川東塚が築造される。北面する全長50~60mの前方後円墳であり、互いに主軸を並行して近接する。初期の横穴式石室を主体部とし、豊富な遺物が出土したが、現在は東塚の後円部が僅かに原形を留めるのみである。さらに時期が下ると、大阪府下最大級の横穴式石室をもつ愛宕塚古墳が、心合寺山古墳の南東方山麓に営まれる。

心合寺山古墳に近接する遺跡では、その西北方、眼下に拡がる大竹西遺跡、池島・福万寺遺跡がある。大竹西遺跡では、古墳時代前期の掘立柱建物等とともに、同期の瑪瑙製鐵形石製品が土坑内から出土した。⁽³⁾また、池島・福万寺遺跡では、遺跡の東側で古墳時代前期の溝、井戸、土坑などが検出され、神獸鏡の破片、堅櫛、鳥形土製品、異形壺形土器など、特異な遺物が出土している。これらの遺跡では、古墳時代前期において、なんらかの祭祀的性格をもった施設が営まれていたものと考えられ、北東山麓の前期の前方後円墳との関係が注意されている。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

2. これまでの調査・研究

心合寺山古墳はこれまで多くの先史により、調査・研究が積み重ねられてきた。早くには、地元の郷土史研究者の清原得巖氏により、長持形石棺の繩掛突起部の破片が採集された。この資料は同氏採集の当墳の埴輪片とともに、1976年、原田修氏らによって「清原得巖所蔵考古資料図録」としてまとめられた。さらにこの長持形石棺は、兵庫県高砂市の竜ノ山産の凝灰岩であることが判明している。この長持形石棺の破片が本墳に伴うものであれば、主体部は既にかなりの破壊を受けていることになるが、これに関連して、戦後まもない1946年（昭和21年）の冬、堅田直氏が当墳を訪れた際、ちょうど後円部頂に建てられた直後の倉庫の横に積まれたバラスの上で鉄斧を探集されている。⁽⁶⁾末永雅雄氏による『古墳の航空大観』⁽⁷⁾では1964年（昭和29年）11月に撮影された心合寺山古墳の航空写真が収められている。これを見ると、心合寺山古墳の後円部頂には瓦屋根の建物が建っており、他の部分は、前方部の一部が雑木に覆われている他は、畠として利用されていることがわかる。本市の初期の文化財行政に力を注がれた沢井浩三氏の1966年刊行の文献等では、後円部頂には江戸時代に觀音堂が建てられていたことがあり、後円部の中央部はかなり壊されていると記述されている。この觀音堂に直接関係するか否かは判然としないが、八尾市歴史民俗資料館に寄託された『大東家文書』の「淀御領分寺社御案内帳 河州高安郡」に明和4年（1767）3月として、「心合寺千手觀音堂山」という記述がある。⁽⁸⁾また、墳丘そのものの調査研究では、1955年に村川行弘氏らによって、墳丘測量図の作成が行われた。⁽⁹⁾また、吉岡哲氏は1977年、向山古墳、西ノ山古墳、花岡山古墳、心合寺山古墳といった八尾市の北辺に集中して分布する前期から中期の古墳を、「樂音寺・大竹古墳群」と総称された。⁽¹⁰⁾さらに1988年刊行の『八尾市史』にも基礎資料を示されている。⁽¹¹⁾堀田啓一氏は、心合寺山古墳の前方部長が後円部径の約2倍近く、前方部長の長い古墳であることを、早くから指摘されていたが、1992年、航空測量図をもとに宮川涉氏と共に、心合寺山古墳の築造企画の検討を行なっている。⁽¹²⁾一方、八尾市教育委員会、（財）八尾市文化財調査研究会においても、史跡指定地内の現状変更にさきだつ発掘調査を外堤部等で行ってきた。そして、1988年（昭和63年）には、前方部前面に里道部の侵食により露出した埴輪列の保護のための調査が行われ、今回の基礎調査の契機となった。これらの詳細は右表を参照されたい。⁽¹³⁾

3. 調査経緯

心合寺山古墳は昭和41年2月25日に国の史跡に指定された。これまで、小学生の歴史の学習の場をはじめとし、市民に利用されてきた。が、墳丘損壊の危険性等のあることから、部分的な利用に供することしか行き得ない状況であり、市民をはじめとして広く人々に利用される場としていくことが、重要な

課題であった。このような状況に加え、昭和63年には現在里道として利用されている前方部前面の埴輪列が、長年の侵食により露出し、このため緊急に発掘調査を行い保護処理を行うという事態が生じ、早急に整備を行っていく必要性が認識されるに至った。このため、八尾市教育委員会では、埴丘の保存と活用をはかるため、史跡整備のための基礎調査を平成3年度から開始し、平成3年度には航空写真測量を行い、平成4年度からは史跡整備委員の先生方の御指導のもとに、平成6年度までに3次にわたる基礎発掘調査を行い、今日に及んでいる。

調査年	調査事項	文献
1983(昭和58)	大竹輪池北東部推定外堀部分の護岸工事にさきだつ試掘調査。古墳の外堀にある遺構は確認できます。	八尾市教育委員会『八尾市内歴史昭和58年度発掘調査報告書』1984年
1984(昭和59)	大竹輪池北東部推定外堀部分の護岸工事にさきだつ発掘調査。築造当時の外堀に使用された青石と思われる石材を確認。さらに一部で外堀の可能性のある石材の並ぶ部分を確認。また、上層で中世の埴輪甕。中世甕の盛土から埴輪片が出土することから、外堀上に埴輪列の存在する可能性が考えられた。	八尾市教育委員会『八尾市文化財紀要1』1985年
1988(昭和63)	前方部前面の里塁部分に埴輪片の散乱がみられたため、埴輪列の保護のための発掘調査。段階平坦化に樹立された東西方向の埴輪列を長さ14m、14個体検出。	八尾市教育委員会『八尾市文化財紀要6』1992年
1989(平成元)	池の北西隅部分の種植付け替え工事に伴う発掘調査。この部分の外堀は後世のものであることが判明。さらに正徳6年(1716)の墨書きをもつ埴甕の硬板を確認。	(附)八尾市文化財調査研究会『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』1990年

表1 心合寺山古墳におけるこれまでの主な発掘調査

註(1) 調査については、主に下記の文献を参考とした。詳細はこれに譲られたい。

①八尾市史編集委員会『八尾市史(前近代)本文編』八尾市教育委員会 1988年

②秋山浩三『第6章 河内 第1節 北・中河内』近藤義司編『前方後円墳集成』近畿編 1992年

③秋山浩三『北・中河内の中古縄文と青長墳系』『研究資料Ⅱ』大和古中近研究会 1996年刊行予定

④八尾市立歴史民俗資料館『河内愛宕古墳の研究』1994年

註(2) 以下、各々に付註していないが、古墳輪池の縄年は川西幸之氏の論文(『円筒埴輪縄年』『考古学雑誌』第64巻第2・第4号 1978年)に載った。

註(3) (財)八尾市文化財調査研究会『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1992年

註(4) (財)大阪府文化財センター『淡島・福島より連続地況説明会資料』1995年

註(5) 前掲註(1)文献③

註(6) (財)大阪文化財センター『清原得蔵所蔵考古資料図録』『大阪文化誌』通巻6号1976年 本文献では、大正9年以来、清原氏が採集された考古資料が収録され、考察が加えられている。

註(7) 穂田直氏にご教示いただいた。さらに本市教育委員会による文化財講演会資料においても詳細を記述していただいた。

穂田直『心合寺山古墳をめぐる』(八尾市教育委員会文化財類第4回文化財講演会資料 1995年3月11日)

註(8) 木永雅経『古墳の航空大綱』1974年

註(9) 沢井和三『八尾の歴史 第1集 郡都、阪部川、楽音寺』1966年

沢井和三『八尾の古文化』その1 古墳』(1969年か、発行年未記載)

註(10) 八尾市立歴史民俗資料館小谷利明氏、尾崎良史氏にご教示いただいた。

この古墳中の「鏡」東西三拾六間半 南北六拾七間は、一間約1.818m

としたとき、東西57.267m、南北110.898mとなるが、現況の心合寺山古墳

の形を想像すると、東西は後円部の東西径に、南北は後円部の北端から前方

部の地形を近似までの長さとはほぼ相当する。また、八尾市立歴史民俗資料館によると

地元で云々の引き取り碑文によると、現在、通称「べんずりさん」として

大竹輪池に祀られている雲中供養菩薩は、明治26年以前に、大竹斬泡で

出土し、その後、池の端で「べんずりさん」としてお祀りされていたとの

ことである。なお、『大東家文書』の関連部分を右記に抜粋した。

註(11) この調査については、前掲註(1) 文獻①に掲載されている。

註(12) 古町哲『八尾市西ノ山古墳・中ノ谷古墳の出土遺物について』『古代学研究』33号 1977年

註(13) 前掲註(1) 文獻①

註(14) 堀田等一『河内考古学散歩』学生社 1975年

註(15) 堀田等一『宮川修「心合寺山古墳の築造企画の検討』八尾市教育委員会

『八尾市文化財紀要6』1992年

註(16) この他、本報告以前の基礎調査報告に関する報告としては下記がある。

八尾市教育委員会文化財係『史跡 心合寺山古墳基礎調査現地説明会資料』1993年

吉田野タク『史跡 心合寺山古墳基礎調査の成果について』『大阪府下埋蔵文化財研究会(第29回)資料』(財)大阪文化財センター 1994年

年2月6日



II. 基礎発掘調査の概要

1. はじめに

平成4年度の第1次基礎調査では、後円部に4ヶ所、くびれ部の西側に1ヶ所、前方部に3ヶ所の計8ヶ所のトレンチを設定した。平成5年度の第2次基礎調査では、くびれ部西側のトレンチの下方裾付近を拡張して調査を行った。平成6年度の第3次基礎調査は、第1次基礎調査の後円部北トレンチの延長上の後円部裾と周濠部の存在の推定される位置に、調査区を設定した。

調査区の設定にあたっては、堀田啓一氏、宮川修氏による、心合寺山古墳の築造企画推定復元図をもとに、後円部の仮中心点、前方部の仮中心点を求めた。さらに、これを結ぶラインを仮主軸ラインとして、基本的にはこれに沿う方向と直交方向にトレンチを設定した。前方部の東西方向については、現況のセンターラインと直交方向（前方部仮中心点から後円部仮中心点をみてそれぞれ83°）の方向にトレンチを設定した。

後円部仮中心点の国土座標値は、 $X = -151219.977$ 、 $Y = -32666.407$ であり、前方頂仮中心点の国土座標値は、 $X = -151288.373$ 、 $Y = -32665.341$ であり、Y座標値は、1m余りしか違わず、仮主軸ラインは国土座標の南北軸からの振れが少ない。図面上では、座標方位から北で西へ0.4°振れるに過ぎない。このため本調査では、仮主軸ラインを南北軸とし、これと直交する方向を東西軸に設定した。さらに後円部仮中心点を0として、1mごとの地区割りを行い、遺物の取り上げ等は基本的にこの地区ごとに行った。ただし、前方部の東西のトレンチについては、トレンチの設定方向に1mごとの地区割りを行った。

なお今回の調査では、埴丘面の断割は最小限に留めた。トレンチ内に一貫して断割を行ったのは、くびれ部西トレンチのみである。また、埴輪列は2ヶ所で確認したが、その取り上げは埋め戻し後に流出等の危険性の高いもののみに留めた。

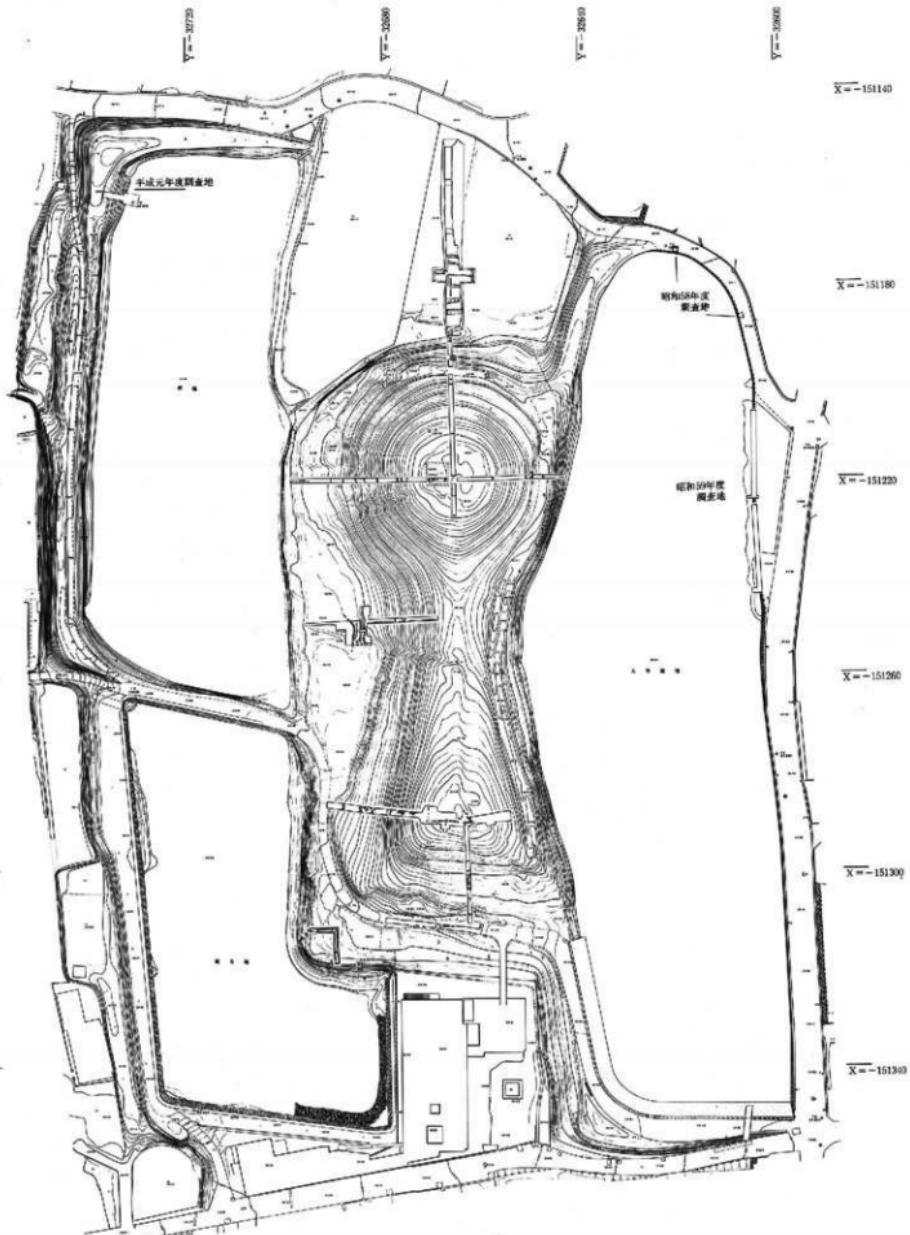
最後に今回の調査では、古墳時代以降の遺物等も多く出土しており、特に第2次基礎調査のくびれ部西トレンチ拡張区の流入土中から白鳳から奈良時代にかけての大量の瓦片が、第3次基礎調査においては、周濠状痕跡より平安時代から鎌倉時代の土器片が出土しているが、今回は資料の整理・検討をなし得なかった。これらについての正式な報告は次回に行うこととし、本書では概述に留めた。

2. 後円部の調査

後円部においては、後円部仮中心点から仮主軸ライン方向に沿って北と南及び、直交方向の西と東に幅1mのトレンチを設定した。トレンチの長さは後円部北トレンチは29m、同南トレンチは7.4m、同東トレンチは22.4m、同西トレンチは33.3mである。部分的に拡張を行った。

ここでは、埴丘面の状況は全体に削平が著しく、原位置を留める葺石、埴輪はまったく確認できなかつたが、後円部頂で埴丘面の土層の若干変化する部分を確認した他、部分的に埴丘面の断割を行い、埴丘盛土に関する知見を得た。

【埴丘の状況】埴丘面の上には黄灰色～灰色を呈する砂質土層等よりなる流入土が堆積する。流入土は後円部頂では0.4m前後であり、頂部から斜面への傾斜変換点で一旦厚さを減じたのち、斜面部分では全体に厚さを増し、厚さ1mに達する部分がある。埴丘面の削平は特に斜面部分が著しく、凹凸をなす。北トレンチでは北端へ行くほど急傾斜になるが、平均的には約27°前後の傾斜面である。後円部仮中心点から北へ24.1m～25.3m地点で人頭大の石が散在していたが、原位置を保つ葺石ではない。西トレンチでは、後円部仮中心点から西へ18～19.7m地点、標高34.7m付近で傾斜が緩やかになるが、西19.7m



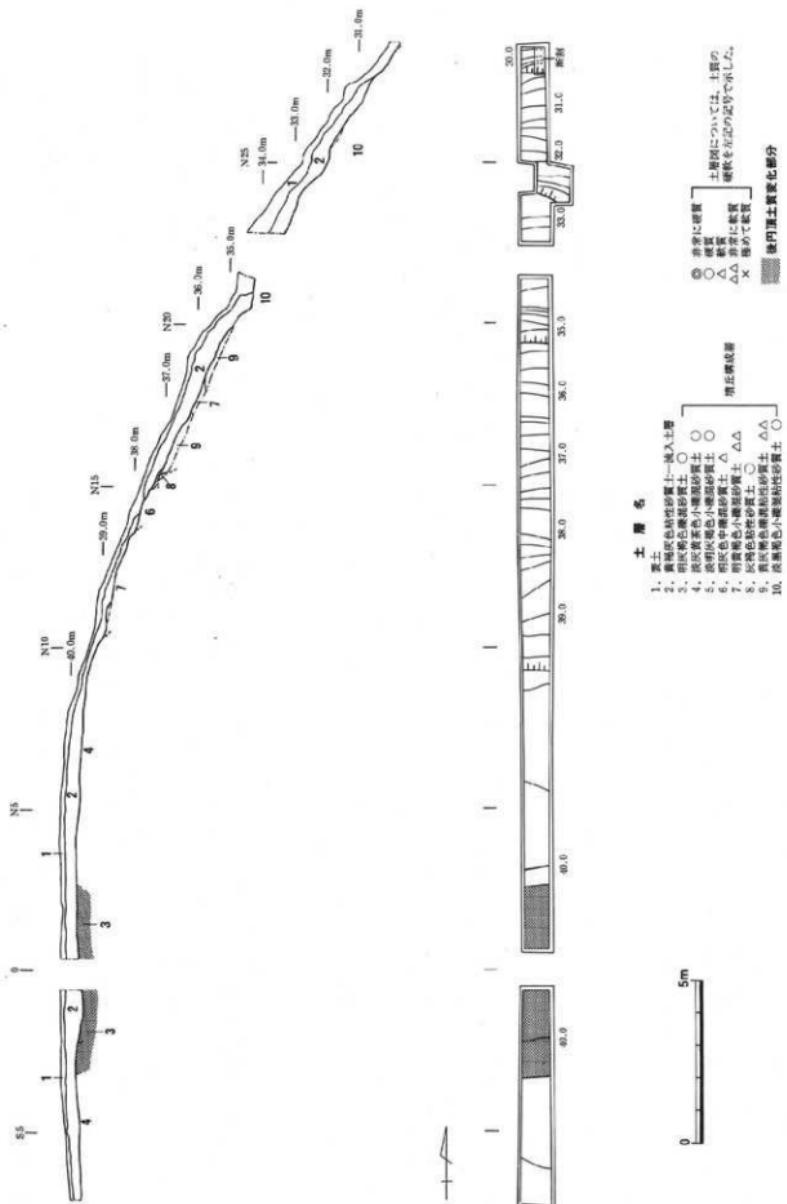
第2図 調査区設定図 (1/1000)

地点で傾斜が強まり、再び西24.9m地点からトレンチ端の西33.3m地点まで標高31～30mの緩斜面となる。上方の緩斜面は斜面全体のつながりから考えて段築平坦面の痕跡を示すものとは考えられず、後世の削平と捉えられる。下方の緩斜面は段築平坦面の痕跡を残すものである可能性があるが、現況の地形からみても、後世の削平をかなり受けているものと考えられる。東トレンチでは後円部仮中心点から東へ15～17m付近で傾斜が緩やかになるが、再び池側へ急傾斜をなし落ち込む。この緩斜面も現況の墳丘東の小道につながるものである。この面で石列を確認したが、現況の小道に伴う新しい時期のものと判断された。後円部頂平坦面の墳丘斜面との傾斜変換点は、後円部仮中心点から北へ9.0m付近、西へ9.6m付近、東へ8.0mの地点にある。また南へは7m以上平坦面が続いている。のことから後円部頂の平坦面は、現況の墳丘面のありかたからは、直径17m程度の円に推定できる。平坦面の高さは、現況では標高39.4～40.0mである。

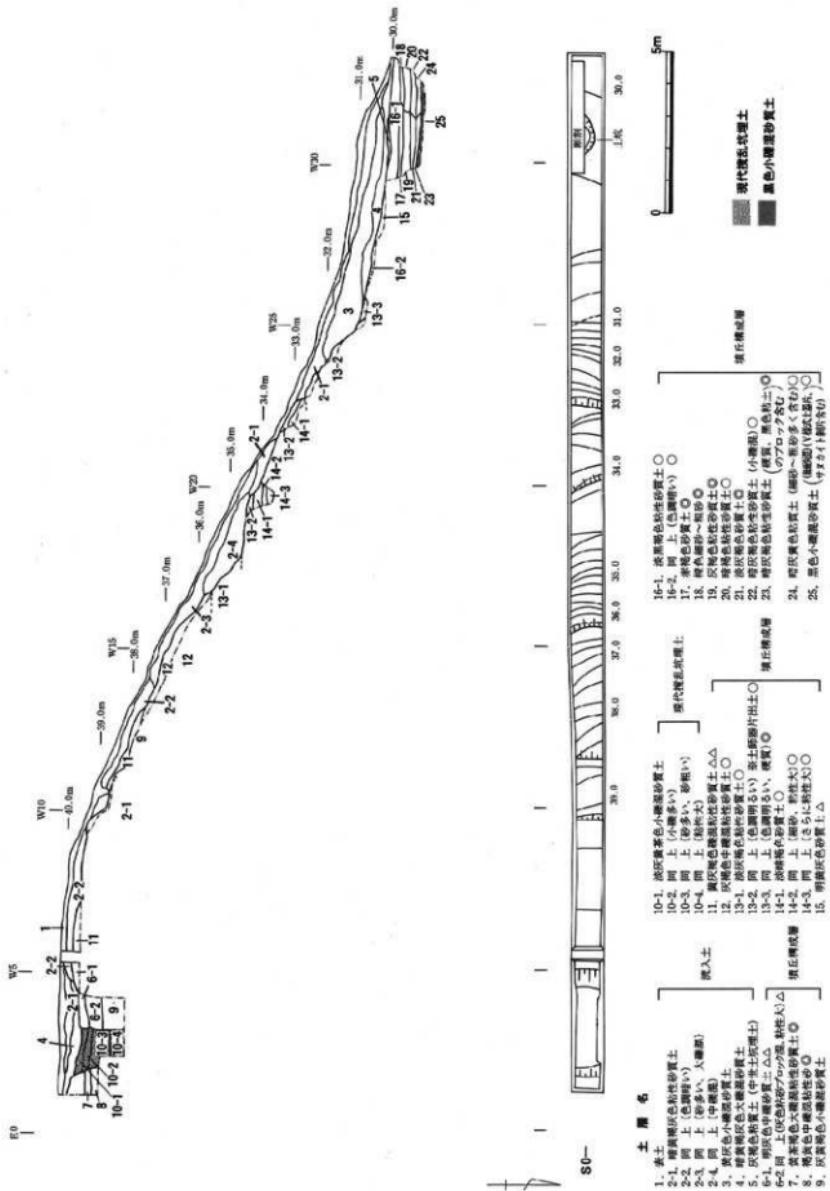
【後円部頂の状況】土層の変化する部分は後円部仮中心点から北へ2.68m、東へ2.7m、南へ3.22mまでの範囲である。まわりが比較的軟質の黄灰褐色から淡灰黄茶色の砂質土であったのに対し、この部分は比較的硬質の明灰褐色小礫混砂質土であった。主体部の掘り方の埋土になるか否かは判然としない。後円部頂の西には5m四方の建物のコンクリート基礎が遺存していた。この基礎は深さ0.6mになる。この基礎の中にこれより新しい掘りこみ（現代攪乱坑）があり、後円部仮中心点から西へ1.7mところに東の肩があり、東西幅4m前後を測る。現代攪乱坑は現地表下0.6mで一旦段をなし、幅1.3mで直に掘りこまれ、現地表下1.8m以上続いている。さらにこの下をボーリング棒で確認したところ、さらに1m以上柔らかい土がつづいていた。埋土には楓木鉢片など現代の遺物が含まれていた。また、この掘りこみの壁面を精査したところ、西壁は墳丘盛土の土層であったが、東壁は黄茶褐色大礫混砂質土層、褐黄色中礫混粘性砂であり、当墳の墳丘構成層にはみられない特異な土層であった。主体部に関するものである可能性もあり、注意される。

【墳丘盛土について】北トレンチでは後円部仮中心点から北へ20m地点付近、標高34.5m付近までは比較的軟質の灰色～黄褐色の小礫混砂質土層であるが、これ以下は比較的硬質の淡黒褐色小礫混粘性砂質土層となる。この土層からは弥生式土器と思われる小片が出土した。西トレンチにおいても、後円部仮中心点から西へ24.9m付近、標高31m付近までは、比較的軟質の黄褐色～灰褐色系の砂質土層であるが、これ以下北トレンチで確認したものと類似する淡黒褐色小礫混粘性砂質土層となる。後円部仮中心点から西へ19m地点で一部墳丘面の断割を行ったところ、淡灰褐色粘性砂質土層から土師器とみられる小片（362）が出土した。さらに西端で断割を行ったところ、淡黒褐色小礫混粘性砂質土層の下に層厚0.1m～0.2mの粘性砂質土が水平に堆積している状況を観察できた。このうち断割の最下の標高29m付近の黒色小礫混砂質土層からは、弥生時代後期の土器片（372）、サカヌイ剥片、土師器片（367）が出土した。この土層については、墳丘構成前の土層である可能性が残っており、後円部西側については、少なくともこれより上、標高29m付近以上は人為的な盛土がなされている可能性が高い。

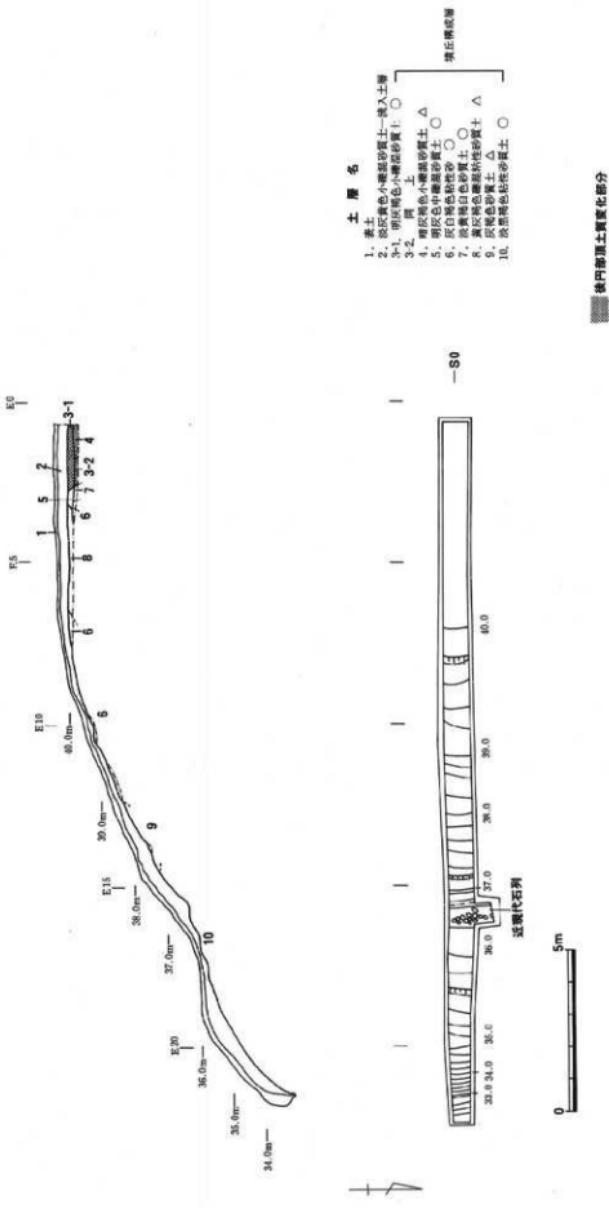
【遺物の出土状況】後円部においては全体に埴輪の出土は少なかったが、形象埴輪の家形、甲冑形の破片の出土が他に較べて多かった。土師器も小片ではあるが他に比して多く出土した。また、後円部頂では廐土の精査に努めたところ、不明鉄器片が若干出土した。現在銷落とし等の処理が済んでおらず、器種が判明していないので、次回の報告としたい。なお、後円部西トレンチ西端近くで、墳丘面をきりこむ径1.3mの円形の土坑を確認した。ここからは14世紀前後の土師器皿数点が出土している。祭祀的な性格をもつ土坑かと思われる。



第3図 後円部北及び南トレンチ平面・土層図 (1/150)



第4図 後内部西トレンチ平面・土層図 (1/150)



第5図 後円部東トレンチ平面・土層図 (1/150)

3. くびれ部の調査

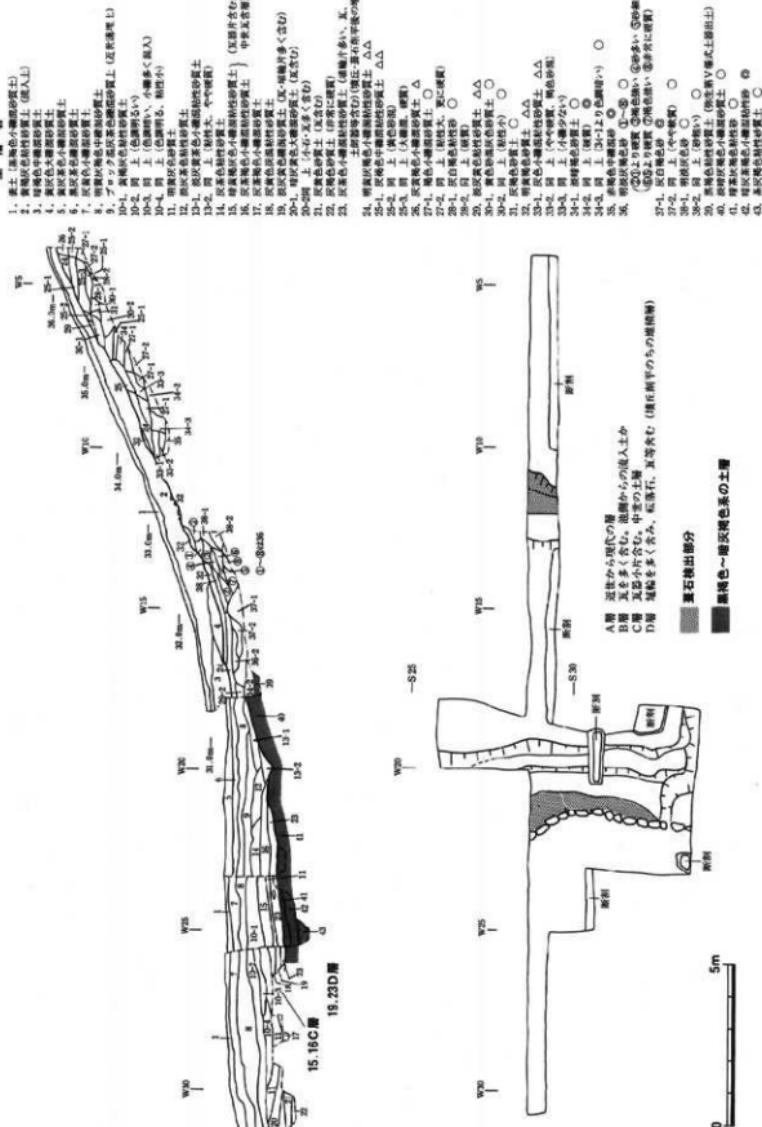
まず第1次基礎調査において、後円部仮中心点から主軸推定線上に南へ37.6mの地点を基点（くびれ部基点）とし、西側に幅1m、東西長29mのトレンチを設定したところ、段築平坦面の痕跡を確認した他、トレンチの下方で大量の葺石の転落石の集積を確認した。このため第2次基礎調査として、この部分を拡張して調査を行ったところ、葺石の残る墳丘裾部を検出した。拡張区の調査面積は39m²である。

【拡張区の調査】流入土はくびれ部基点から西20m地点以西で厚くなり、西下がりに堆積する。流入上全体から埴輪・瓦片が多く出土した。くびれ部基点の西26m地点までは、現地表下1.0mまで、近世陶磁器片を含む黄灰色～灰茶色の小礫混砂質土層が堆積する。調査区の南では、現地表下0.8mの黄褐色粘性砂質土層を切り込む、南東から北西方向の石積みの溝を確認した。近世頃のものと思われる。この下には、現地表下1.4mまで瓦器片を含む暗黃褐色～灰茶褐色の小礫混砂質土層が堆積する。さらに下には、現地表下1.8mまで白鳳時代～奈良時代の瓦片、土師器片、須恵器片とともに、葺石の転落石、埴輪片を大量に含む灰茶色小礫混粘性砂質土が堆積していた。これを除去して、葺石の良好に残る墳丘裾部の斜面を検出した。くびれ部基点から西26m地点以西では、瓦片を多く含む砂質土層が池側から流入した状況で現地表下1.9m以上堆積しており、墳丘面を確認し得なかった。墳丘裾部は南北方向にして約5m分検出した。北側で後円部と前方部のつなぎめの部分（以下、便宜上くびれ部屈折点と呼称）を確認した。くびれ部屈折点は、後円部仮中心点から南29.25m地点、西21.6m地点になる。屈折部分の角度は約140°を測り、主軸ラインに対し、10°前後の開きをもって前方部方向へ直線的に延びる。葺石は長軸長25～50cmの石を基底石に据える。基底石のはほとんどが1段積みであるが、1ヶ所2段積みになっている箇所がある。2段積みになっている部分については、墳丘面を掘り込んで下段の石を据えているが、残りの1段積みの部分は直接墳丘面に据えている。基底石の最下端の高さは標高28.9m前後になる。葺石の葺き方は規則性がみられる。まず、基底石は後円部側から前方部側に向かって、設定している。次に基底石に直交する区画石を配し、この間に長径20cm前後の石を葺いている。少なくとも2箇所の区画石が配されているようである。1箇所目はくびれ部屈折点の地点、2箇所目はくびれ部屈折点から南へ約1mの地点である。可能性のある一ヶ所はさらに南のくびれ部屈折点から南へ約2.5mの地点である。くびれ部屈折点の区画石は長軸長40cmの大きめの石を配する。この南の区画石は長軸長30cm前後の石を配している。この間は屈折の微妙な部分にあたるためか、平均15cmまでの小さめの石を区画内の三角形の部分を、充填するように葺いている。2箇所目の区画石の南側での葺石の葺き方は、区画石の南約0.5mの地点で、基底石の上に辺40cmの三角形の大石を積み、この斜辺に沿うようなかたちで斜めの目地を通して、南西から北東方向へ積み上げ、この工程を繰り返している。

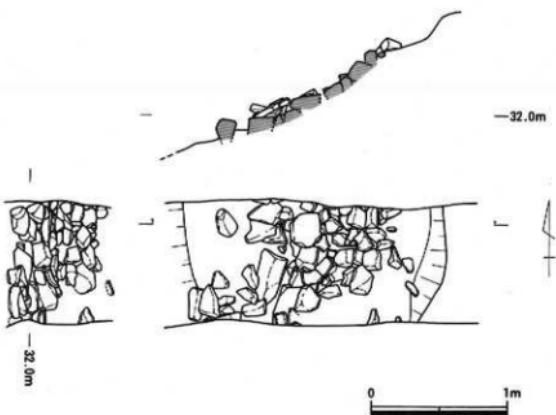
【墳丘裾部西側の平坦面】ここでは、墳丘面が標高28.8～28.9mのやや西下がりの平坦面をなしており、基底石から西へ5m以上続いている。長径40cmまでの石が載る。原位置を保つものであるか否かは判断し難いが、基底石のラインに長軸が平行するものが多い事が注意される。トレンチ南壁の一部に沿って、断割をいたれたところ、厚さ0.2m程度の茶灰褐色系の粘砂層が、3層以上堆積するのを確認した。この層が人為的な盛土層であるか否か判然としない。また、周濠内の堆積層はまったく確認できなかつた。このことから、この平坦面については、墳丘裾部と周濠部との間の基壠状の部分になる可能性もしくは、この平坦面が段築最下段の上面になり、墳丘裾がさらに下方に存在する可能性がある。

【埴輪等の出土状況】原位置を保つ状態の埴輪は、全く確認できなかった。埴輪片は葺石直上の灰茶色小礫混粘性砂質土層から、最も多く出土している。この層は厚さ0.3m前後を測り、埴輪片とともに葺石の転落石を多量に含む。さらに、土層の色調・質が、墳丘構成層と似ており、削平された墳丘構成層の堆積したものとみられる。特に基底石の西側では古墳時代の土師器の高杯（370）、奈良時代頃の土師

土層名



第6図 くびれ部西トレーン平面・土層図 (1/150)

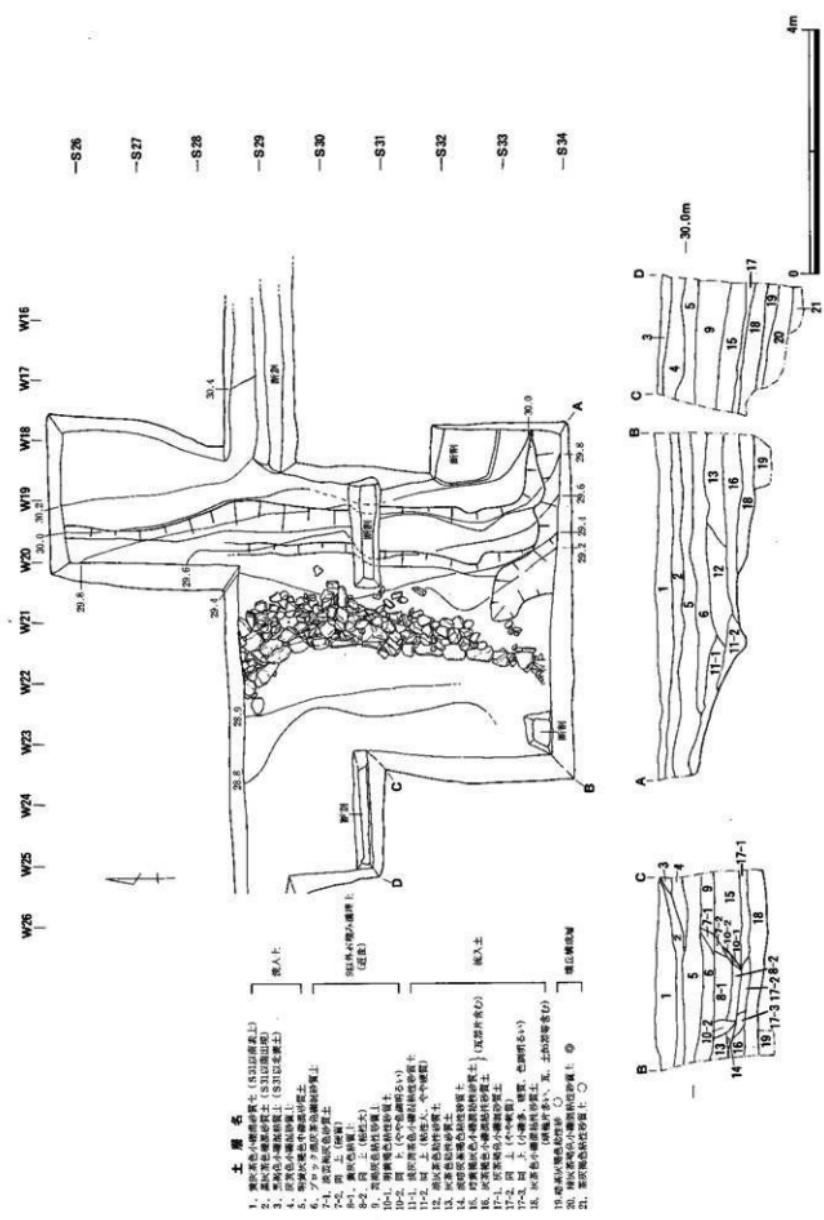


第7図 くびれ部西トレンチ段築平坦面付近墓石平面・見通し断面図 (1/40)

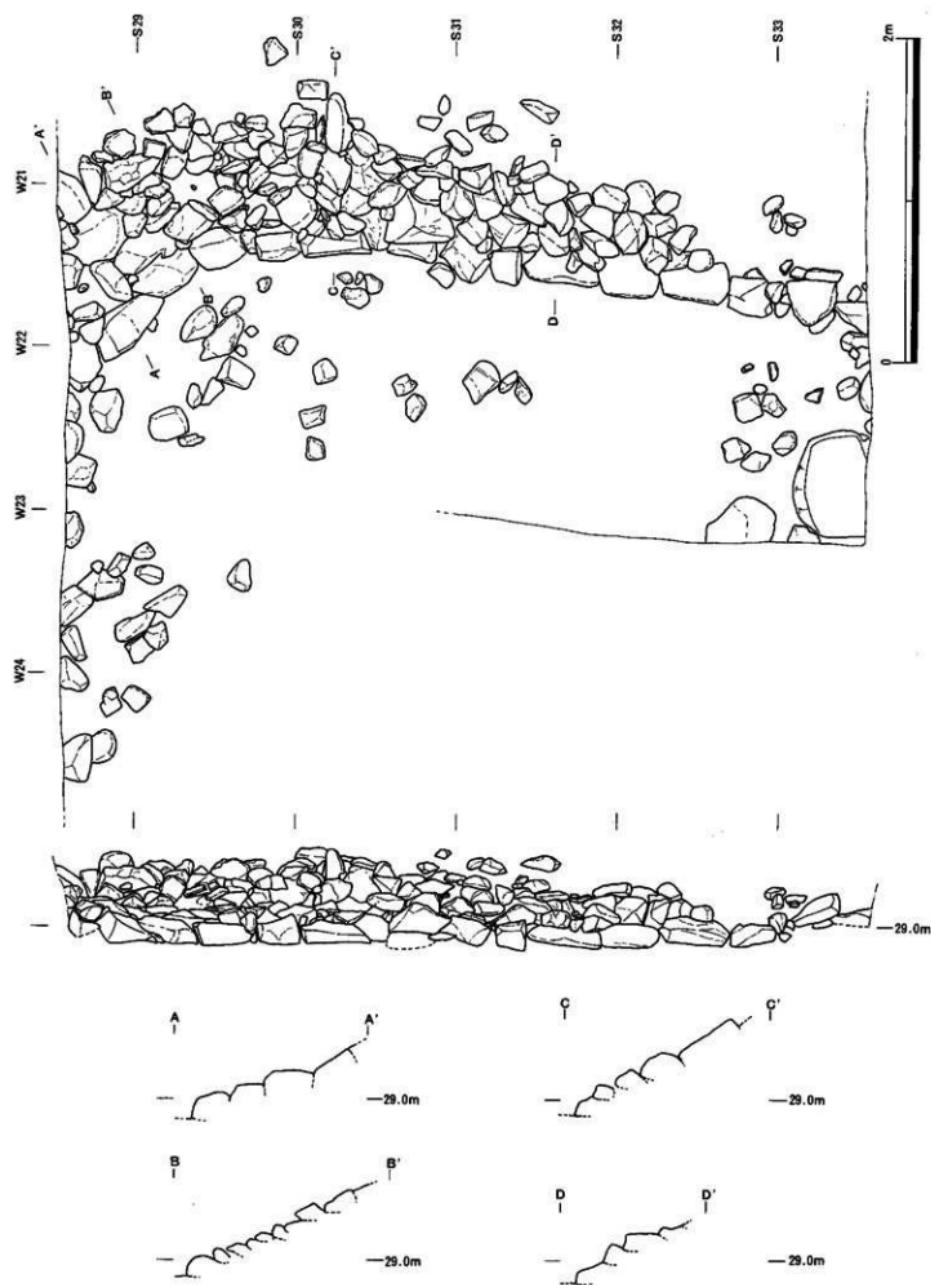
器の羽釜(381)などとともに朝顔形埴輪、壺形埴輪、蓋形埴輪、円筒埴輪の破片が集積していた。埴輪集積は墳丘直上ではなく、ほとんどが灰茶色小穂混粘砂層中のものである。また、西側平坦面の上面を精査したが、埴輪を樹立した痕跡は確認できなかった。このことから、少なくとも奈良時代頃には墳丘の削平が行われ、段築平坦面に樹立された埴輪が墓石とともに転落破損し、集積したものと考えられる。段築平坦面の円筒埴輪列には壺形埴輪、蓋形埴輪が配されていた可能性が考えられる。

【段築平坦面の痕跡及び上段斜面】くびれ部基点から西10.3~11.8m地点、標高31.8~32.8m付近で段築平坦面の一部とこれにつながる上段斜面を検出した。平坦面の幅は約0.8m遺存し、これより下は削平されていた。墓石は平坦面の一部から上段斜面の高さ0.6mまでの範囲にかけて遺存していた。墓石は長軸20cm~30cmのやや大きめの石を基底石とする。この奥にも大きめの石が据えられていることから、基底石は二列に配されていた可能性もある。この上に長径20cmまでの石を南西から北東方向に斜めの目地を通して積み上げている。この斜面の傾斜角は約30°を測る。墓石の石材は墳丘裾部とともにほとんどが黒雲母花崗岩である（本書付論1参照）。

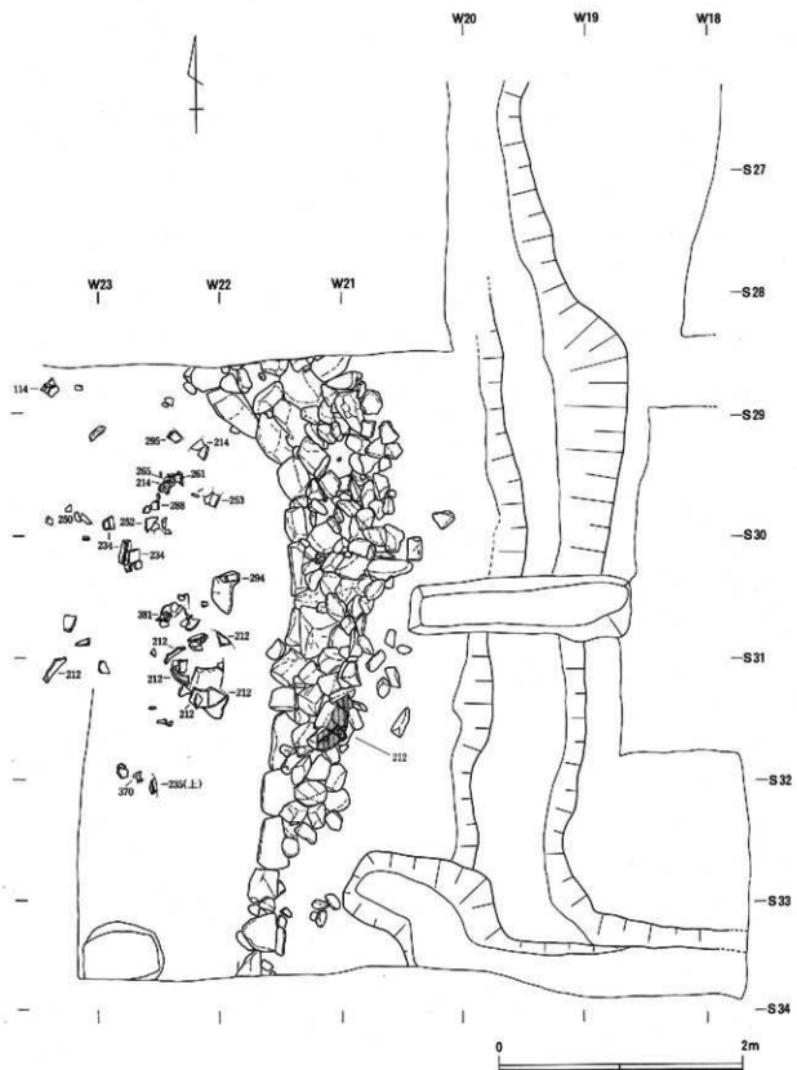
【断割での墳丘構成層の観察】くびれ部西トレンチでは、墓石遺存部以外の南壁沿いに断割をいれ、墳丘構成層の観察を行った。墳丘構成層は砂質土・粘性砂質土が主体となる。標高30m以上では、水平に堆積する部分と斜めに堆積する部分があり、人為的な盛土と捉えられる。まず、墳丘下段斜面では、標高30~30.5mに二つの瘤状の土層よりなる水平から西下がりの土層があり、この東上方に細かなプロック状をなす西下がりの土層がみられる。墳丘の上段斜面では、標高33.0m付近、標高34.1m付近に水平な面が形成されているようにみえる。そしてこの水平に近い土層の間に西下がりの土層がみられる。盛土の方法は、断割の深さが浅いため判然としないが、水平近く土を積んだ段状部分を形成したのち、上段と下段の間に土を充填して斜面を形成するという作業を、一定単位繰り返していたのではないかと考えられる。標高30m以下では、くびれ部基点から西17m地点付近の黒褐色粘性砂質土層（第6図39）には弥生時代の土器片が含まれていた。後円部西トレンチにおいても、弥生時代の土器片、古墳時代の土器片を含む黒色小穂混粘砂質土層を標高29m付近で確認している。くびれ部西トレンチでは、茶灰褐色系の粘砂層が標高28.06m以下まで堆積することを確認している。くびれ部西側においても、標高30m以下は墳丘築造前の土層である可能性がある。



第8図 くびれ部西トレンチ拡張区平面・土層図 (1/80)



第9図 くびれ部西トレンチ拡張区検出墓石平面・立面図 (1/30)



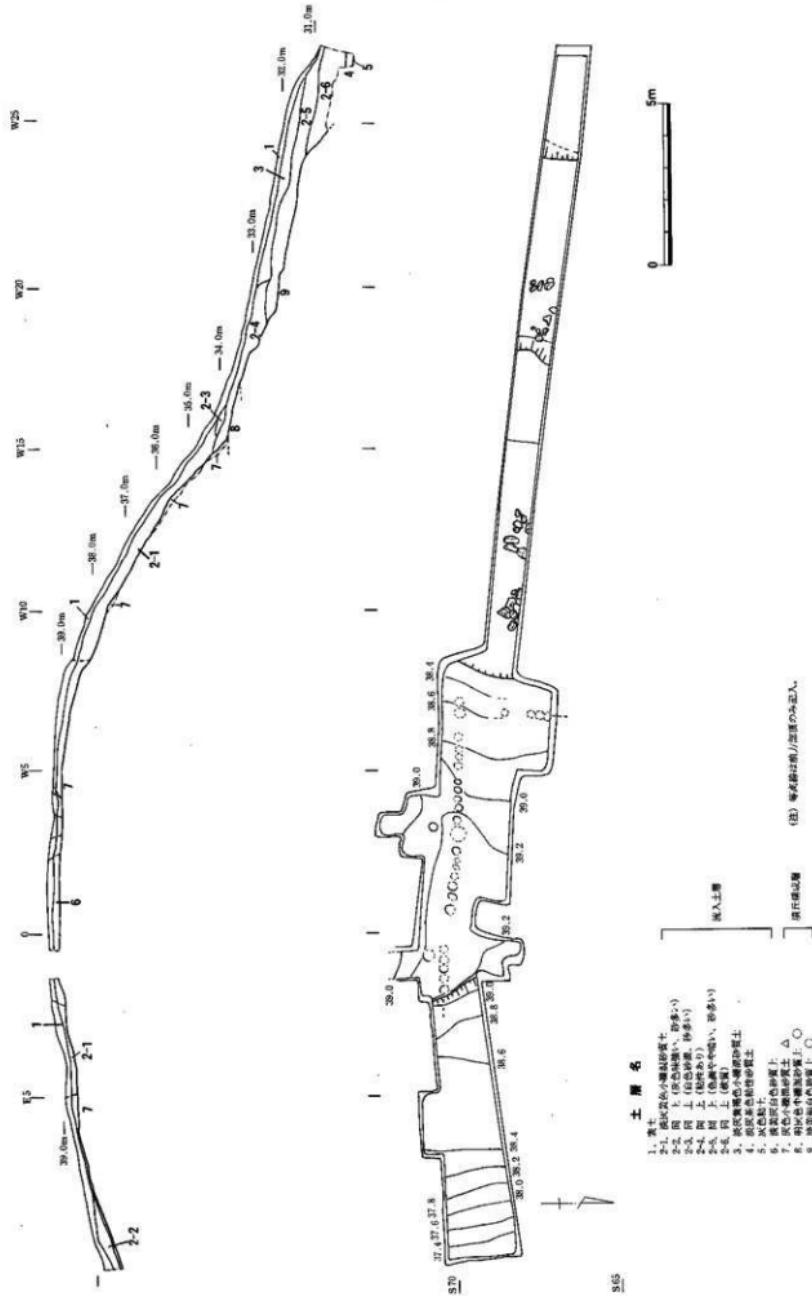
第10図 くびれ部西トレンチ拡張区埴輪出土状況図 (1/40)

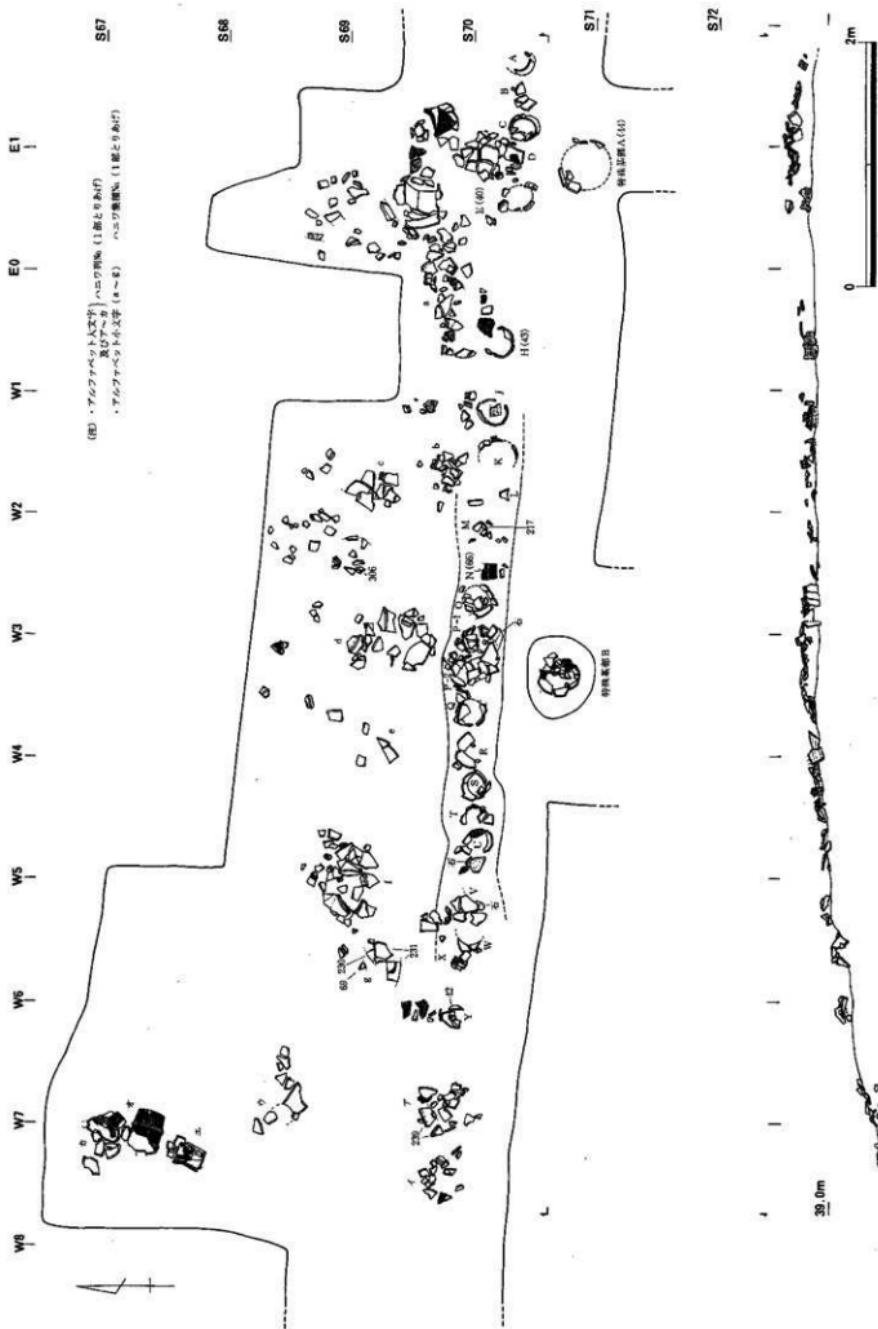
4. 前方部の調査

前方部では後円部仮中心点から南へ仮主軸ライン上の68.4mの地点を基点とし（前方頂部基点）、ここから斜面に直交する東西方向と、主軸方向の前方部前面との3ヶ所にトレントを設定した。トレントの長さは西トレントは36.4m、東トレントは13.6m、南トレントは25mである。トレントの幅は、頂部においては埴輪の出土状況に応じ拡張を行ったが、他は幅1m程度である。前方部においても、墳丘面は全体に削平を受けていたが、前方頂の埴輪列の一部が残存しており、埴輪列の樹立構成を知る良好な資料を得た。

【前方部西及び東トレントの流入土・盛土】流入土の厚さは、頂部では0.25m～0.3mと薄いが、斜面部から下方へ次第に厚さを増す。前方部西トレントの上段斜面では厚さ0.6m前後を測り、段築平坦面の痕跡付近では一旦厚さを減じ、再び厚さを増して、トレント西端では1.3m以上に達する。墳丘盛土については、断割をいれていないため、墳丘面での状況であるが、墳丘上段付近では非常に軟質の灰色小礫混砂質土であり、これより下は西側では、硬質の明灰色中礫混砂質土、淡黄褐色白色砂質土になる。また、墳丘面は西トレントでは仮主軸ラインから西8.1m付近、標高38.4m付近までは、やや西下がりの緩やかな傾斜であるが、これより下は傾斜を強める。東トレントでは仮主軸ラインから東6.7m付近、標高38.4m付近までは、比較的緩やかな傾斜であるが、これより東側は傾斜が強まる。この西側と東側の傾斜変換点の間が、前方頂平坦面の本来の範囲を示すものと考えられる。

【前方部頂埴輪列】前方部頂部の南よりで、東西方向に並ぶ埴輪列を約8.3m分確認した。この埴輪列は、墳丘の仮主軸ラインから西7m地点付近で、コーナーとなり、さらに北方向へ延びる。埴輪列は西側を中心に残存していたが、流入土を除去すると埴輪の底面近くまで露出する状態であり、かろうじて墳丘面に載る状態であった。墳丘面は仮主軸ラインから西へ5.3m、東へ2mの範囲では、標高39.0～39.2m前後の平坦面であるが、これより先では、墳丘下方へ緩やかに傾斜する。この平坦面の範囲は埴輪列の残存する範囲にほぼ対応している。この部分では埴輪の底端の高さは、標高39.1m前後であるが、埴輪列の東側の4個体（埴輪A～D）については、墳丘面から浮いた状態であり、西側の埴輪の底端の高さより15cm程度高い。これより東側では、墳丘面が削平により落ち込み、埴輪列をまったく検出できなかった。また、平坦面より西側では、墳丘面が緩やかに傾斜し、コーナー部分の北側では4個体分が削平を受け消失しているが、その北側では3個体が西側へ転倒した状態で残存していた。東西方向の埴輪列は、24個体分確認した。これは座標南北軸に対し西で北へ3.5°振れる。部分的に消失しているので、本来は31個体程度樹立されていたものと思われる。埴輪列の底径は平均20～25cmを測る。埴輪列の南へ外れた位置で、単独で樹立された基部を2ヶ所確認している。東側の基部（特殊基部A）は埴輪列から南へ0.5m、仮主軸ラインから東へ0.75mの地点に位置する。長径33cmを測るものであり、近くから同一個体とみられる口端部に突包をもつ円筒埴輪の口縁部が出土している。西側の基部は（特殊基部B）は埴輪列から南へ0.6m、仮主軸ラインから西へ3.3mの地点に位置する。短径約28cm前後を計る。特殊基部Aと特殊基部Bとの間の距離は約4.1mである。また、特殊基部Bから西側コーナー部分までの間隔は3.6～4.1mと想定され、特殊基部Aと特殊基部Bとの間、特殊基部Bと西側コーナー部との間は等間隔になる可能性がある。埴輪列内では、仮主軸ラインから西へ約3m地点の基部（埴輪P）の上に落ち込んだ状態で、蓋形埴輪の立筋の破片、軸受部の破片が出土している。この蓋形埴輪については、円筒埴輪の上に載せられていた可能性が高いが、基部に落ち込んでいるのは、蓋形埴輪の上半の部片のみである。このことから、この蓋形埴輪はすぐ南の特殊基部Bの上に載せられており、北側へ転倒して上方の部片のみが、埴輪列内に落ち込んだ可能性が高い。また、特殊基部Bの周辺には口端部に突包をもつ円筒埴輪の口縁部片が出土している。この西側、仮主軸ラインから西7m付近の埴輪列



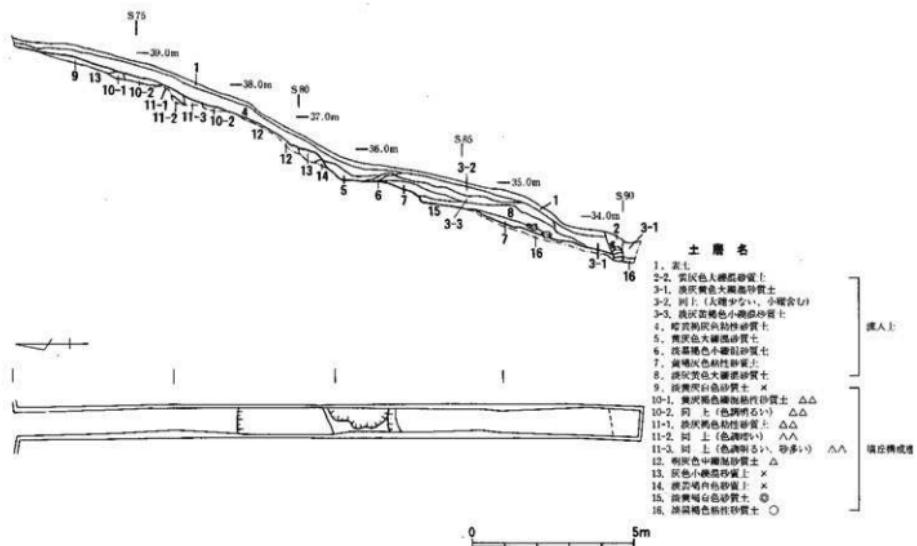


第12図 前方部頂核出埴輪列平面・立面図 (1/40)

内アとその付近にも、蓋形埴輪の笠部の破片の他、口端部に突帯をもつ円筒埴輪片等が出土している。この部分は埴輪列の西側のコーナーにあたることから、埴輪列内アの南側にも、特殊基部Bと同様の基部の存在した可能性がある。また、埴輪列の北側1mの範囲では、壺形埴輪の体部や壺形埴輪もしくは朝顔形埴輪の口縁部が、個体ごとにある程度まとまった状態で出土した。まず、壺形埴輪の体部は、埴輪列から北へ0.7m前後外れた地点、仮主軸ラインからは東へ0.25m～0.5mの地点で、片身が破損した状況で、上部を西に向けて倒れていた。また、朝顔形埴輪もしくは壺形埴輪の口縁部のまとまりは大きくみると4ヶ所あり（a群、c群、d群、f・g群）、a群とc群、c群とd群との間は1m程度、d群とf・g群との間は2m程度の間隔がある。f・g群のf群は、口縁部内面を下にして柄を伏せたような状況で出土している。他の群は、ほとんど口縁部外面を上に、口端部を南側の埴輪列側に向けて、北側から倒れ落ちた状況で出土している。調査した範囲では、北側に埴輪列の痕跡を検出できなかった。このことから調査区のさらに北側、今回検出した埴輪列のさらに内側に埴輪列の存在する可能性があり、一定間隔で壺形埴輪・朝顔形埴輪を配していた可能性がある。また、埴輪列の掘り方については、ほとんどが削平のため消失していたが、東西方向の埴輪列の一部で幅0.4m前後の溝状の布掘りの掘り方を検出した。埋土は淡灰黄色小礫混砂質土である。これは埴輪基部の底端に近いレベルでの検出であったにも関わらず、輪郭を検出し得ている。のことから、後述する後円部裾北側平坦面上の埴輪列と同様、掘り方を構築したのち、掘り方内の底面に土を入れて、埴輪の高さを調整しながら、樹立しているものと思われる。また、特殊基部の掘り方については、特殊基部Aは掘り方が削平を受け消失したとみられるが、特殊基部Bについては、南北径0.54m、東西径0.67mの円形の掘り方を検出した。埋土は淡灰黄色小礫混砂質土である。

【前方部西斜面】埴丘面の遺存状況は標高33.8m以上の埴丘上段付近は比較的良好であったが、これより下は大きく削平を受けていた。しかしながら、段築平坦面の痕跡とみられる緩傾斜面を確認した。埴丘斜面は仮主軸ラインから西15.4m付近、標高33.8m付近までは傾斜角40°前後の急斜面であるが、これより西は緩傾斜面となる。くびれ部の段築平坦面の標高が32.0m、前方部前面のそれが33.0m前後であることから、恐らく段築平坦面の痕跡を示すものと捉えられる。また、この緩傾斜面の下方、仮主軸ラインから西18.3m～20.8m地点では、長軸径10cm～30cmの石が30個余り遺存していたが、削平された埴丘面上に載るものであり、原位置を保つものではない。また、上段斜面の仮主軸ラインから西9.2m～12.5m地点においても、埴丘面上に10cm～35cmの石が20個程遺存していた。原位置を保つものである可能性があるが確定し難い。

【前方部南トレンチ】埴丘面の遺存状況は標高36m前後以上は比較的良好であるが、これより下は大きく段状に削平された状況であった。ここでの流入土は斜面上方では、厚さ0.4m～0.5m前後であるが、斜面下方では厚さを増し、厚さ1.0mに達する部分がある。埴丘盛土は断割を行っていないため、埴丘面での状況であるが、斜面上方の標高35m以上では、非常に軟質の黄灰褐色～淡灰褐色の粘性砂質土であるが、これより下方では、比較的硬質の淡黄褐色白色砂質土、淡黒褐色粘性砂質土層になる。南端で現代の石垣が出土した。このトレンチのすぐ南では、昭和63年度の調査で埴輪列が検出されている。これは前方部前面の段築平坦面に樹立された埴輪列になるが、標高33m前後が埴輪列の検出面である。今回検出した埴丘面から推定される本来の埴丘上段斜面の角度との関係が注意される。



第13図 前方部南トレンチ平面・土層図 (1/150)

5. 後円部裾北側平坦面・周濠部の調査

推定仮主軸ライン上、第1次基礎調査の後円部北トレンチの延長上に幅約3m、長さ約40mの南北方向のトレンチを設定した。調査面積は約175m²である。後円部北トレンチでは、トレンチの北端で削平されて急斜面をなす墳丘面を確認している。ここでは、周濠状痕跡及びこれと墳丘部分との間の平坦面上に樹立された埴輪列等を検出した。

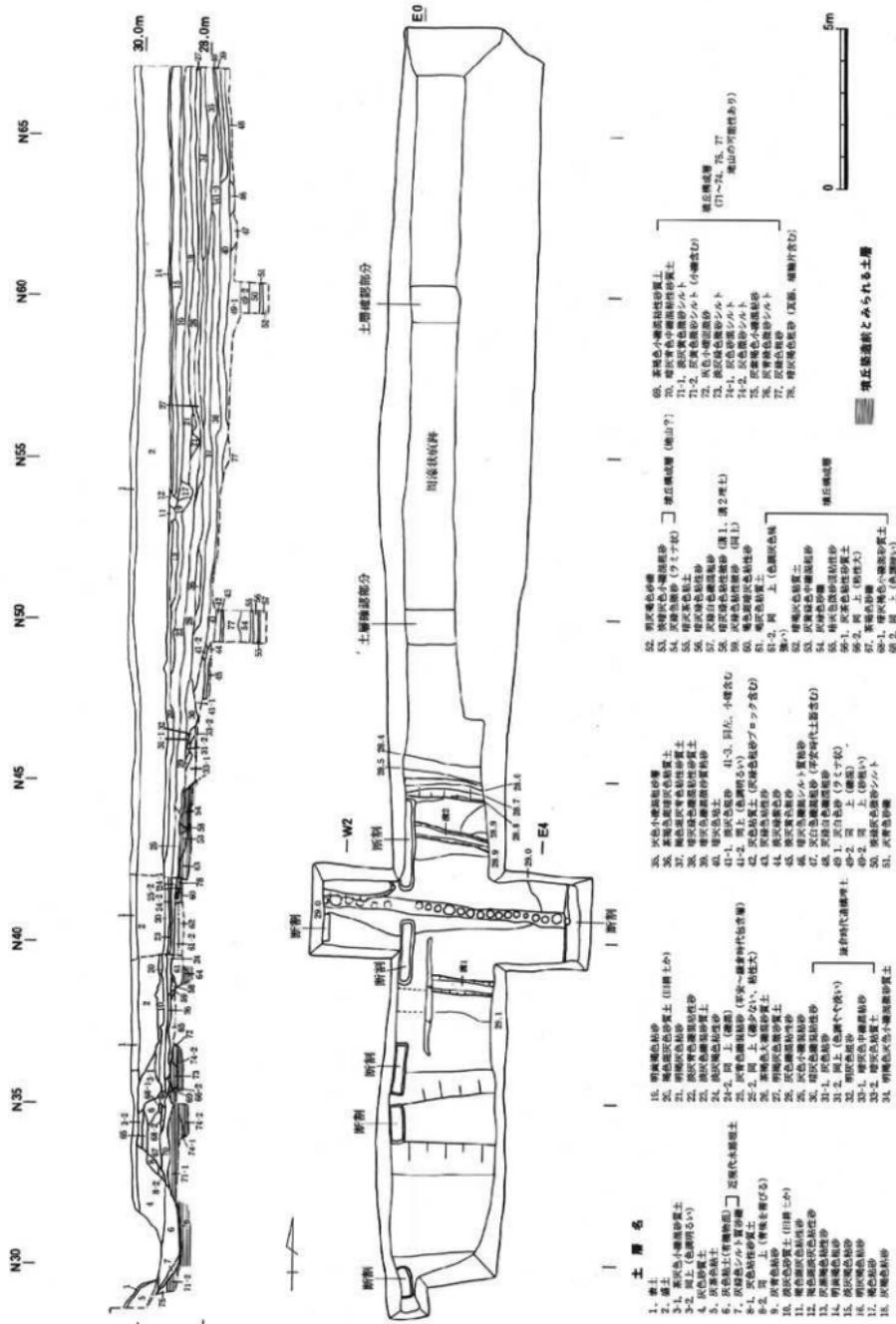
【後円部裾北側平坦面】トレンチの南端、後円部北側トレンチの北端に接して幅4.6m、深さ1.1mの東西方向の溝を確認した。これは池から水を引くための近現代の水路とみられる。この水路の北側の肩上方は高さ約0.8m、幅1~1.5m程度の土手状の高まりとなる。この部分に断割を以て土層観察を行ったところ、この部分の土層は後円部北トレンチの北端の断割で確認した後円部の埴輪構成層に類似する。このことから、この高まりは古墳の裾を切って、水路をつくった際の墳丘の残存部であることがわかった。この墳丘残存部の位置は後円部仮中心点から北34.5m地点付近になる。さらにここから北へ約5mの地点、後円部仮中心点から北40.6~41.4m地点で、東西方向の埴輪列を検出した。この埴輪列の北と南に幅0.15m~0.25mの溝を検出した(溝1、溝2)。この2本の溝は埴輪列から芯々距離で約2.3m前後の距離を保って併行する。埋土は暗灰緑色粘性砂土を主体とし、埴輪片のみを含む。埴輪列に伴うものである可能性が高い。さらにこの埴輪列から北へ3.4m前後、後円部仮中心点から北へ44.5m前後の地点で平坦面の落ち込んでいく部分を確認した。これは周濠の南肩の痕跡とみられる。このことから墳丘と周濠との間に幅8m前後、標高28.8~29.0m前後の平坦面が存在していたことになり、平坦面の中央付近に埴輪列が配されていたことになる。また、本来の後円部の埴輪構のラインについては、墳丘残存部と埴輪列の南側に存在する溝2との間に推定される。この位置については、後円部の傾斜角などを考慮して推定したところ、後円部仮中心点から北36.8mの地点付近に想定された(後

述考察参照)。くびれ部西側においては、標高28.9mで墳丘裾の基底石を検出しており、この西側には標高28.8~28.9mの平坦面を検出している。今回確認した後円部裾北側平坦面の標高とぴったりと一致しており、これとつながるものと考えられる。

【平坦面を構成する土層】平坦面は現地表下約1.1~1.5mで検出した。現代盛土が0.8m~1.1mあり、この下の近現代の耕作土とみられる褐色斑状砂質土層が存在する。埴輪列付近から北側にかけては、平坦面の直上に厚さ15cm前後の平安時代後期の包含層が堆積していた。この土層については、後述することとし、ここでは平坦面を構成する土層について記述する。トレンチの西壁沿いの一部と、拡張区の東壁に断割をいれ、上層の観察を行った。まず、トレンチ南端で確認した近現代の水路の底面が、後円部の墳丘構成層ではなく、灰緑色微砂質シルト層であったため、水路内の墳丘側に断割をいれて、確認を行ったところ、この層が後円部の墳丘構成層の下にもぐりこむことを確認した。さらに墳丘残存部高まり部分の断割においても、墳丘構成層である礫混粘性砂質土層の下にシルト層を確認した。さらに北側の埴輪列付近においても、平坦面を構成する厚さ0.3m程度の褐色灰質土、暗褐色灰質土の下に灰緑色砂礫層がみられた。また、埴輪列の北側の溝2はラミナ状を呈する灰緑色微砂層上面から掘りこまれていた。また、東側の拡張部東端付近では、埴輪列の掘り方が褐色粗砂層の上面から掘りこまれている。これらの土層は後円部等で確認した墳丘構成層の下に堆積すること、粗砂、微砂などがみられ、自然流路内の堆積のごとき様相を呈していること、遺物がまったく出土しないことから、墳丘築造前の旧地形のありかたを示す土層(以下便宜上ベース層と称する)であると考えられる。既に述べたように、トレンチ内の北側から東側にかけての一部では、ベース層そのものが平坦面を構成する土層となっているが、西側については、この上に厚さ30cm前後の褐色系の粘質土がある。このことから、後円部北側の平坦面については、旧地形の東側の高い部分はそのまま利用し、西側の低い部分については盛土を行って、平坦面を構築し、埴輪列の設置を行ったものと考えられる。心合寺山古墳の後円部の北側については、砂層等からなる一見不安定かとも思われる地盤に墳丘の築造を行っていることとなり注意される。

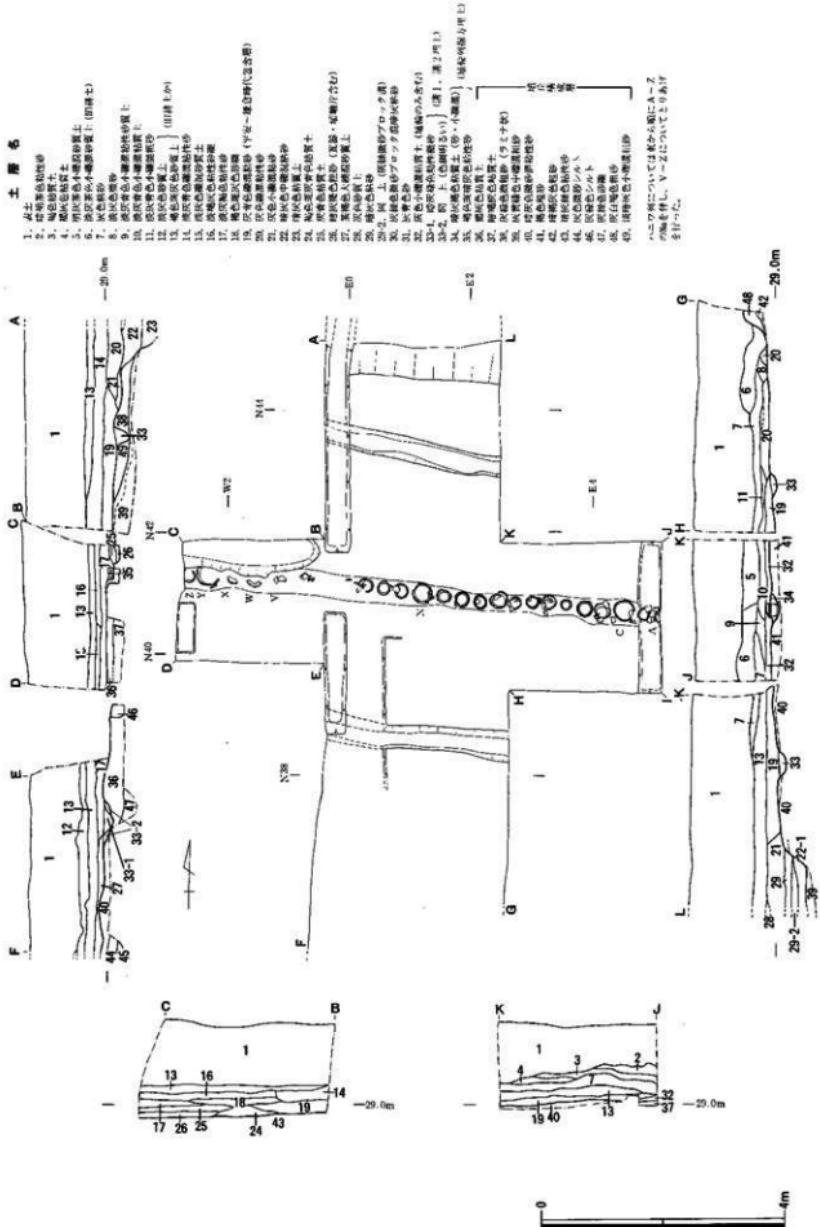
【埴輪列】埴輪列は東西方向に並んでおり、東で約5°南に振れる。約8m分、23本の埴輪を検出したが、3本分が欠損しているため、本来は26本並んでいたことになる。埴輪列はトレンチ西端の3個体分が後世の造構による削平を受け、北半分が欠損していた。また、すべて第1段タガ付近でしか残っていないかった。基部の底径は平均的には22cm前後を測るが、間に10本小型の基部をはさむようして、径32cm前後の大型の基部(埴輪C、N、Y)が配される。埴輪の並び方はトレンチ内では直線的にみえるが、詳細にみると各々の埴輪の中心を結ぶ線は一本に通らず、何個体ごとの単位がみられる(埴輪A~F、G~I、J~P、Q~Z)。このような細かな屈折は、直線である前方頂の東西方向の埴輪列でもみられるが、円弧を描いて並ぶ埴輪列が多角形を呈することも他例で知られている。今回検出した埴輪列が円弧を描いて並べられているのか、直線に並べられているのか、確定できなかった。また埴輪列の掘り方は溝状の布掘りであり、埴輪列の東側付近では基部の大きさにより幅がまちまちであり、0.27~0.42mを測る。西側付近では平均0.4mの幅を測る。掘り方の深さは7~15cmである。掘り方の底面は平坦ではなく凹凸がある。埴輪の設置方法は掘り方の底面に薄いところでは厚さ1cm、厚いところでは厚さ10cmの土を置いて設置する。第1段タガの高さは大型の基部は小型の基部より低いが、小型の基部同士ではほぼ高さが揃っている。このことからあらかじめ深い方に掘り方を設定し、下に土を敷いて高さを調整したものと思われる。

【周濠状痕跡内の埋土等】今回検出した周濠状痕跡の堆積層は南肩部では標高28.6m付近(現地表下1.6m付近)、トレンチ北端付近では標高28.0m付近、現地表下2.4m付近まで堆積する。灰色系の粘性

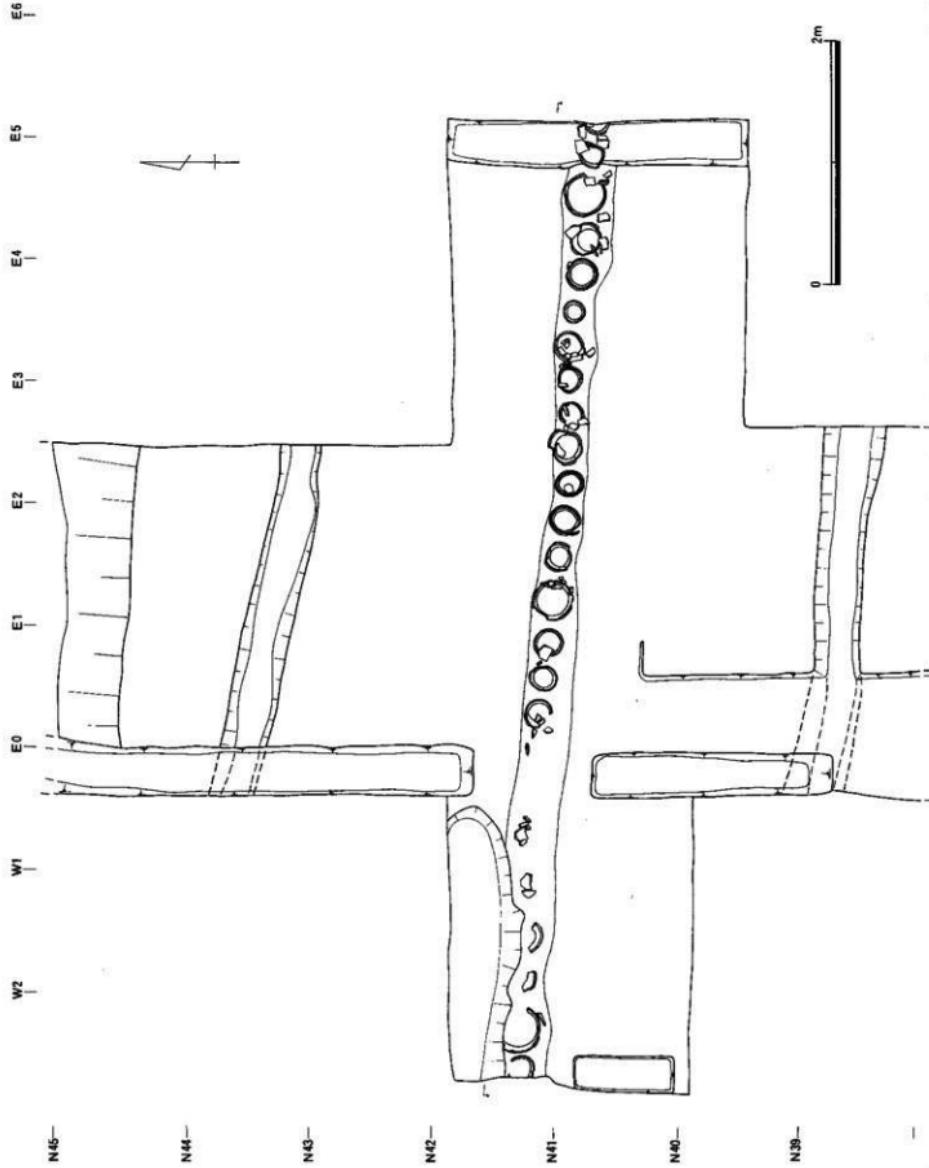


第14図 後円部裾北側トレンチ平面・土層図 (1/150)

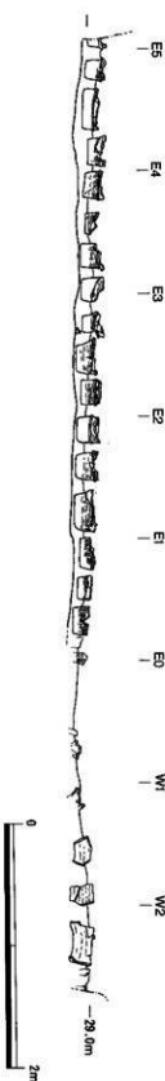
土層図



第15図 後円部橋北側トレンチ拡張区平面・土層図 (1/80)



第16図 後円部裾北側トレンチ拡張区検出埴輪列平面図 (1/40)

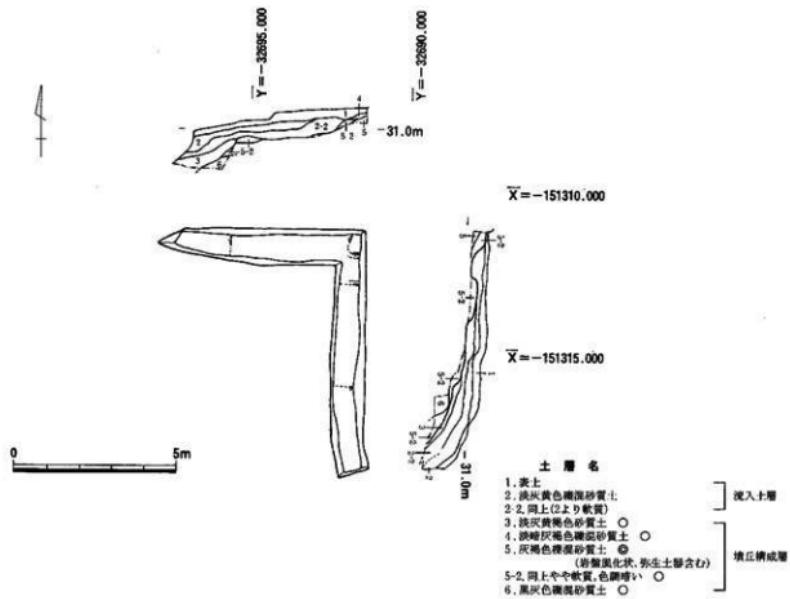


砂質土層、粘土層粗砂層等からなり、平安時代後期から鎌倉時代にかけての土器、瓦等を含む。この上には現地表下1.5m前後まで、粘砂層・微砂質土層等からなる比較的安定した土層が堆積する。この土層は土師器、瓦器の小片を含み、一部でピット状の遺構がみられた。平安時代から鎌倉時代にかけての生活面を構成する土層になると思われる。今回の調査では、心合寺山古墳本来の周濠内堆積とみられる埴輪のみを含む土層はまったく確認できなかった。また、周濠の北側のたちあがりもトレンチ内では確認できなかった。今回検出した南側の肩部についても平安時代以降の変更を受けている可能性があり、心合寺山古墳本来のものであるか否かは判断できない。周濠の底面についての確認は、トレンチが深くなり危険であるため、周濠状痕跡内の2ヶ所で部分的な深掘りを行った（土層確認部分1、同2）。土層確認部分1では標高27.6m以下、現地表下2.8m以下で遺物を含まない粗砂層、微砂層、粘土層等を確認した。土層確認部分2では標高27.4m以下、現地表下3.0m以下で遺物を含まない礫混砂層、微砂質シルト等を確認した。これらの土層は平坦面部分で確認したベース層と似ており、周濠の底面になる可能性があるが判然としない。また、周濠部南肩付近で堆積土の上面をきりこむ鎌倉時代の遺構を確認した。また平坦面の埴輪列付近から北側にかけては、厚さ15cm前後の灰青色礫混粘砂層が平坦面の直上に堆積している。この土層には土師器、瓦器、黒色土器、瓦、綠釉陶器等が含まれており、平安時代後期頃の包含層である。平坦面の上面はほとんど高低差がないが、等高線を詳細にみると、北西方向へ落ち込む谷状を呈している。灰青色礫混粘砂層は等高線の29.0mライン付近より低い部分に堆積しており、これより高い平坦面の南から東端にかけては認められず、埴輪列の東端では埴輪片のみを含む灰色小礫混粘土層が遺存している状況であった。このことから今回検出した平坦面は埴輪列付近から北側にかけては、平安時代以降に生活面として利用されていた可能性もしくは堀の堆積の一部がこの部分まで及んでいた可能性がある。いずれにしても埴輪列はこの段階で大きく削平、破壊されたものと考えられる。上記の平安時代以降の様相については、遺物、層序等の整理、検討を充分に行ない得ておらず、今回の記述は現地調査での所見に基づくものである。

第17図 後円部塙北側トレンチ埴張区
検出埴輪列立面図 (1/40)

6. 前方部南西の調査

現況の前方部南西隅付近に、幅1m前後で東西方向へ6.4m、南北方向へ7.6mの逆L字状のトレンチを設定した。トレンチの東西方向部分の東端は、昭和63年度調査時に検出された東西方向の埴輪列の西方への延長上15mの地点になる。ここでは埴丘面が大きく削平を受けており、埴輪列、葺石はまったく確認できなかった。埴丘面の状況は段状をなしており、東西方向部分ではトレンチ西端付近で下方へ急傾斜をなして落ち込む。南北方向部分でも埴丘面は凸凹状であり、トレンチ北端から南4.6m地点付近で下方へ傾斜をなし落ち込む。昭和63年度調査時の埴輪列の樹立されていた段築平坦面の高さは標高33m前後であり、今回確認した埴丘面の最も高い部分である北東隅部分の高さは標高31.5m付近であることから、大きく削平を受けているものと判断される。なお、埴丘構成層は硬質の礫混の砂質土層よりなる。トレンチの南北方向部分の北端、灰褐色礫混砂質土層から弥生式土器の底部が出土した。



第18図 前方部南西トレンチ平面・土層図 (1/150)

III. 出土遺物

1. 円筒埴輪

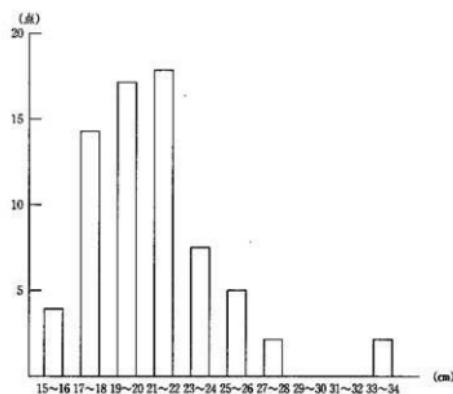
【全形】(第20～第22図) 大型品と小形品がある。大型品は底径34cm前後を測るもの、小形品は底径20cm前後を計るものである。大型品は前方頂埴輪列の特殊基部Aと後円部裾北側平坦面の埴輪列内C、N、Yであり、とりあげを行なったのは特殊基部A(44)と埴輪列内Y(50)である。特殊基部A(44)は付近で出土した口縁部の101が同一個体とみられ、口縁端部に突帶をもつ大型品になると思われるが、全形は不明である。小形品のうち全形をかろうじて図上で復元できたのは、前方部頂埴輪列付近で出土した64・65のみであるが、これも底部等の部位を欠くものである。2点とも底部から外上方へ直線的に開く形態で、4条突帶、5段構成である。下から2段目と4段目に円形のスカシをいれる。突帶間隔(タガの貼りつけ部分上端同士の間隔)については、64は下から3段目・4段目が12.5cm、最上段の5段目が10.5cmである。65は欠損部分が多いうえ、突帶が剥離しているが、下から3段目の突帶間隔が12cm前後になる。64・65ともほぼタガの間を10cm間隔に揃えている。第2段タガ直下まで残存していた底部の67は、第1段目は11.5cm、第2段が推定10.3cmである。このことから第2段から第4段までの突帶間隔は等間隔に揃え、口縁部はこれらより短く、第1段の底部はこれらより長く間隔をとり、全高60cm前後を計るものと考えられる。なお、64は最上段のスカシの直上にあたる位置に、ヘラ記号とみられる線刻を施している。65は外面に赤色顔料を塗布している。また、とりあげを行っていないが前方頂埴輪列内才は底径22cm前後を計るが、第3段目に方形かとみられるスカシをいれており、63・64とは異なる規格の小型品が存在するようである。

【底部】(第19～第22図) 今回の基礎調査で確認した円筒埴輪の底部(底端から第1段タガ付近の高さ以内まで残るもの)の総数は84点になる。このうち54点について実測を行った。後円部で10点、くびれ部で32点、前方部で29点、後円部裾北側で13点確認した。底部形態についてはバラエティに富み、個体差を越えた類型化は困難であった。法量は底径について84点中69点の計測を行い、その法量別の分布をグラフ化した。^(グラフ) 小型品の底径は15～28cmまでばらつきがあるが、17～22cmまでのものが69点中49点を占め最も多い。大型品は底径33～34cmと小型品を引き離している。小型品の底径にばらつきがみられるのが注意される。第1段目の突帶間隔のわかるものは10点あり、11.5cm^(例)～15.0cmまであり、平均13.3cmである。前方頂埴輪列内才については第1段目が16.4cm、第2段目が11.5cmであり、他に比べやや突帶間隔が長い。調整については後述するが、底部で特徴的にみられる点についてふれておきたい。外面の二次調整は略されるものが大半を占める。49のように底端近くまで二次調整を行うものもみられるが稀である。また底端付近についてのみ特別な調整を行うものもみられた。外面の二次調整のうちに粗いヨコハケもしくは板オサエとみられる調整を施すもの(8・17-33・41・50・67)、底端近くの内面にヘラケズリを行うもの(9・49・54)などがある。また、底端付近の内外面にユビオサエやヨコ方向のナデを行うものは多くみられた。また、底端については端面上に棒状圧痕の残るもの、底端に半円の切りこみをいれるものなどがあり個性的である。棒状圧痕については43のように埴輪を棒状のもので起こし上げたごとく明瞭に残るものがある。他にヘラ切り状の痕跡、わら状の植物の痕跡のみられるものがある。円筒埴輪の成形の際、作業台から外しやすくなる等の目的で植物の枝やわら状のものを底面に敷いていたものと思われる。また、底端に接し半円状の切りこみをいれるもの(28.30.35.36.50)がある。これらの形にはバラエティがあり、頂点がやや尖り気味の三角形に近い半円形のもの(28.50)や、半円形のもの(36)、小さな半円状のもの(35)、円の上端のみを切り取ったような扁平のもの(30)がある。

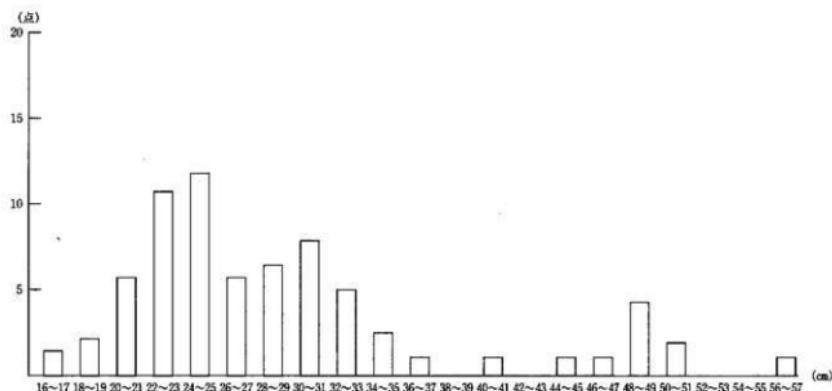
【口縁部】(第23~第25図) 今回の調査で確認した口縁部片の総数は187点であり、このうち123点について実測を行い、72点について口径の計測を行った。後円部で7点、くびれ部で69点、前方部で56点、後円部裾北側で55点が出土している。口端部付近の形状により、A・B・C・D・Eの5つに分類した。各類の特徴は下表のとおりである。各類の総数に対する比率はA類が60点で32.1%、B類が44点で23.5%、C類が53点で25.3%、D類が18点で9.6%、E類が12点で6.5%である。この比率は対象資料がくびれ部で出土したものが多く、後円部が少ないため、やや偏りをみせているものと思われる。A類と次いでC類が多く、30%程度を占める。口径については187点中72点について計測を行い、法量別の分布をグラフ化した。^(ワカ) 16cmから58cmまである。20~32cm程度のものが多く、全体の75%を占める。このなかでも25cm程度のものと30cm程度のものが最も多いが、法量の集中的な偏りはなくばらついている。類別の法量分布はA類からC類までが、20~32cmの間に分布するが、C類は35cmから40cmのものも3点ある。また、D類は出土点数が少なく資料に限界のあるものであるが、18点中の2点以外は19~26cmと比較的の口径が小さい傾向がみられる。E類は計測したすべてが46cm以上のものであり、156の57cmを除くと46~51cmの間に収まる。D類・E類は法量が偏ること、形態に特徴があることが注意される。E類は確認した11点中10点(102~111)が前方部頂埴輪列付近の出土であり、残りの1点(156)はくびれ部の出土である。さらに前方部頂埴輪列付近で出土した10点のうち1点は先述した特殊基部Aと同一個体になるものであるが、6点は特殊基部Bに近いところで出土しており、4点は前方頂部東側で出土している。特殊基部Bは径28cm前後を計るものであり、蓋形埴輪を載せていた可能性のあるものである。また特殊基部A付近には蓋形埴輪はみられないが、北へ2m前後のところで立飾片などが出土している。このことからE類は蓋形埴輪を載せる大型品の円筒埴輪の口縁部である可能性がある。D類については、その受け口状で口端部を補強する形態、口径の小さいものが多く小型の壺形埴輪の跨径と近いものが多いことなどから、壺形埴輪を載せていた可能性も想定されるが、明確な根拠を欠いており判然としない。口径については底部と同様全体にばらつきが激しい印象を受けた。また調整については、外面は二次調整が口端部付近まで及ばず粗雑になっているものが多くみられた。内面はナナメからヨコ方向のハケメが多い。内外面ともハケメのうちにヨコ方向のナデを行い仕上げている。

A類	直立もしくはほぼ直立するもの。口端面はほぼ水平でナデによる凹みをもつもの、外傾する端面をもつもの、内傾する端面をもつものがある。	
B類	ゆるやかに外反するもの。内面に屈折による稜線をもたないもの。外傾する端面をもつもの、丸く収めるものがあり、前者が多い。	
C類	くの字状に外折するもの。内面には屈曲による稜線をもつ。外傾する端面をもつものが多い。このなかで、下記の特徴をもつものをC-2類として区別した。	
C-2類	外折した口縁部をさらに短くつまみ下げる、外端面を拡張するもの。外面の形状はD類と似るが、D類が受け口の水平な端面をもつものであるのに対し、端面が内傾し、外端面の幅も狭いことから区別できる。	
D類	L字状に屈折し、受け口状の水平な端面と、突帯状の外端部をもつもの。外端面の幅は0.7cmから1cm程度である。	
E類	外面の端部に接して、幅広の突帯を張りつけるもの。突帯の幅は2.0~2.5cm程度である。	

表2 口縁部の分類表



グラフ1 出土円筒埴輪 底径法量分布



グラフ2 出土円筒埴輪 口径法量分布

出土地 種類	後 円 部	くびれ部	前 方 部	後円部幅北側	計(点)	比率(%)
A種	3	20	26	11	60	32.1%
B種	2	22	7	13	44	23.5%
C種	2	12	11	28	53	25.3%
D種	0	12	3	3	18	9.6%
E種	0	3	9	0	12	6.5%
計(点)	7	69	56	55	187	100%

表3 円筒埴輪口縁部類別出土数

【調整について】全形のわかるものがないため、ここでは底部の残りの良いものと、全形を推定復元した2点(64・65)を中心とりあげたい(右表参照)。外面調整はほとんどB種ヨコハケとみられる。静止痕はやや斜めに傾くものが多い。ほとんどが原体を反時計回りに回している。タガ間に一度の原体の回転で調整し、1単位の原体の痕跡しか認められないものが多いが、これは底部の個体が多いことによるようである。64・65の第3段～第5段についてはタガ間に原体を2度回しており、2単位の原体の痕跡が認められる。静止痕の角度は2段目より上は64では右へ5°前後もしくは垂直に近い。65の第4段は左傾するものと右傾するものの両方がある。また口縁部片のなかに左傾する静止痕を残しているもの(136)がみられた。底部については垂直に近い左傾のものが多い。原体幅は1単位のものを観察する限りでは、7～8cm前後である。静止痕間隔は3～5cm前後と比較的短いものが多い。量的には少ないが、静止痕がほとんど残らないほど原体を軽く器壁に当てて回しているもの(49・65)がある。1cmあたりの原体条数は4～5本と比較的粗いものが多い。量的には少ないが8本以上の密なものもあり、31・41のように12本の非常に密なものもある。また41・42のように二次調整には一次調整より密な条数の原体を用いているものがある。内面調整はユビによるナナメ～ヨコ方向のナデやハケメ、ユビオサエが中心である。ハケメはナデにより消された痕跡を示すものが多い。ユビオサエは粘土紐の縦目、底端付近を中心に行われている。3段目より上の残りの良い64では、タテ～ナナメ方向のナデのちにタガ附近の内面を中心ヨコ方向のナデが行われている。先述したように口縁部については仕上げのナデが行われており、底部については底端付近に特別な調整が行われている。

【スカシ】スカシの配置のわかるものは64・65の2段目、4段目の同じ位置に対向方向の円形のスカシをいれるもののみである。他は先述した前方頂埴輪列内才の3段目に方形のスカシをいれるものであり、62・63の直線方向のスカシの部分破片も方形のスカシの一部であるかもしれない。この他に心合寺山古墳の埴輪では、清原得巣氏採集資料に第2段目に方形スカシをいれるもの、第1段目に円形スカシ、第2段目に方形スカシをいれるものがある。底部破片やとりあげを行っていない埴輪列の底部にも、第2段目に円形のスカシをいれるものが多くみられ、上段のスカシの状況はわからないが、円形のスカシをもつものが多いようである。清原得巣氏採集資料の第2段に方形スカシをいれるものは、タガの形状も方形で突出するものであり、心合寺山古墳の他の埴輪に比べ古い要素を残すものとみられる。スカシの大きさは第2段目は5.5cm前後、第4段目は64・65を見るかぎりでは、6～7cmであり、第4段目の方が大きい。

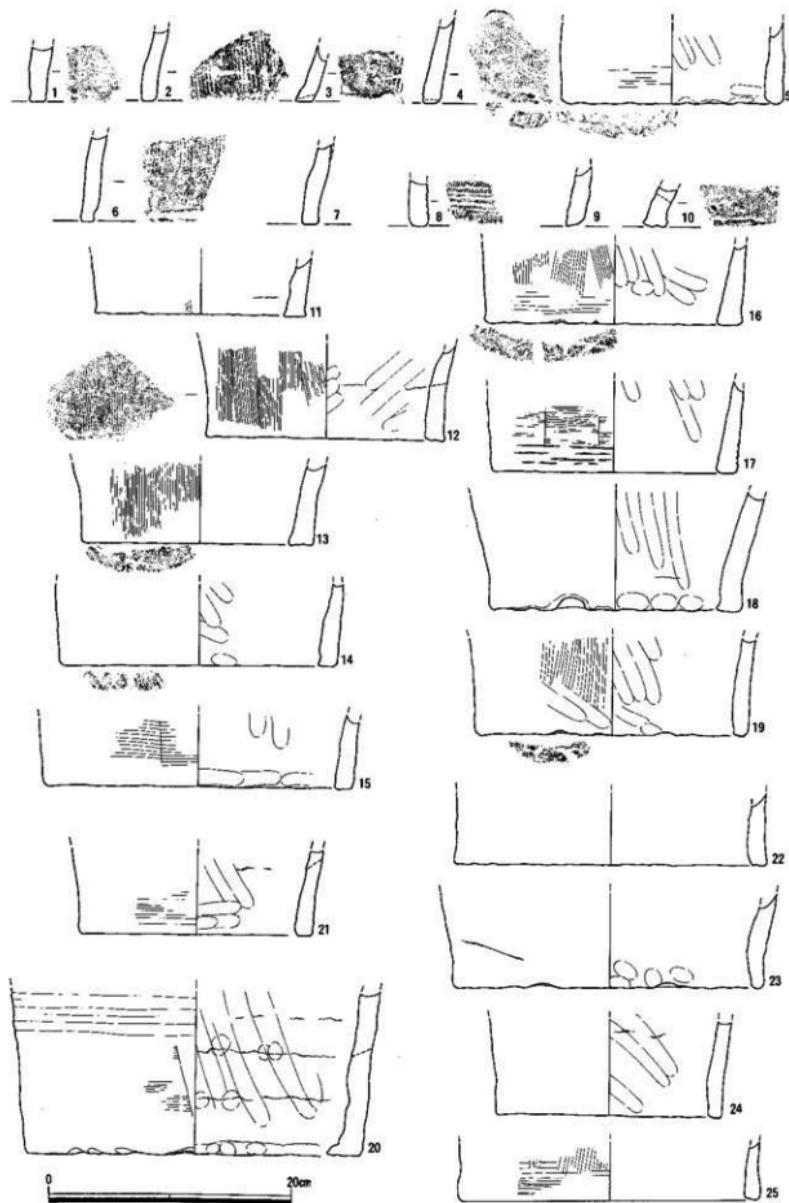
【タガ】図化していないものも含め概して台形のものが多く、やや扁平な台形のものも若干みられた。先述した清原得巣氏採集資料の方形の突出するタガは今回確認できなかった。この他にナデによりつぶれた形状のものや(45)、端面にハケメ状の痕跡を残すもの(60・61)などがみられた。

【線刻】(第22図64・第25図194～196、198～207) 線刻のある円筒埴輪は、破片資料の他に64の円筒埴輪の最上段の線刻がある。ほとんどが弦状の文様を主体とするものであるが、矢印状(一)のもの(205)も1点ある。64にみられる弦を2つ重ねた線刻については、同様のものが破片資料の200の他に、清原得巣氏採集資料にある。清原得巣氏採集資料も下段のスカシの直上位置の最上段にいれるものである。この線刻は壺形埴輪の肩部でもみられ(204)、他に昭和63年度調査時にも出土している。これらは一定の部位、位置にいれられていること、複数個体にみられることからヘラ記号とみられる。これと同じヘラ記号は大東市堂山1号墳でも出土している。大東市堂山1号墳のそれは2本の弦のうちの下側が若干短いが、最上段の第4段目スカシの直上位置にいれることも同じである。この他にも2本の弦に1本の弧がきりこむものなどがあるが、複数個体確認しているのはこの記号のみである。この記号については円筒埴輪・壺形埴輪が同じ記号をもつこと、さらに大東市堂山1号墳に同じヘラ記号をもつ円筒埴輪が存在することなどから、工人グループなどに関するヘラ記号である可能性もあり興味深い。

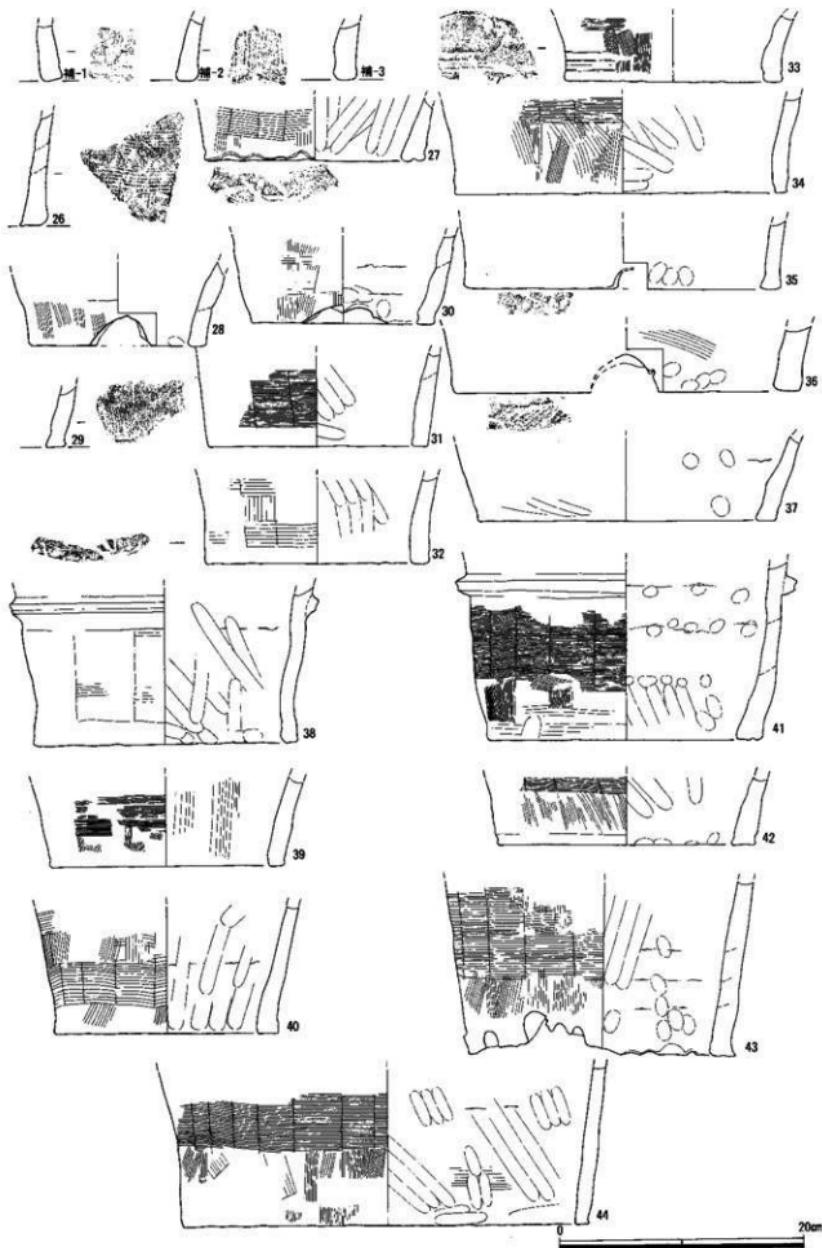
遺物番号	残存部数	発見間隔(cm)	外因調整	施文単位	距離(cm)	最高振幅(cm) [内平均値]	静止振角度	原体条数	一次調整	底部の調整	底面の状況
38 第1段タガまで	12.0	B種ヨコハケ	1単位	7.8	4.8~5.2	R3°	5本/cm	不明	ユビオサエ	—	
40 底端から10.3cm	—	B種ヨコハケ	1単位?	7.7+	2.8~4.3 (3.3)	L1° ~ L4°	4~5本/cm	タテハケ4~5 本/cm	一部ヨコナデ	植物状痕跡 棒状圧痕	
41 第1段タガまで	13.5	B種ヨコハケ	1単位	7.5+	3.7~4.9 (4.0)	R1° ~ R3°	12本/cm	タテハケ7~8 本/cm	細いヨコハケ	植物状痕跡 棒状圧痕	
42 底端から5.3cm	—	B種ヨコハケ			2.9~4.0	L2° ~ L3°	8~9本/cm	タテハケ6~7 本/cm	ヨコナデ	植物状痕跡 棒状圧痕	
43 底端から14cm	—	B種ヨコハケ	1単位	8.8+	3.4~4.4 (4.1)	L1° ~ R1°	4~6本/cm	タテハケ4~6 本/cm	ヨコナデ	棒状圧痕 へら切り状痕跡	
44 底端から12.8cm	—	B種ヨコハケ	1単位?	—	2.5~4.0 (3.0)	L2° ~ R2°	7~8本/cm	タテハケ7~8 本/cm	ヨコナデ	—	
45 第1段タガ上方まで	14.1	B種ヨコハケ	2単位?	3.7?	3.1~2.4	L5° ~ L0°	5本/cm	タテハケ5本/ cm	ヨコナデ ユビオサエ	—	
48 第1段タガ下まで	推定15.0前後	B種ヨコハケ	2単位	4.5	4.5~6.5	L3° ~ L1°	5本/cm	タテハケ5本/ cm	ヨコナデ ユビオサエ	へら切り状 痕跡	
49 第1段タガ上方まで	14.2	B種ヨコハケ	1単位?	11.2?	—		6本/cm	不明	(内面)ヨコヘ ラケズリ	植物状痕跡 棒状圧痕	
50 第1段タガ上方まで	15.0	B種ヨコハケ	2単位	(上)3.0 (下)5.0	上 2.8~6.0 (3.8) 下 2.8~4.7 (3.5)	上静止痕明確 に見えず 下 L0° ~ L10°	5~6本/cm	5~6本/cm	ヨコナデ ヨコハケ	—	
64 第2段から口縁部端まで	第2段 12.5 第3段 12.5 第4段 10.5	B種ヨコハケ	2単位	3.8~4.1	第5段上 5.9~ 6.9(6.2) 第5段 F 5.0~5.6 第3段 4.4~ 8.3(6.3)	第5段上 R4~R7 第5段 R3~R7 第3段 R0~R2	4~5本/cm	不明	—	—	
65 第2段上方から第3段まで	第3段 12.4	B種ヨコハケ	2単位	3.8~4.1	—	第3段上 L11~L12 第3段下 R9~R11	4~5本/cm	不明	—	—	
66 第2段下方まで	12.2	B種ヨコハケ	1単位	8.2	第1段 4.2 第2段 3.9~4.0	第1段 R9~R10 第2段 R9~R10	4~6本/cm	タテハケ4~6 本/cm	ユビオサエ	—	
67 第2段上方まで	第1段 11.5 第2段 10.3	B種ヨコハケ	1単位	—	第1段 4.2~4.5 第2段 7.0	第1段 L0~L4 第2段 —	3~4本/cm	タテハケ3~4 本/cm	ユビオサエ 強い板ナゲ	—	

*B種ヨコハケの方向は、49~65は不明。他は反時計回り

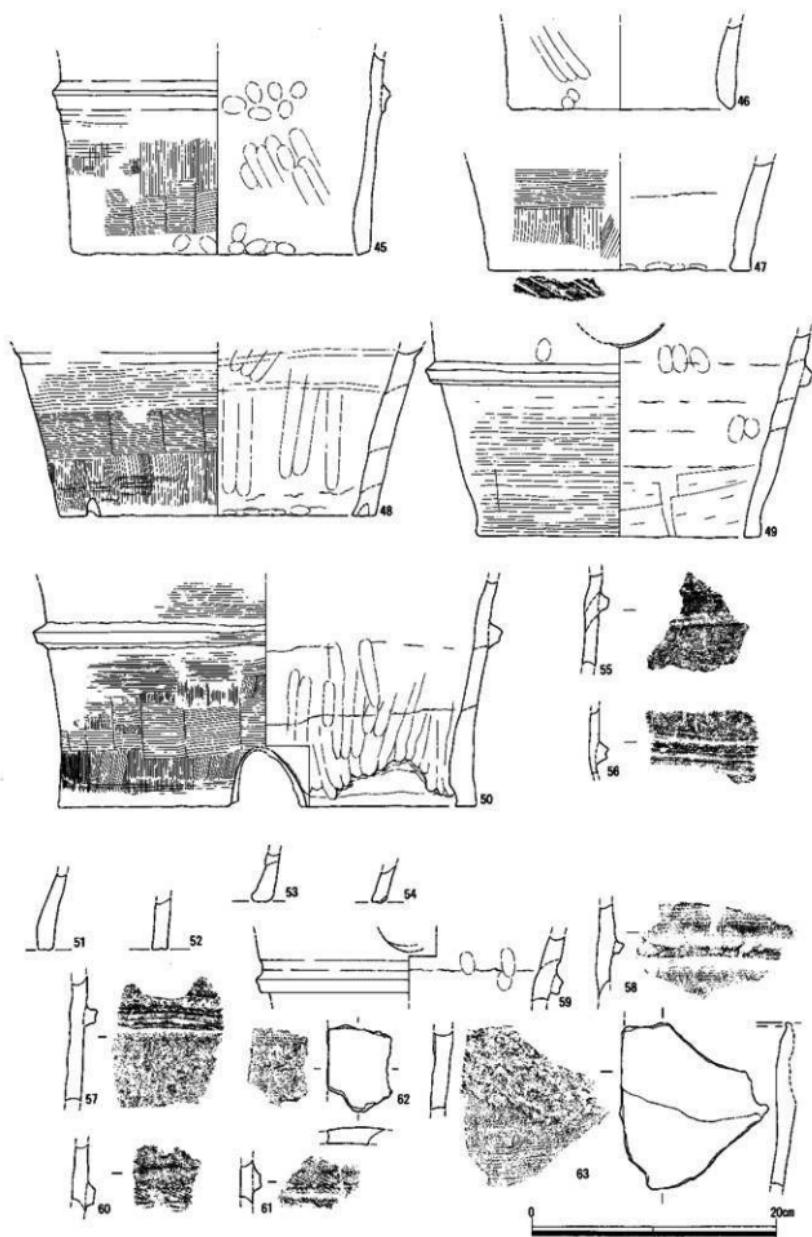
表4 出土円筒埴輪調整一覧表



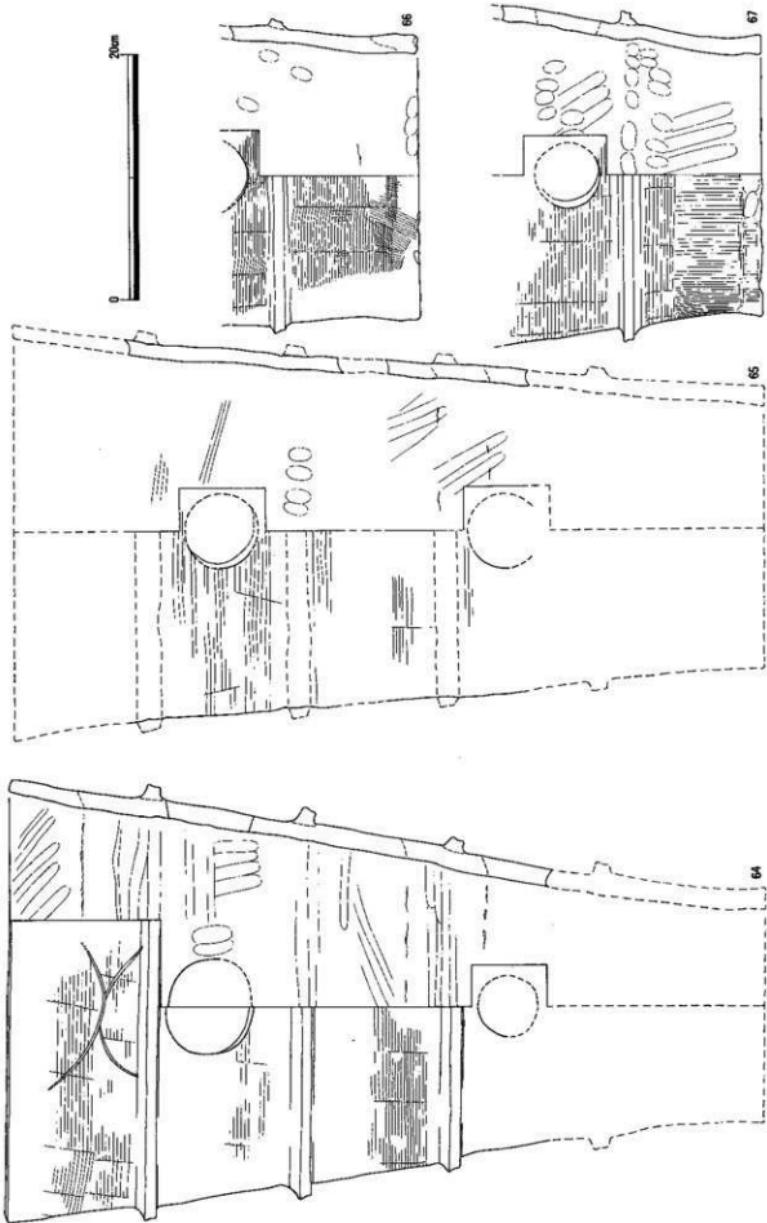
第19図 遺物実測図 (1/4) 円筒埴輪底部 (1~5後円部出土 6~25くびれ部出土)



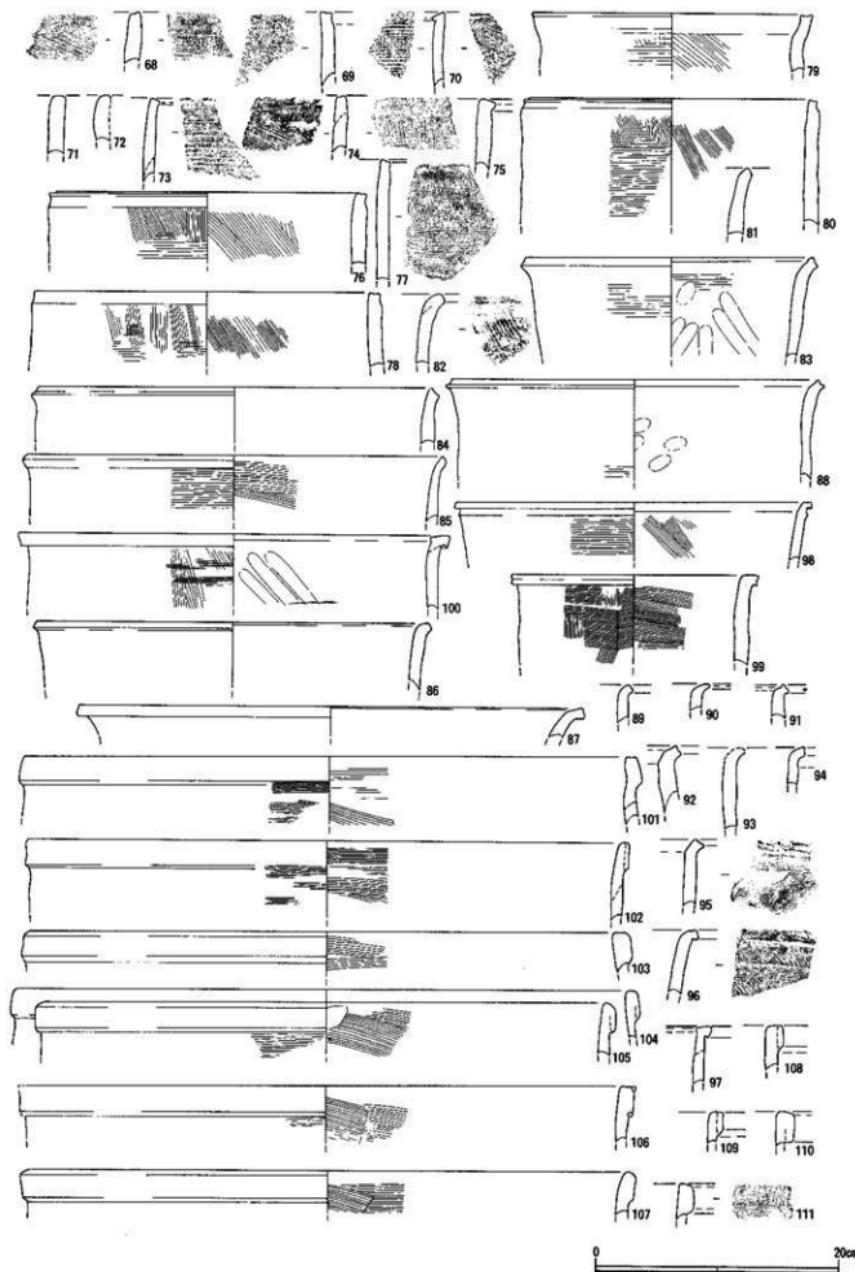
第20図 遺物実測図 (1/4) 円筒埴輪底部 (26~44 補1~3 前方部出土)



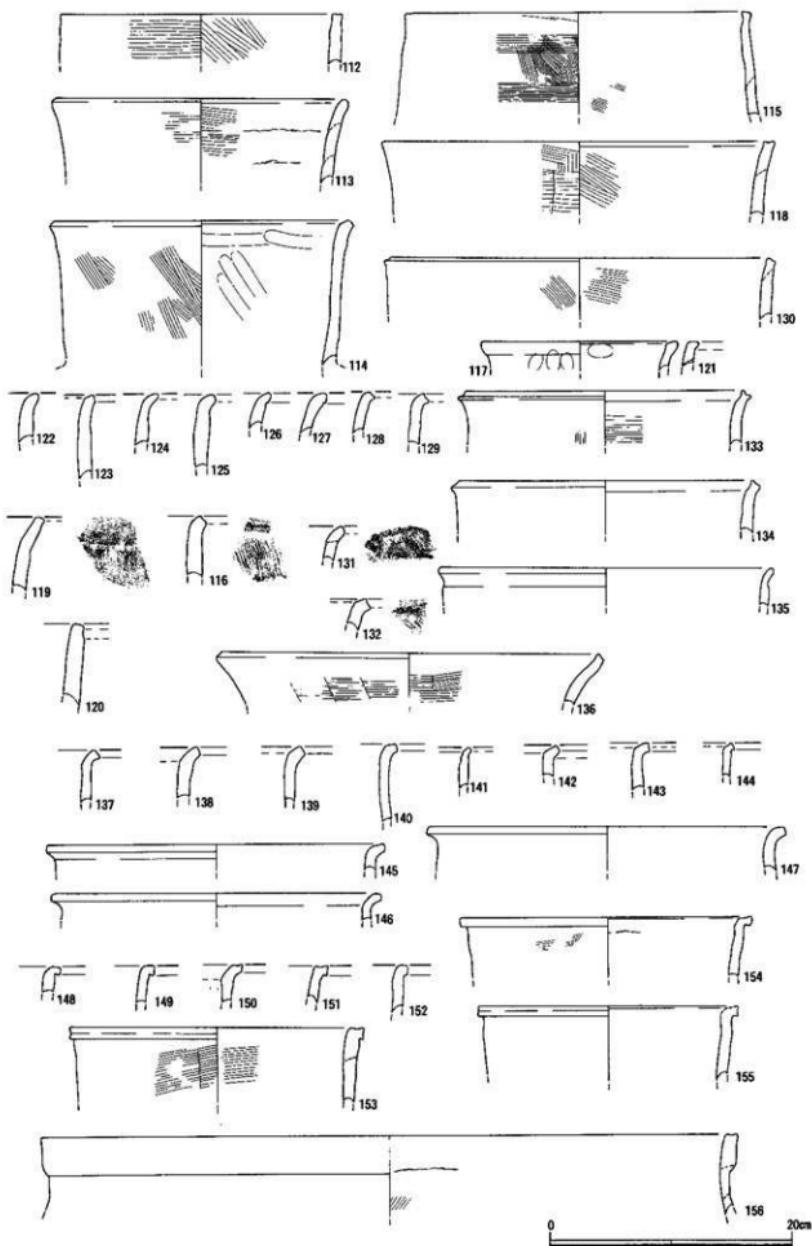
第21図 遺物実測図(1/4) 円筒埴輪底部(45~54後円部壇北側出土) 円筒埴輪体部(55~63)



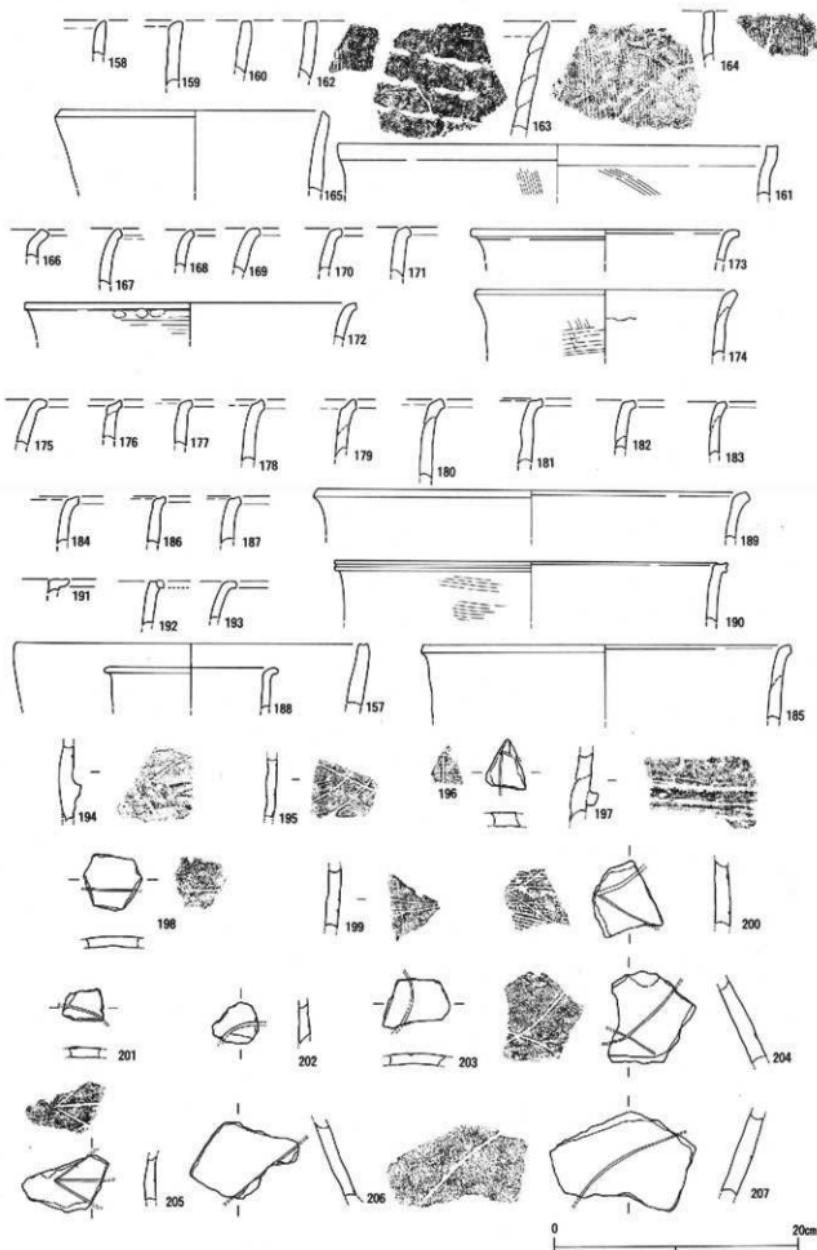
第22図 遺物実測図 (1/4) 円筒埴輪 (64~67)



第23図 遺物実測図 (1/4) 円筒埴輪口縁部 (68~81.83.85~94.96.97.99~108.111.前方部出土)
82.84.95.98.後内部出土 109.110.出土地不明)



第24図 遺物実測図 (1/4) 円筒埴輪口縁部 (くびれ部出土 112~156)



第25図 遺物実測図 (1/4) 円筒埴輪口縁部 (157~193後円部櫛北側出土) 線刻のある埴輪 (194~207)

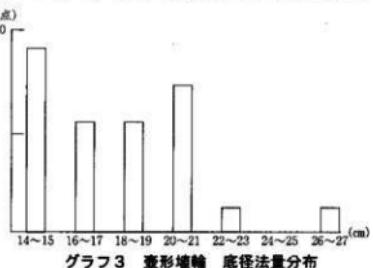
2. 形象埴輪・土師器

〔蓋形埴輪〕(第27図233・237~239、第29図268~296、第30図297~307) 蓋形埴輪は立飾片(268・269・271~274・297・298・299)、立飾部十字形基部(301)、立飾部軸部(270)、軸受部(300)の他、笠部の破片を多く確認している。笠部上半の破片は285・287・292・302であり、他はすべて笠部下半の笠縁の破片である。292・302では軸受け部と笠部との間には突帯を配する。このように全形を知り得る資料はないが、多く出土した笠縁の一部については、形態、調整、色調などから、いくつかのタイプを抽出することができた(下表参照)。笠径が50~60cm前後に推定される大型品と笠径が40cm前後に推定される小型品がある。大型品と小型品では、端部の器壁が前者が1~1.5cm前後を計るのに対し、後者が0.5~0.7cm程度と薄手である。大型品はさらにA~C類の3つのタイプがある。A類・B類とC類の違いは、一瞥してわかるほど明瞭なものである。A類・B類は色調がほぼ灰色で焼成がやや硬質なのにに対し、C類は乳白色で軟質である。形態も全く異なり、A類・B類が直線的に外下方に開くのに対し、C類はゆるやかに外反しつつ開き前者程下方に垂下しない。またC類は縱位の線刻が2本一組であること、外面を粗いタテハケで調整することが特徴的である。さらに胎土はA類・B類が地元でよくみられる花崗岩起源の長石、石英、金雲母などを含むものであるのに対し、C類はチャートの円礫がめだつものであった。A類の237・296とB類の239、C類の238・292・293について、奥田尚氏に砂礫の観察を行っていただいた結果、237・296・239については八尾市の東部山麓の、238・292・293については羽曳野丘陵、和泉丘陵の砂礫と推定されている。このことからA類・B類については地元の山麓付近で生産されてた可能性があり、C類については他地域で生産され心合寺山古墳へ持ち運ばれた可能性がある。なお、C類の色調は乳白色でやや白っぽいが、C類の238には外面に赤色顔料が塗布された痕跡がみられた。また、A類とB類では、A類の笠縁が短く、外面をナデで仕上げるのに対し、B類は笠縁がやや長く外面にヨコハケを残している。A類・B類は地元で生産されていたが、工人集団は異なっていた可能性がある。なお、小型品の胎土については筆者が観察する限りでは、地元産と思われる。なお、上記で参考にさせていただいた奥田尚氏の砂礫観察については、本報告の付論として詳述していただいた。

		形 態	調 整	色 調	焼 成	胎 土	遺物番号
大型品 笠径 60cm前後	A類	外下方へ直線的に 短く開く。	外面 ナデ 内面 ナデ	灰灰色	硬	花崗岩片含む。	236・237・286・ 296・305
	B類	外下方へ直線的に やや長く開く。	外面 ヨコハケ 内面 ナデ	淡褐色~赤褐色	硬 (A類よりやや軟 質)	花崗岩片含む。	239・295・(294)
大型品 笠径 50cm前後	C類	ゆるやかに外反し つつ、外下方に開 く。	外面 タテハケ 内面 ナデ	乳白色	軟	チャート含む。	238・290・291・ 292・293
小型品 笠径 40cm前後		ゆるやかに外反し つつ、外下方に開 く。	外面 ナデ 内面 ナデ	灰灰色	軟~硬	花崗岩片含む。	280・282・283・ 284・(275)

表5 蓋形埴輪の類型

【壺形埴輪・朝顔形埴輪】(第26図～第28図)壺形埴輪には大型と小型の2つのタイプがある。前者をAタイプ、後者をBタイプとした。Aタイプの最も残りの良いものは、前方部頂埴輪列の東側で転倒していたものである(図版7上)。基部から鈎部にかけて一体となって出土し、口縁部とのつながりは不明であった。取りあげを行っていないが、およその形状は外上方に開いてたちあがる基部をもち、外下方に笠状に直線的に開く鈎部をもつものである。基部上方に半円形のスカシを対向にいれる。底径25cm前後、鈎径55～60cm前後を計る。内外面の調整はナデである。また前方頂埴輪列付近の231(北側集積g)は口縁部と基部上半部が同一個体とみられ、この基部はAタイプになるとみられる。Bタイプも全形のわかるものではなく、くびれ部西トレンチで出土した232が、かろうじて体部の形状を推定できるものであるが、このタイプは昭和63年度調査時の前方部前面埴輪列付近からも肩部付近の破片が出土している。基部は底端からゆるやかに外上方にたちあがる。肩部はやや丸みを帯び、短い鈎がほぼ水平に取り付けた。頭部には断面台形の突帯が廻る。内外面の調整はナデであるが、頭部内面の一帯にハケメを施す。基部の上半が欠損しているが、基部片251・252などから、基部の高さは17～18cm前後で、半円のスカシをいれるものになるかと思われる。次に基部、鈎部の部位別にみたい。基部は42点を確認した。42点中の31点がくびれ部で、6点が前方部で、5点が後円部で出土しており、くびれ部に出土が集中している。このうち22点について実測し、30点について底径の計測し底径の法量分布をグラフ化した。⁽²²⁾ 底径は14～21cmのものが多く、14～15cmのものが最も多い。円筒埴輪の底径は17～24cmのもののが最も多いので、ひとまわり小さいものが多いことになる。基部の形状は、底径が比較的小さく厚手の底端から外上方に直線的にたちあがるもの(244～247・251・252・265)、底径20cm以上を計り、底径の割にはやや薄手の底端から外上方に開き気味にたちあがるもの(253・257・258・261)がある。前者はBタイプの基部に、後者はAタイプの基部になる可能性がある。この他にも底径20cm以上を計りやや薄手ではあるが、外方へそれほど開かずにたちあがるもの(256・259・262)がある。これはAタイプになる可能性があるが判然としない。次に鈎部であるが、Aタイプのものは234・235がある。この他に破片を若干確認した。236は笠縁がやや長く、蓋形埴輪の笠縁A類と似るが、外面が無文であること等から壺形埴輪とした。鈎径は50～55cmを計り、外面は板ナデのちのユビナデ、内面はヒビナデである。Bタイプの鈎部は先述した232の1点のみしか確認していない。次に口縁部についてであるが、これは朝顔形埴輪との判別が難しく、ここでは朝顔形埴輪の口縁部を含めた記述とした。壺形埴輪、朝顔形埴輪の口縁部は、口径が37cmから58cmを計るものまであり、形状は口端部近くで強く屈曲するもの、そのまま収めるものなどがあり、内外面の調整はナデのもの、ハケメのものなど様々である。壺形埴輪のそれぞれのタイプに対応する口縁部の形状であるが、Bタイプは朝顔形埴輪と同様の口縁になるものと思われる。基部の大きさの比率からみて、口径40cm前後の口縁になるものと思われる。Aタイプについては鈎部から肩部にかけての形状が蓋形埴輪の笠部と似ており、通有の壺形埴輪の形状とは異なるものである。この笠状の部分に朝顔形埴輪状の口縁が取り付くことは不自然な感がある。さらに231の口縁部の下半部は、その開き具合からみても二重口縁状の疑似口縁が取り付くと考えるよりは、直口壺の口縁のようにそのまま笠状部分に取り付くと考えるほうが自然である。ちょうど蓋形埴輪の軸受け部をそのまま外上方に延ばして口縁としたような形状の壺形埴輪が想定される。奈良県瓦塚1号墳でBタイプと同様の形状のものとともに、出土しているものが類例になるかと思われる。216などもBタイプの口縁になる可能性があり、これは口端部外面にヘラ状工具によるキザミメをいれている。なお、壺形埴輪について奥田尚氏の砂礫観察の結果、観察していただいた個



体については、すべて八尾市の東部山麓に砂礫の採取地が推定されることであった。筆者自身の観察でも壺形埴輪のほとんどが地元産とみられるものであり、注目される。

〔家形埴輪〕(第30図、308~324) 308は桟木の先端部分の破片である。小口面は下端を水平にする半円形である。309~311は入母屋造の屋根部の上屋根と下屋根の接合部分である。309と311は、上屋根部分に格子状の線刻による網代表現がなされる。311の上屋根部分は欠損のためはっきりしないが、線刻がなされているようである。上屋根と下屋根の接合部分には突帯が貼り付けられるが、309・310が断面三角形の突帯であるのに対し、313は幅広の突帯であり、入母屋造にも2つのタイプのあることがわかる。前者の色調が概ね燈色を呈し、焼成がやや軟質であるのに対し、後者はやや色調の暗い淡赤橙色で、焼成は硬質である。奥田尚氏の砂礫観察によると、310は藤井寺市土師の里付近に、311は八尾市の東部山麓付近に、砂礫の採取地が推定されるとのことであり(本報告付論1参照)、興味深い。322~324も屋根部の一部かと思われる。319・321は壁部のコーナーの破片である。319は薄い粘土板により柱の表現がなされており、この部分に網代とみられる斜格子文の線刻がなされる。321は壁部のコーナーから窓ないし入り口にかけての破片であるが、これにも柱の表現を行ったとみられる粘土板の剥離痕がみられた。320は窓ないし入り口部分の壁部の破片かとみられるが、盾形埴輪の盾面外縁の破片の可能性も残る。314・316は裾廻突帯部の破片である。313・315・317・318は基部である。

〔盾形埴輪等〕(第31図、325~331) 329は盾形埴輪の盾面の下端部の破片で、外縁を画する綾杉文帯の線刻がある。325は盾形埴輪になる可能性があるが、326~328・330・331は判然としない。

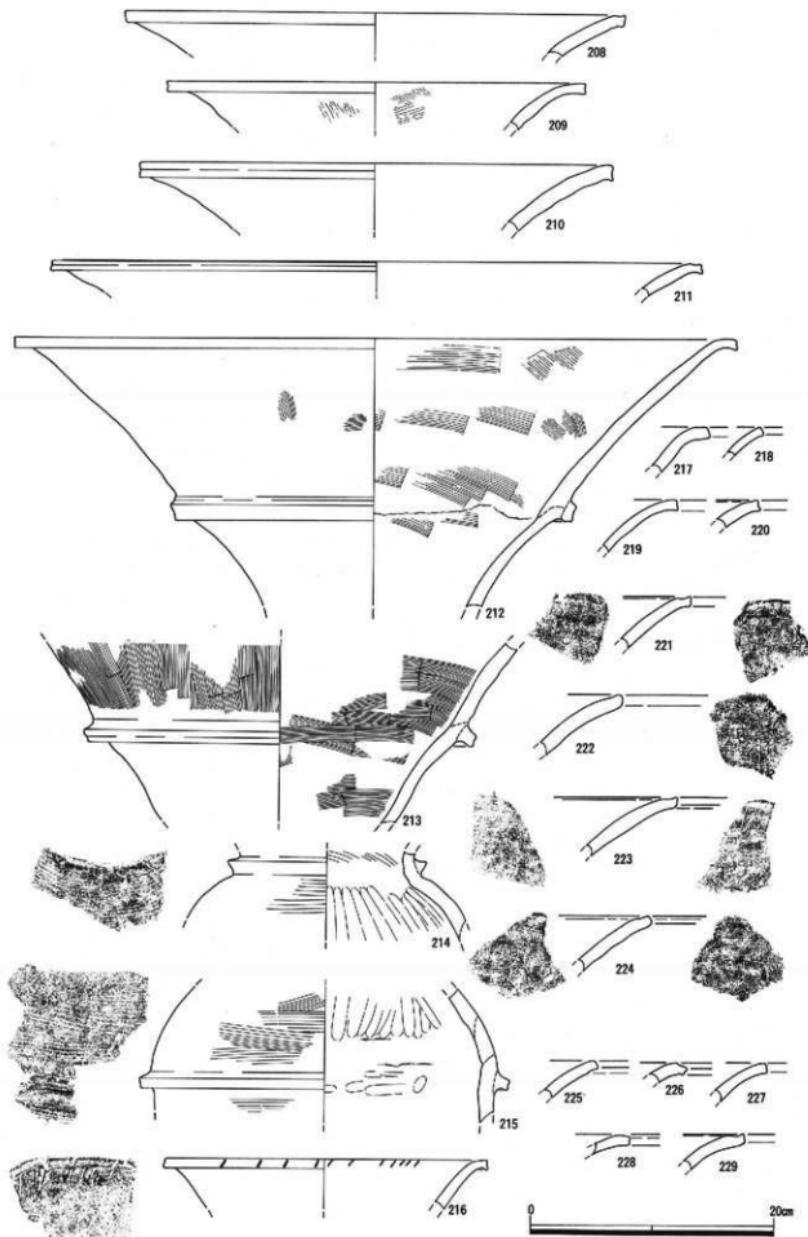
〔甲冑形埴輪の草摺部等〕(第31図、332~342) 334・337は縦位の3条の線刻に、339は縦位の2条の線刻に、それぞれ横位の綾杉文帯を配する草摺部の端部である。336・338・340・341は綾杉文帯部分の破片である。342は、縦位の線刻に、斜め方向及び横位の線刻を行う草摺部の端部である。

〔不明形象埴輪〕(第31図、343~358) 348は盾形埴輪の部分である可能性がある。343・344・347は梯子状の文様から、鞍形埴輪などの可能性があるが確定できない。350は摩滅が激しいが、小さな円形のスカシに直弧文の一部かと思われる線刻を配している。この他いずれも器種不明の形象埴輪である。

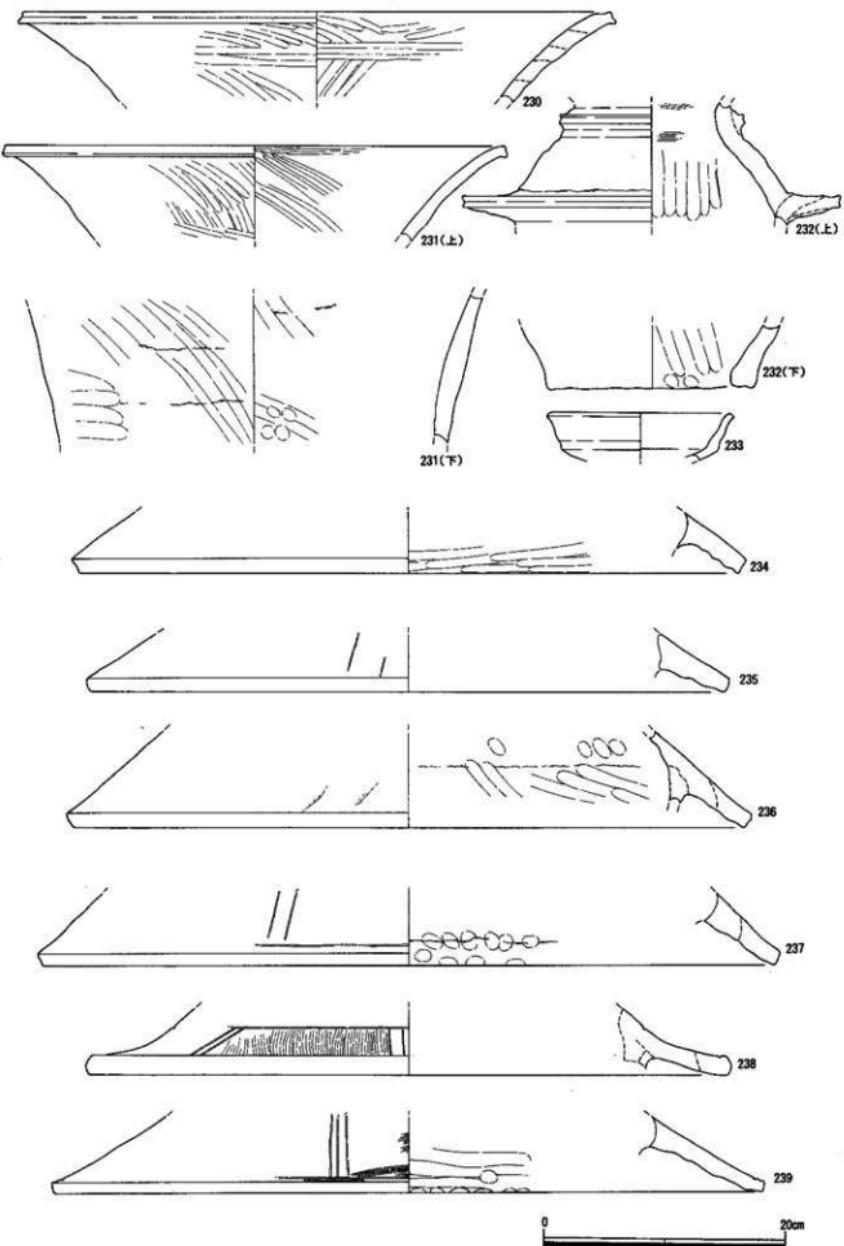
〔古墳時代の土師器他〕(第32図、359~370) 整理段階で精査したところ、18点を確認した。(82頁、表8参照) 出土地別の点数は後円部で13点、くびれ部西側で5点である。器種別の点数は甕が9点、高杯が7点、器台かとみられるものが1点ある。362の甕の体部かと思われる破片、367の高杯の口縁部は、墳丘構成層内から出土した。370のミニチュアとみられる高杯は、くびれ部西側の墳丘裾付近の埴輪集積内から出土した。359は甕の口縁部で摩滅が著しいが、口端部の内側が若干扁平気味に肥厚する。361・363・364は甕の頸部から肩部の破片である。363・364は、外面タテハケ後ヨコハケ、内面はナデを行う。361は外面はヨコハケ、内面はヨコヘラケズリを行う。362は内外面の摩滅が著しいが、器壁の薄さから土師器の甕等の可能性がある。366・369はやや丸味を帯びた形状の高杯の杯部底付近である。369は内外面にタテ方向のハケメを行う。367は直線的に外上方へ延びる高杯の口縁部である。368は高杯の脚部であり、中位でやや膨らみをもつ脚柱部からゆるやかに脚台部へ移行する。内外面の調整は摩滅により不明である。370のミニチュアとみられる高杯は、外方にやや膨らみぎみに開く脚柱部から弱く屈折して、短く開く脚台部に移行する。脚部外面に棒状かともみられる細かな板ナデを行う。脚柱部内面は横方向のハラケズリを行う。これらの土師器の編年的位置付けは小片であるため判断材料に欠くが、高杯等を主に判断材料とすれば、船橋O-I型式の段階に位置付けられる。この他に弥生土器(371~380・382・383)を確認した。また時代の下る遺物のうち今回はくびれ部西側裾で出土した羽釜(381)と磚状瓦製品(384)を掲載した。

注記

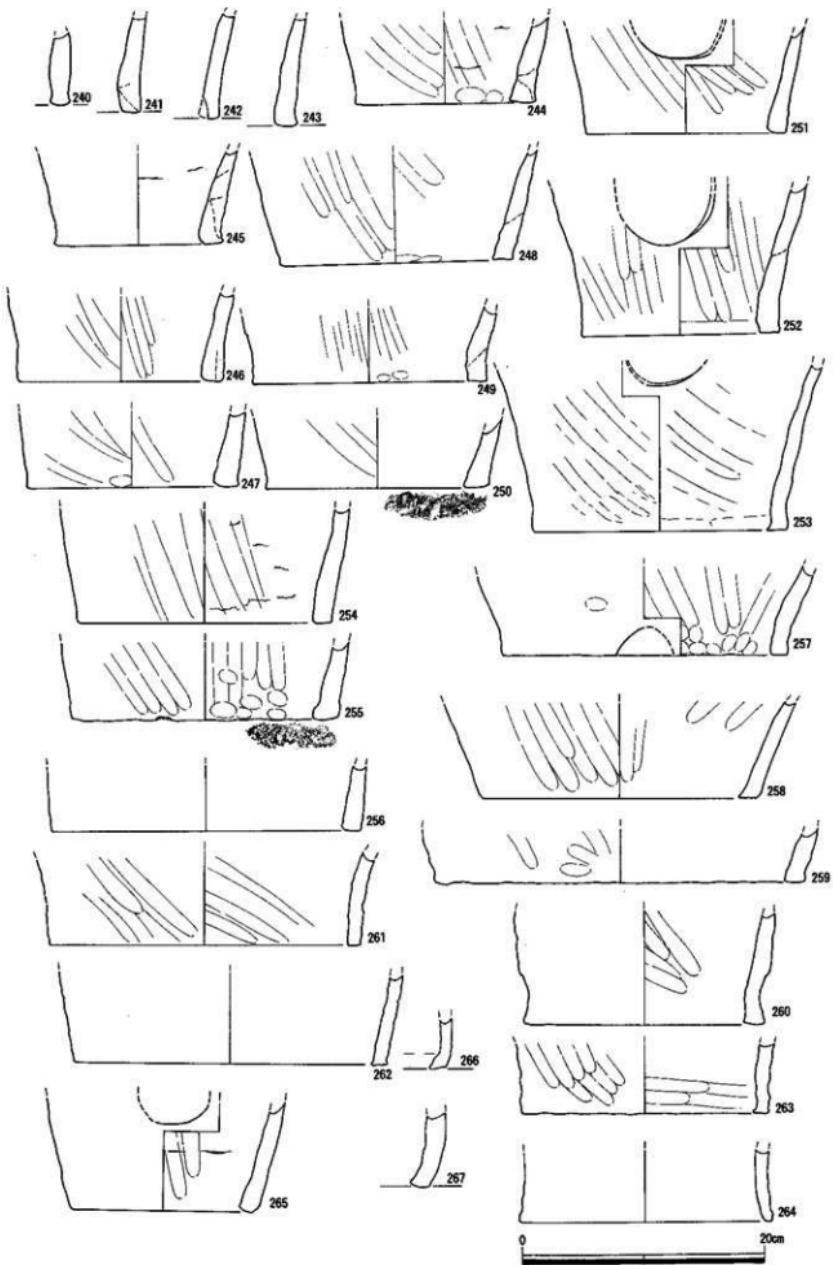
- (1) 小浜 成「6. 墓輪:『堂山古墳群』(大阪府文化財報告書 第45報) 大阪府教育委員会、1994年
- (2) 久野邦雄、川原尚功『御陵町丘塚1号墳 発掘調査報告』奈良県立橿原考古学研究所 1976年
- (3) 平安宇治考古学クラブ『動植物』 1962年



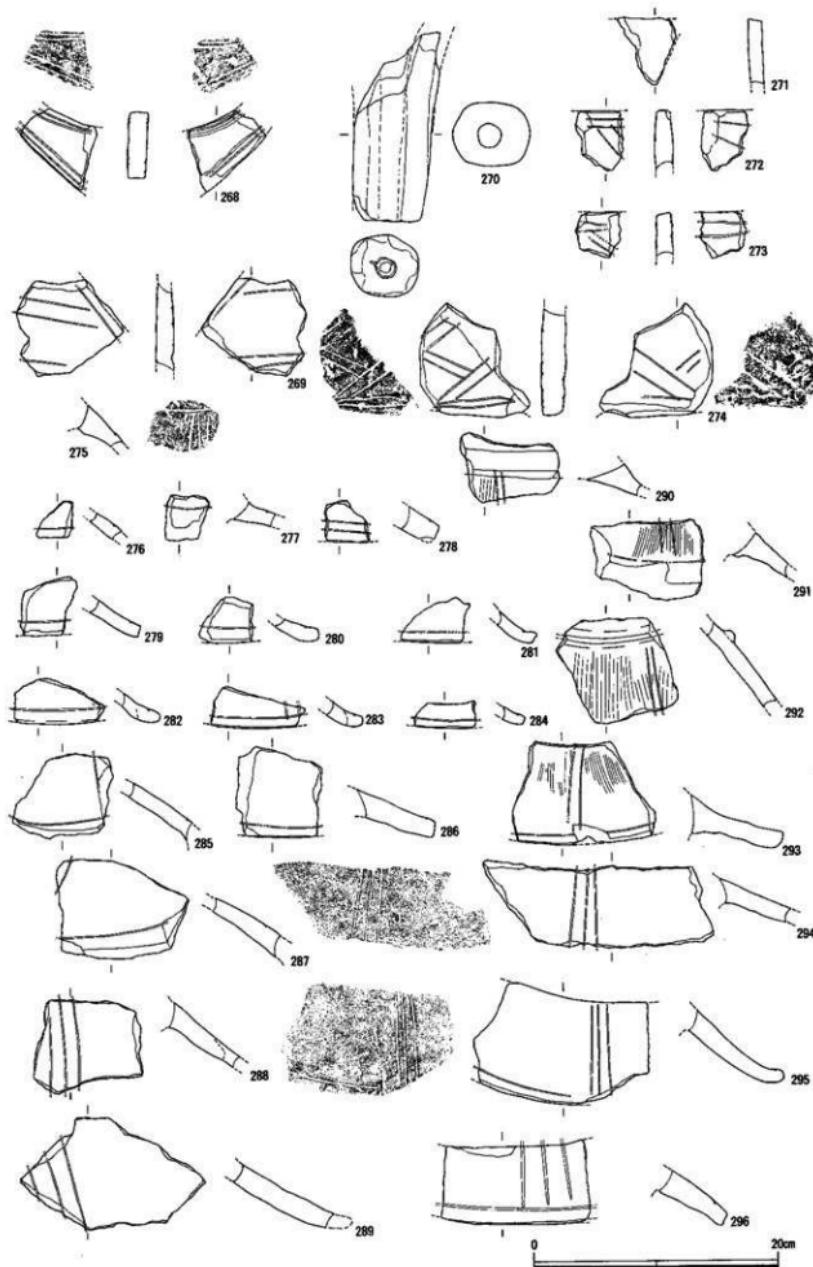
第26図 遺物実測図 (1/4) 朝顔形埴輪・壺形埴輪 (208後円部出土、210, 211, 217前方部出土、209, 212~216, 218~224くびれ部出土、225~229後円部額北出土。)



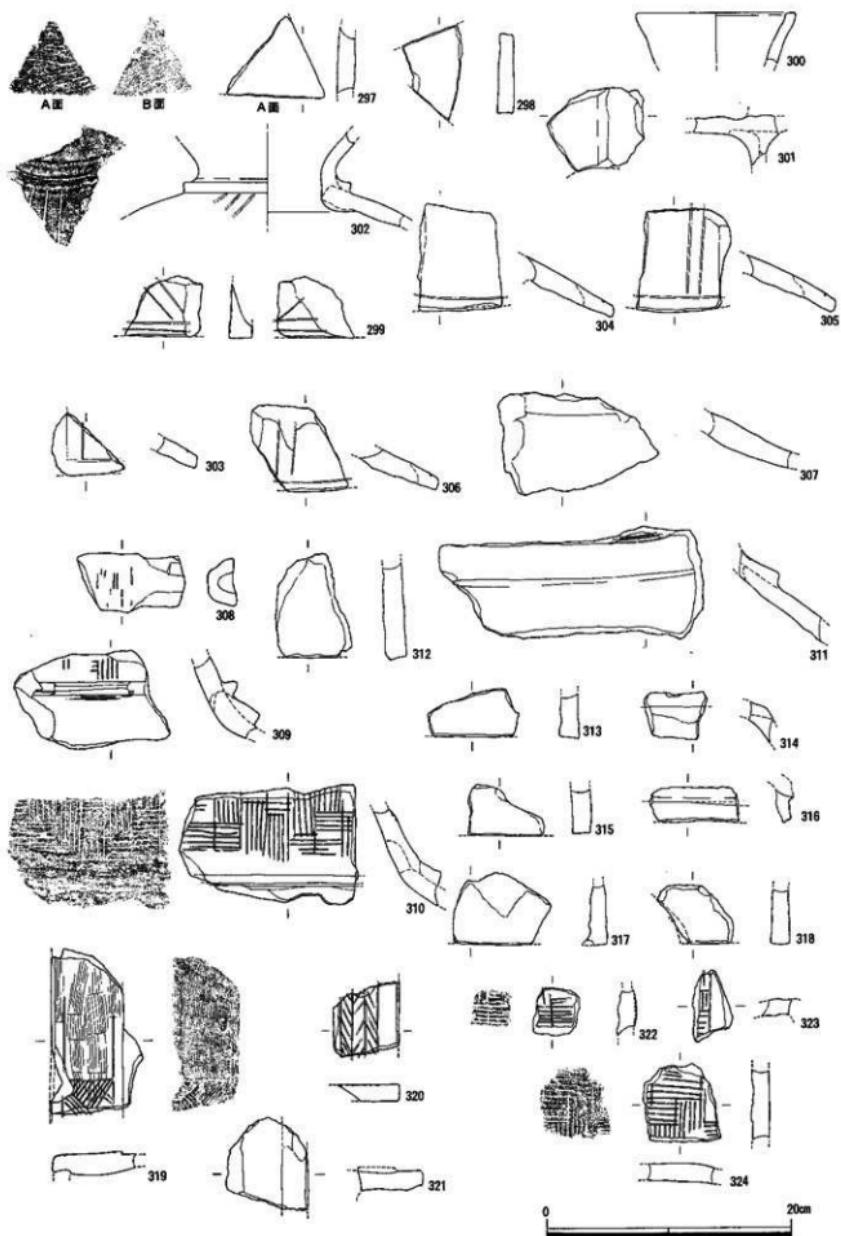
第27図 遺物実測図 (1/4) 壺形埴輪 (230~232, 234~236) 蓋形埴輪 (233, 237~239)



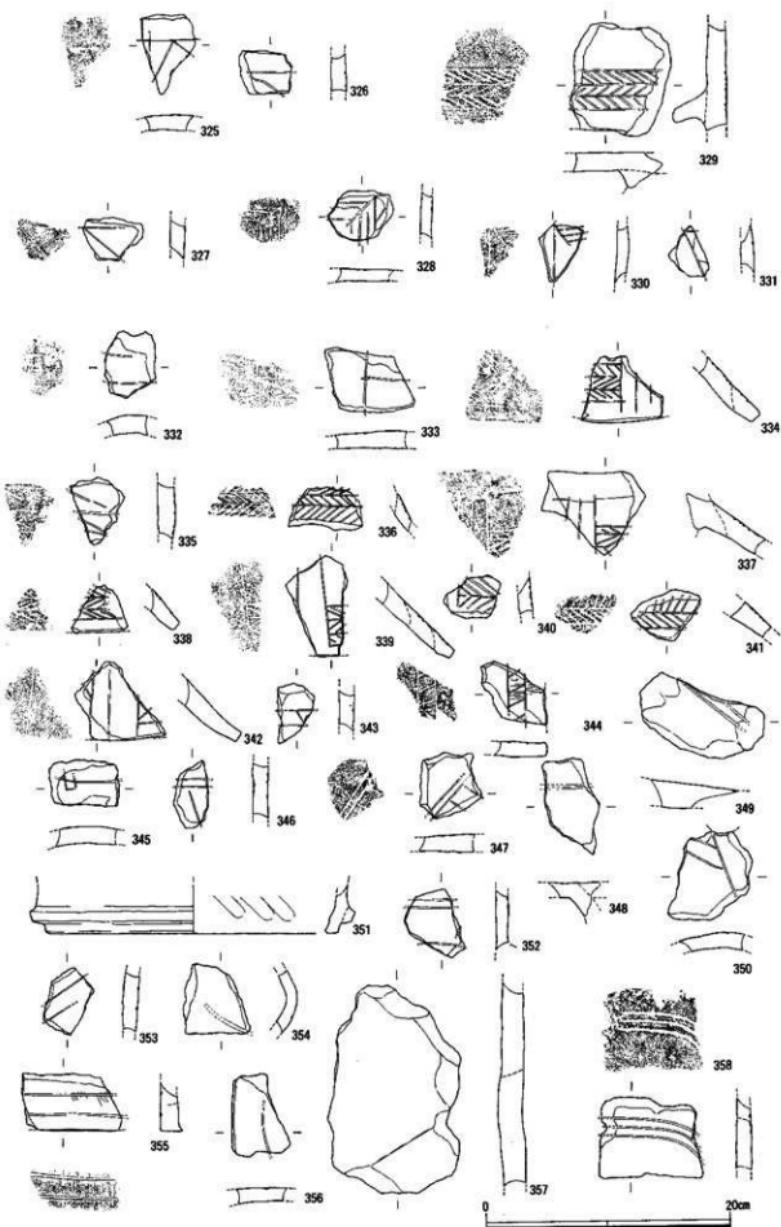
第28図 遺物実測図 (1/4) 墓形埴輪(241~261, 263~265くびれ部出土, 240, 262, 266後円部出土, 267前方部出土)



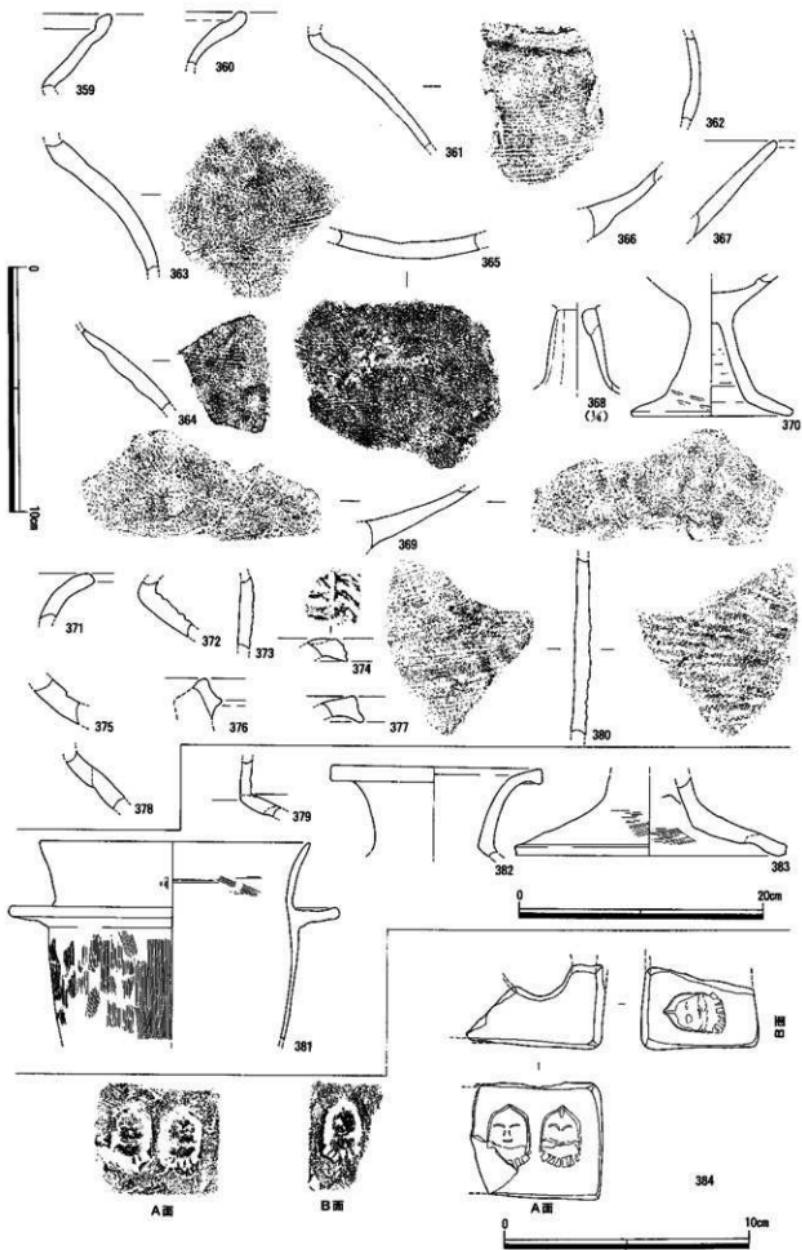
第29図 遺物実測図 (1/4) 盖形埴輪 (269.271~296くびれ部出土 270後円部出土)



第30回 遺物実測図 (1/4) 蓋形埴輪 (297~307) 家形埴輪 (308~324)



第31図 遺物実測図 (1/4) 后形埴輪 (325~331) 甲冑形埴輪 (332~342) 不明形象埴輪 (343~358)



第32図 遺物実測図 (1/4) 土師器・弥生土器 (359~367, 369~378, 380 1/2, 368, 379, 381~383 1/4)
磚状瓦製品 (384 1/2)

出土遺物観察表

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法景(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	押図No.	備考
1	後円部北		円筒埴輪	底部	高さ 4.5		硬	淡褐色	やや粗	内:ナデ(下端ユ ビオサエ) 外:ヨコハケ	19	
2	後円部北	表土	円筒埴輪	底部	高さ 5.9		やや軟	淡褐色	やや粗	内:ナデ? 外:タテハケ	19	
3	後円部北	26~27区 流入土	円筒埴輪	底部	高さ 4.6		やや軟	淡褐色	やや粗	内:ナナメハケ 外:タテハケのち ヨコハケ	19	
4	後円部北	26区付近 表土	円筒埴輪	底部	高さ 7.0		やや硬	淡褐色	粗	内:ユビナデ 外:タテハケ	19	
5	後円部北	24~25区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 18.0 高さ 6.6	1/4	硬	暗淡褐色	非常に粗	内:ナデ(一部ユ ビオサエ) 外:ヨコハケ	19	
6	くびれ部 (1次)	23~25区 流入土	円筒埴輪	底部	高さ 7.0		硬	淡褐色	粗	内:不定方向ナデ 外:タテハケのち ヨコハケ	19	
7	くびれ部 (1次)	23区 流入土	円筒埴輪	底部	高さ 6.5		硬	淡暗褐色	非常に粗	内:ナデ 外:ヨコハケのち ナデ	19	
8	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	高さ 3.9		やや硬	褐色	やや精良	内:ヨコナデ 外:ヨコハケ	19	
9	くびれ部 (2次)	流入土	円筒埴輪	底部	高さ 4.8		軟	淡褐色	粗	内:ヨコナデとユ ビオサエ(一部 ケズリ)	19	
10	くびれ部 (2次)	流入土	円筒埴輪	底部	高さ 3.4		硬	淡赤褐色	やや粗	内:ヨコナデ 外:タテハケ	19	
11	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 17.2 高さ 4.8	1/6	硬	淡褐色	きわめて粗	内:ヨコナデ 外:タテハケ	19	
12	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 19.5 高さ 7.8	1/12	硬	暗赤褐色	やや精良	内:ヨコナデ(押 さてナデてい る) 外:タテハケ(一 部ヨコナデ)	19	
13	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 18.8 高さ 6.6	1/6	硬	褐色	非常に粗	内:タテナデ(下 端ヨコナデ) 外:タテハケ	19	
14	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 21.9 高さ 6.6	1/20	硬	淡暗褐色	粗	内:ナナメ方向ナ デ(下端ユビオ サエ) 外:不明	19	

(注) 法量については、径を復元できないものも、○~○として、推定径の範囲を示した。

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	押図No	備考	
15	くびれ部 (1次)	8~9区 表土	円筒埴輪	底部	底径 高さ	25.2 6.1	1/8	硬	淡橙色	粗	内:タテナデ(下 端ヨコナデ) 外:タテハケのち ヨコハケ	19	
16	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土A層	円筒埴輪	底部	底径 高さ	20.3 6.6	1/4	硬	淡橙色	粗	内:ナデ、ユビオ サエ 外:ヨコハケのち タテハケ	19	
17	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 高さ	19.4 7.5	1/13	普通	赤橙色	普通~やや良	内:ナナメ方向ナ デ 外:タテハケのち ヨコハケ(下端 粗いヨコハケ)	19	
18	後円部 北側	35~37区 淡灰色 砂質土層付近	円筒埴輪	底部	底径 高さ	20.1 9.7	1/8	硬	乳白色	粗	内:タテ方向ナデ (下端ユビオサ エ) 外:不定方向ナデ	19	
19	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 高さ	21.1 7.9	1/12	普通	淡赤橙色	粗	内:ナナメナデ 外:タテハケのち ナナメナデ	19	
20	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 高さ	25.1 13.4	1/3	やや硬	淡赤橙色	粗	内:ナナメナデ (端は強いユ ビオサエ) 外:ヨコハケ	19	黒斑あり タガ刺離痕あ り(突帯間隔 12.0cm)
21	くびれ部 (2次)	拡張区北 流入土	円筒埴輪	底部	底径 高さ	18.0 7.0	1/11	普通	淡赤橙色	普通	内:ナナメナデ 外:ヨコハケ	19	
22	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 高さ	24.7 5.9	1/16	硬	赤橙色	粗	摩滅のため不明	19	
23	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 高さ	24.6 7.7	1/12	やや軟	赤橙色	粗	内:ヨコナデ(下 端部はユビオサ エ) 外:ヨコナデ、ヨ コハケもしくは 板オサエ	19	
24	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 高さ	17.9 7.8	1/12	やや軟	赤橙色	粗	内:ナナメナデ 外:ヨコハケのち ヨコナデ	19	
25	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 高さ	24.1 4.7	1/12	非常に 軟	赤橙色	粗	内:タテナデ 外:タテハケのち ヨコハケ	19	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	埠図No	備考
26	前方部頂 西	埴輪列I付近	円筒埴輪	底部	高さ 9.2		硬	褐色	粗	内:ナデ 外:タテハケのち ヨコハケ	20	
27	前方部頂 西	埴輪列I付近	円筒埴輪	底部	底径 高さ 17.8 5.0	1/5	硬	明赤橙色	普通	内:タテナデ 外:タテハケのち ヨコハケ	20	
28	前方部頂 西	7区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 高さ 13.9 6.9	1/9	硬	赤橙色	粗	内:ナナメナデ 外:タテハケのち ヨコハケ	20	底端に切りこ みあり
29	前方部頂 西	7区 流入七	円筒埴輪	底部	高さ 4.9		硬	赤橙色	粗	内:ナデ(一部ユ ビオサエ) 外:タテハケのち ヨコハケ	20	
30	前方部頂 西	埴輪列A付近	円筒埴輪	底部	底径 高さ 14.9 7.4	1/7	硬	暗赤橙色	非常に粗	内:ナデ(一部ユ ビオサエ) 外:ヨコハケ、タ テハケ	20	底端に切りこ みあり
31	前方部頂 西	埴輪列A付近	円筒埴輪	底部	底径 高さ 17.6 7.6	1/8	硬	淡灰赤橙色	良	内:ナデ 外:ヨコハケ	20	
32	前方部頂 西	埴輪列A付近	円筒埴輪	底部	底径 高さ 17.8 7.1	1/5	普通	赤橙色	やや粗	内:ナナメ方向ナ デ 外:ヨコハケ、タ テハケのちヨコ ハケ(下端ユ ビオサエ)	20	
33	前方部頂 南	1区 埴輪列直上	円筒埴輪	底部	底径 高さ 17.3 5.5	1/7	硬	暗橙褐色	やや精良	内:ナナメ方向の ナデ 外:タテハケのち ヨコハケ	20	底端外面粗い ヨコハケ
34	前方部頂 南	1区 埴輪列直上	円筒埴輪	底部	底径 高さ 26.9 7.8	1/16	硬	明赤橙色	粗	内:ナナメナデ 外:タテハケのち ヨコハケ	20	
35	前方部頂 西	埴輪列付近	円筒埴輪	底部	底径 高さ 25.8 5.6	1/12	硬	淡橙色	やや粗	内:ナナメ方向ナ デ(下端ユビオ サエ) 外:ナナメ方向ナ デ	20	底端に切りこ みあり 黒斑あり
36	前方部頂 西	5区 埴輪列付近 表土	円筒埴輪	底部	底径 高さ 22.9 6.3	1/5	硬	赤褐色	普通	内:ヨコハケのち ユビオサエ(一 部ナナメナデ) 外:ヨコハケ	20	底端に切りこ みあり

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調査	押因No.	備考
37	前方部頂 西	2~3区 埴張部 表土	円筒埴輪	底部	底径 高さ	28.3 5.3	硬	淡橙色	粗	内：ナデ、ユビオ サエ 外：ナナメ方向の ナデ	20	透形埴輪基部 の可能性あり
38	前方部頂 西	3~4区 埴輪列O付近	円筒埴輪	底部	底径 高さ	21.6 12.7	1/6 非常に 硬	暗赤褐色	粗	内：ナデ、ユビオ サエ 外：ヨコハケ	20	
39	前方部頂 西	7区	円筒埴輪	底部	底径 高さ	19.0 7.3	1/7 硬	淡灰褐色	やや粗	内：タテハケ 外：タテハケのち ヨコハケ	20	
40	前方部頂 西	埴輪列E	円筒埴輪	底部	底径 高さ	18.2 10.3	5/6 やや硬	淡橙褐色	やや粗	内：タテハケのち ヨコハケ 外：ナナメナデ	20	埴輪列原位置
41	前方部頂 西	7~8区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 高さ	20.3 14.5	1/4 硬	赤橙色	粗	内：ナナメナデ、 ユビオサエ 外：ヨコハケ、ヨ コナデ(下端部 に細いヨコハケ)	20	
42	前方部頂 西	埴輪列Y	円筒埴輪	底部	底径 高さ	20.8 5.4	1/5 硬	灰紫色	非常に粗	内：ナデ、下端ユ ビオサエ 外：タテハケのち ヨコハケ(下端 部ヨコナデ)	20	埴輪列原位置
43	前方部頂 西	埴輪列H	円筒埴輪	底部	底径 高さ	21.8 14.1	3/4 やや硬	淡橙褐色	やや粗	内：タテナデ、ユ ビオサエ 外：タテハケのち ヨコハケ	20	埴輪列原位置
44	前方部頂 中央	特殊基部A	円筒埴輪	底部	底径 長径 短径 高さ	33.2 29.2 11.4	1/2 やや軟	淡橙褐色	粗	内：ヨコハケのち ナナメナデ 外：タテハケのち ヨコハケ	20	内面下端にヨ コナデ
45	後円部裾 北側	埴輪列R付近	円筒埴輪	底部	底径 高さ	22.7 16.5	1/8 硬	淡灰褐色	非常に粗	内：タテヘナナメ 方向ナデ(一部 ユビオサエ) 外：タテハケのち ヨコハケ	21	外面下端にナ デ
46	後円部裾 北側	42~44区	円筒埴輪	底部	底径 高さ	18.2 7.0	1/7 硬	淡乳灰茶色	非常に粗	内：タテヘナナメ ナデ 外：ヨコハケのち ナナメヘタテナ デ	21	
47	後円部裾 北側	埴輪列付近	円筒埴輪	底部	底径 高さ	20.2 8.9	1/8 やや硬	暗乳白色	非常に粗	内：不明 外：タテハケのち ヨコハケ、ヨコ ナデ	21	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	挿岡No.	備考	
48	後円部裾 北側	埴輪列W	円筒埴輪	底部	底径 高さ	23.8 13.3	1/3	硬	淡橙赤色	粗	内：ナナメナデ 外：タテハケのち ヨコハケ	21	埴輪列原位置 黒斑あり
49	後円部裾 北側	埴輪列X	円筒埴輪	底部	底径 高さ	21.3 16.7	1/4	硬	暗橙赤色	普通	内：ナナメナデ、 ユビオサエ 外：ヨコハケのち ナデ	21	埴輪列原位置 内面下端部へ テケズリ
50	後円部裾 北側	埴輪列Y	円筒埴輪	底部	底径 長径 短径 高さ	34.0 28.6 18.4	2/3	硬	淡茶橙色	非常に粗	内：タテ方向ナデ 外：タテハケのち ヨコハケ	21	底下端半円の 切り込みあり 外面下端ヨコ ハケ
51	後円部裾 北側	43~44区	円筒埴輪	底部	高さ	6.2		普通	淡灰橙色	非常に粗	内：ヨコ方向ナデ 外：不明	21	
52	後円部裾 北側	埴輪列V付近	円筒埴輪	底部	高さ	4.2		硬	淡暗灰橙色	やや粗	内：ヨコ方向ヘラ ケズリ 外：ヨコハケ	21	
53	後円部裾 北側	埴輪列G付近	円筒埴輪	底部	高さ	4.1		普通	暗褐色	やや精良	内：ヨコ方向ナデ 外：ナデ?	21	
54	後円部裾 北側	埴輪列C付近	円筒埴輪	底部	高さ	3.1		硬	淡乳灰茶色	非常に粗	内：ヨコヘラケズ リ 外：ヨコ方向ナデ	21	
55	前方部頂 西	6区 埴輪列付近 表土	円筒埴輪	体部	高さ	7.6		やや軟	淡橙色	やや精良	内：ナナメ～ヨコ ナデ 外：ヨコハケ、ヨ コナデ	21	
56	前方部頂 西	7区 埴輪列付近 流入土	円筒埴輪	体部	高さ	5.5		非常に 硬	淡橙色	やや精良	内：ヨコハケのち ナデ 外：ヨコハケ、ヨ コナデ	21	
57	前方部頂 西	7~8区 表土	円筒埴輪	体部	高さ	10.1		硬	暗赤褐色	やや粗	内：ユビオサエ 外：ヨコハケ、ヨ コナデ	21	
58	前方部頂 西	埴輪列M付近	円筒埴輪	体部	高さ	7.6		硬	淡赤褐色	非常に粗	内：オサエ+ユビオ サエ 外：ヨコハケ、ヨ コナデ	21	
59	後円部裾 北側	埴輪列J	円筒埴輪	体部	高さ 最大径	5.3 25.6		硬	暗灰橙色	粗	内：ナデ+ユビオ サエ 外：ナデ(一部調 整不明)	21	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	押印No.	備考
60	前方部頂 西	4区 埴輪列付近 表土	円筒埴輪	体部	高さ 5.1		硬	茶褐色	やや精良	ヨコナデ	21	タガ端面にハ ケメ痕
61	前方部頂 西	4区 埴輪列付近	円筒埴輪	体部	高さ 3.6		やや軟	橙色	非常に粗	内：ナデ、ヨコハ ケ 外：ナデ	21	タガ端面にハ ケメ痕
62	前方部頂 西	7~8区 表土	円筒埴輪	体部	高さ 7.0		硬	淡暗赤色	非常に粗	内：ヨコ方向のナ デ 外：ヨコハケ	21	長方形スカシ か
63	前方部頂 西	5~7区 埴輪列南側付 近	円筒埴輪 ?	口縁部	高さ 13.5		硬	赤褐色	粗 (チャート合)	内：ヨコ方向ナデ のちナメ～タ テ方向ナデ 外：ヨコハケ(一 部剥離)	21	口縁部に切り こみ？
64	前方部頂 西	7~8区 流入土	円筒埴輪	第2段 以上	口径 35.0 高さ 61.8 (推定)	1/4	やや硬	淡乳橙色	やや粗	内：ヨコナデ、ナ ナメナデ 外：ヨコハケ	22	最上段にヘラ 記号 第2~4段目に 円形スカシあり
65	前方部頂 西	6区 流入土	円筒埴輪	第2 ~ 第3段	胴径 31.2 (最大) 高さ 61.4 (推定)	1/4	硬	淡赤褐色	やや精良	内：ユビオサエ、 ナナメナデ 外：ヨコハケ	22	第2~4段目に 円形スカシあり 外面に赤色顔 料塗布 下部黒斑あり
66	前方部頂 西	埴輪列N	円筒埴輪	底部	底径 22.4 高さ 15.3	1/6	硬	暗橙色	やや粗	内：ナデ(一部ユ ビオサエ) 外：タテハケのち ヨコハケ	22	
67	前方部頂 西	7~8区 流入土	円筒埴輪	底部	底径 22.6 長径 20.7 短径 21.1 高さ 21.1	5/6	硬	淡橙茶色	粗	内：ユビオサエ、 ナナメナデ 外：タテハケのち ヨコハケ	22	第2段目に円形 スカシあり 下端外面ユビ オサエ、ヨコ ハケ
68	前方部頂 西	1区 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 22~26 高さ 4.3	1/13	硬	明赤褐色	やや粗	内：ナナメハケの ちヨコナデ 外：ヨコハケのち ヨコナデ	23	A類
69	前方部頂 西	ハニワg内	円筒埴輪	口縁部	高さ 6.1		やや軟	淡橙色	粗	内：ヨコナデ、ナ ナメハケ 外：摩滅著しいた め不明	23	A類
70	前方部頂 西	4区 埴輪列付近 表土	円筒埴輪	口縁部	高さ 6.2		硬	淡茶褐色	粗	内：ナナメハケ(一 部不明) 外：ヨコハケ	23	A類

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	埠図No	備考	
71	前方部頂 西	5~6区	円筒埴輪	口縁部	高さ 口径 22~24 高さ 3.8	4.8	硬	暗橙色	やや精良	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	23	A類	
72	前方部頂 西	1~10区 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 32~40 高さ 4.3	22~24 3.8	硬	暗橙赤色	やや粗	内:ヨコナデ 外:不明	23	A類	
73	前方部頂 西	7~8区 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 26.0 高さ 5.9	6.8	やや硬	淡橙赤色	非常に粗	内:不定方向ナデ のちナメハケ 外:ヨコハケのち ヨコナデ	23	A類	
74	前方部頂 西	埴輪列H	円筒埴輪	口縁部	口径 20~24 高さ 9.7	32~40 4.3	普通	淡乳橙色	やや粗	内:ヨコ方向ナデ、 ヨコハケのちナ メハケ 外:ヨコ方向ナデ、 タテハケのちヨ コハケ	23	A類	
75	前方部頂 西	7~8区 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 23.0 高さ 4.8	5.8	硬	淡橙色	非常に粗	内:ユビナデ、ユ ビオサエ 外:ヨコハケ	23	A類	
76	前方部頂 西	6区 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 24.0 高さ 10.3	26.0 5.9	1/8	硬	淡橙色	普通	内:ナナメハケ 外:タテハケのち ヨコハケ 内外面端部ヨコナ デ	23	A類
77	前方部頂 内	6区 流入土	円筒埴輪	口縁部	口径 26.0 高さ 4.8	20~24 9.7	硬	淡橙色	普通	内:ナナメナデ 外:タテハケのち ヨコナデ、ヨコ ハケ	23	A類	
78	前方部頂 西	6区 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 24.0 高さ 10.3	28.2 6.1	1/7	硬	淡灰橙色	普通	内:ナナメハケ 外:タテハケのち ヨコハケ 内外面端部ヨコナ デ	23	A類 黒斑あり
79	前方部内	23~24区 流入土	円筒埴輪	口縁部	口径 24.0 高さ 10.3	23.0 4.8	1/9	硬	淡茶褐色	普通	内:ナナメハケ 外:ヨコハケ 内外面端部ヨコナ デ	23	A類
80	前方部頂 西	6区 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 24.0 高さ 10.3	24.0 10.3	1/10	硬	淡橙色	普通	内:ナナメハケ 外:タテハケのち ヨコハケ 内外面端部ヨコナ デ	23	A類
81	前方部西	26~27区	円筒埴輪	口縁部	高さ 5.6	5.6	硬	暗赤橙色	やや粗	ヨコナデ	23	A類	
82	後円部北	16~17区 表土	円筒埴輪	口縁部	高さ 5.8	5.8	1/19	硬	明赤橙色	普通	内:ヨコナデ 外:タテハケ 内外面端部ヨコナ デ	23	B類

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎上	調整	持図No	備考	
83	前方部西	7区 埴輪列付近	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ	23.4 8.1	1/7	硬	赤橙色	粗	内：ナナメナデ(一部ヨコハケ) 外：ヨコハケ 内外面端部ヨコナデ	23	B類
84	前方部南	表土	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ	32.0 4.7	1/24	やや硬	暗褐色	非常に粗	ヨコナデ	23	B類
85	後円部北	16~17区 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ	33~35 5.6	1/20	硬	橙褐色	普通	ヨコハケ	23	B類
86	前方部西	3~4区 埴輪列付近	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ	38.0 5.8	1/9	硬	淡褐色	非常に粗	内：ナデ、ユビオ サエ 外：ヨコハケ (黒誠ではっきり見えず)	23	C類
87	前方部頂 東	1区 埴輪列直上	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ	41.0 3.4	1/10	硬	明赤橙色	やや粗	内：ヨコハケのち ヨコナデ 外：ヨコナデ	23	C類
88	前方部西	表土	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ	31.0 8.2	1/9	硬	赤橙色	粗	内：ナデ+ユビオ サエ 外：ヨコハケのち ヨコナデ	23	B類
89	前方部頂 中央	埴輪列直上	円筒埴輪	口縁部	高さ	3.1		やや硬	赤橙色	やや粗	内：ナナメ方向の ナデ 外：ヨコナデ	23	C類
90	前方部頂	4区	円筒埴輪	口縁部	高さ	2.2		硬	赤橙色	普通	ヨコナデ	23	C類
91	前方部頂 西	5区 埴輪列付近 表土	円筒埴輪	口縁部	高さ	2.7		軟	淡乳褐色	普通	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ(一部ナナメハケ)	23	C-2類
92	前方部頂 西	1区 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ	24~29 5.6	1/22	軟	乳白橙色	非常に粗	内：ナデ 外：ヨコナデ	23	C類
93	前方部頂 西	4区 埴輪列付近 表土	円筒埴輪	口縁部	高さ	5.9		硬	赤橙色(赤 色顔料塗布 か?)	普通	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ(一部ヨコハケ)	23	B類
94	後円部頂 東	1区 埴輪列直上	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ	22~24 3.1		硬	黒灰色	粗	ヨコナデ	23	C類
95	前方部頂 西	1区 表土	円筒埴輪	口縁部	高さ	5.3		硬	暗赤褐色	粗	ヨコハケ	23	C類
96	前方部頂 西	6区 埴輪列付近	円筒埴輪	口縁部	高さ	5.1		やや軟	淡乳灰色	やや粗	内：ナナメナデ 外：ナナメハケの ちヨコハケ 内外面端部ヨコ ナデ	23	C-2類

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	押印No.	備考
97	後円部頂 西	1~5区 流入土	円筒埴輪	口縁部	高さ 4.6	普通	淡灰褐色	やや粗	内外面ヨコ方向ナ デ	23	D類	
98	後円部頂 西	5~7区 埴輪列南側	円筒埴輪	口縁部	口径 29.0 高さ 4.7	1/12 硬	淡赤褐色	やや精良	内：ナナメハケ 外：ヨコハケ 内外面端部ヨコハ ケ	23	D類	
99	前方部 西側	25~26区 流入土	円筒埴輪	口縁部	口径 18.8 高さ 7.3	1/5 硬	淡赤褐色	やや粗	内：ナナメハケ 外：タテハケのち ヨコハケ 内外面端部ヨコナ デ	23	D類	
100	前方部西	表上	円筒埴輪	口縁部	口径 34.8 高さ 6.0	1/14 硬	橙赤色	やや粗	内：ナナメナデ 外：タテハケのち ヨコハケ 内外面端部ヨコナ デ	23	D類	
101	前方部頂 中央	1区 埴輪列直上	円筒埴輪	口縁部	口径 50.0 高さ 5.6	硬	淡灰褐色	非常に粗	内：ナナメハケの ちヨコナデ 外：ヨコハケ 内外面端部ヨコナ デ	23	E類	
102	前方部頂 西	埴輪列M付近	円筒埴輪	口縁部	口径 49.0 高さ 7.3	1/20 やや硬	淡灰褐色	非常に粗	内：ナナメハケ 外：ヨコハケ	23	E類	
103	前方部頂 西	4区 埴輪列付近 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 48.5 高さ 3.3	1/18 硬	淡褐褐色	やや精良	内：ヨコハケ 外：ヨコナデ	23	E類	
104	前方部頂 西	4区 埴輪列付近 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 51.0 高さ 3.9	1/18 やや硬	橙褐色	やや精良	内：ヨコハケ 外：ヨコナデ(… 部不明)	23	E類	
105	前方部頂 西	5区 埴輪列付近 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 48.0 高さ 4.3	1/20 普通	黒灰色	やや粗	内：ナナメハケの ちナデ 外：ヨコハケ(一 部磨耗)	23	E類	
106	前方部頂 西	4区 埴輪列付近 表土	円筒埴輪	口縁部	口径 50.0 高さ 4.6	1/22 やや軟	橙赤色	やや粗	内：ナナメハケの ちヨコナデ 外：不明	23	E類 107と同一個 体の可能性あ り	
107	前方部頂 西	4区 埴輪列付近	円筒埴輪	口縁部	口径 50.4 高さ 3.4	普通	棕褐色	非常に粗	内：ナデ、ヨコハ ケ 外：ナデ	23	E類 106と同一個 体の可能性あ り	
108	前方部頂 東	7~8区 埴輪部	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.5	硬	明褐色	やや粗	内：ヨコ方向ナデ 外：ヨコ方向ナデ	23	E類	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	撮影No	備考
109	出土地不明		円筒埴輪	口縁部	高さ 2.5		硬	褐色	粗	内:ナデ 外:ヨコハケ、タテハケ	23	E類
110	出土地不明		円筒埴輪	口縁部	高さ 3.1		硬	橙赤色	粗	ヨコ方向ナデ	23	E類
111	前方部頂 西	4区 拡張部 表土	円筒埴輪	口縁部	高さ 2.9		普通	暗褐色	やや粗	内:ヨコハケのち ヨコナデ 外:ヨコ方向ナデ	23	E類
112	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ 4.1	23.0	硬	明赤橙色	粗	内:ナナメハケ 外:ヨコハケ	24	A類
113	くびれ部 (2次)	拡張区	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ 7.0	23.0 7.0	軟	橙色	粗	内:ヨコハケ 外:ヨコハケ	24	A類
114	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ 11.8 突帯間隔 12.0	24.1 11.8	やや硬	黒灰色 (内面赤橙色)	非常に粗	内:ナナメナデ、 ヨコハケ 外:ナナメハケ 口端:ヨコナデ	24	A類
115	くびれ部 (1次)	25区 流入土	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ 9.4	28.4 9.4	硬	灰黒色 (内面明赤 橙色)	非常に粗	内:ナナメハケの ちナナメナデ 外:ナナメハケの ちヨコハケ(一部 ヨコナデ)	24	A類
116	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ 5.1	32±1 5.1	硬	橙赤色	やや粗	内:ヨコハケ 外:ナナメハケ 口端:ヨコナデ	24	A類
117	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土A層	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ 1.9	16±0.5 1.9	硬	淡灰橙色	普通	ナデ	24	A類? 直輪受部か
118	くびれ部 (2次)	拡張区 SX03碑土	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ 6.1	27~31 6.1	やや硬	橙色	普通	内:ナナメハケ 外:ヨコハケ	24	A類
119	くびれ部 (2次)	拡張区 遺構面直上	円筒埴輪	口縁部	高さ 6.0		硬	外面黑色 内面橙色	やや粗	内:ナデ 外:ナデ、タテハケ	24	A類
120	くびれ部 (2次)	拡張区 表土	円筒埴輪	口縁部	高さ 6.7		やや硬	暗橙色	非常に粗	摩滅のため不明	24	A類
121	くびれ部 (2次)	流入土	円筒埴輪	口縁部	高さ 2.0		硬	淡茶褐色	粗	ナデ	24	A類
122	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	口縁部	高さ 4.1		硬	暗茶褐色	やや粗	ヨコナデ(外面 部不明)	24	B類
123	くびれ部 (1次)	拡張区	円筒埴輪	口縁部	高さ 6.8		硬	淡赤橙色	普通	ヨコナデ	24	B類

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	採図No.	備考
124	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	口縁部	高さ 4.3		やや軟	明赤橙色	普通	ヨコナデ	24	B類
125	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土A層	円筒埴輪	口縁部	高さ 5.9		軟	淡乳橙色	やや粗	ヨコナデ	24	B類
126	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土A層	円筒埴輪	口縁部	高さ 2.7		普通	淡暗橙色	やや粗	摩滅のため不明	24	B類
127	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土A層	円筒埴輪	口縁部 口径 3.4	26~30 1/24	硬	淡暗灰橙色	粗	内:不明 外:ナデ	24	B類	
128	くびれ部 (2次)	埋灰中	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.1		やや軟	淡暗灰橙色	非常に粗	不明	24	B類
129	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	口縁部	高さ 4.2		やや軟	淡赤橙色	普通	ヨコナデ	24	B類
130	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ 4.8	30.8 4.8		硬	淡赤橙色	やや精良	内:ヨコナデ 外:タテハケ	24	A類
131	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	口縁部	高さ 2.8		普通	灰橙色	非常に粗	内:ナデ(一部不明) 外:タテハケ	24	B類
132	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部	高さ 2.6		やや軟	淡橙色	やや粗	内:不明 外:ナナメハケ	24	C類
133	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ 4.5	24.0 1/14	硬	暗赤橙色	粗	内:ヨコハケ 外:タテナデ	24	B類	
134	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ 4.4	24.0 1/16	普通	橙色	粗	内:ヨコハケ 外:ヨコハケ	24	B類	
135	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ 3.1	26.8 1/16	硬	淡暗灰橙色	非常に粗	内:ヨコハケ 外:ヨコハケ、ナナメハケ	24	B類	
136	くびれ部 (2次)	拡張区 遺構面直上	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ 4.2	約31.0 1/12	硬	淡橙色	非常に粗	内:ヨコハケ 外:ヨコハケ 内外面口端部ヨコナデ	24	B類	
137	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土C層	円筒埴輪	口縁部	高さ 4.3		硬	淡茶褐色	普通	内外面ヨコナデ	24	C類
138	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ 4.2	24~29 1/12	軟	淡茶褐色	やや粗	内:ナナメ方向ナデ 外:不明	24	C類	
139	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ 4.5	36~42 1/20	やや硬	茶褐色	やや精良	内:ナナメ方向ナデ、ヨコハケ 外:不明(一部ヨコナデ)	24	C類	
140	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部	高さ 6.2		軟	茶褐色	粗	内:タテ方向ナデ 外:ヨコナデ	24	C類

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	挿図No.	備考
141	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.3		やや硬	淡茶褐色	精良	内：ヨコナデ 外：ナナメ方向ナ デ	24	C類
142	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部	高さ 2.2		硬	淡黒褐色	やや精良	内：ヨコナデ 外：ナナメハケの ちナデ	24	C類
143	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.8		やや硬	明赤橙色	非常に粗	内：摩滅のため不 明 外：ヨコナデ	24	C類
144	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部 高さ 2.4	口径 22~24	やや軟	淡灰褐色	やや粗	摩滅のため不明	24	C-2類	
145	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部	口径 27.6 高さ 2.2	軟	明赤橙色	粗	内：ヨコナデ 外：摩滅のため不 明	24	C類	
146	くびれ部 (2次)	拡張部 流入土	円筒埴輪	口縁部	口径 27.0 高さ 2.3	やや硬	淡暗褐色	非常に粗	内：ナデ 外：摩滅のため不 明	24	C類	
147	くびれ部 (2次)	拡張部 流入土D層	円筒埴輪	口縁部	口径 29.0 高さ 3.6	軟	淡橙褐色	きわめて粗	摩滅のため不明	24	C類	
148	くびれ部 (2次)	拡張部 流入土A層	円筒埴輪	口縁部	口径 26~28 高さ 2.1	普通	暗褐色	粗	ナデ(内面一部ナ ナメハケ)	24	D類	
149	くびれ部 (2次)	拡張部 流入土D層	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.0	軟	淡暗褐色	粗	不明	24	D類	
150	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.0	やや硬	淡灰褐色	非常に粗	ナデ(外面一部ナ ナメハケ)	24	C-2類	
151	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	円筒埴輪	口縁部	口径 23~24 高さ 3.0	普通	淡橙褐色	やや粗	内：ナデ 外：ナデ	24	D類	
152	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	口縁部	口径 23~28 高さ 3.8	硬	淡暗褐色	非常に粗	内：ヨコハケ 外：ヨコハケ	24	D類	
153	くびれ部 (2次)	拡張区 躉石直上	円筒埴輪	口縁部	口径 24.0 高さ 6.1	硬	淡暗赤褐色	粗	ヨコハケ(口端部 ヨコナデ)	24	D類	
154	くびれ部 (1次)	30~31区 流入土	円筒埴輪	口縁部	口径 23.6 高さ 4.8	軟	淡橙赤色	粗	内：不定方向ナデ 外：ヨコハケ(口 端部ヨコナデ)	24	D類	
155	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	口縁部	口径 21.0 高さ 6.1	やや軟	淡橙色	粗	内：ナデ? 外：ヨコハケ	24	D類	
156	くびれ部 (1次)	9区 流入土	円筒埴輪	口縁部	口径 56.8 高さ 6.6	やや軟	明赤橙色	普通	内：ナナメハケ 外：不明	24	E類	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	押印No	備考
157	後内部裾 北側	41区 西埴張区	円筒埴輪	後門部 口径 高さ	29.0 5.0		硬	淡茶褐色	非常に粗	不明	25	A類
158	後内部裾 北側	埴輪列K付近	円筒埴輪	口縁部 高さ	2.5		硬	淡灰乳色	非常に粗	ナデ	25	A類
159	後内部裾 北側	埴輪列V付近	円筒埴輪	口縁部 高さ	4.5		硬	淡暗灰茶色	非常に粗	ナデ	25	A類
160	後内部裾 北側	埴輪列Y付近	円筒埴輪	口縁部 高さ	4.3		硬	淡暗灰茶色	非常に粗	内:ナデ? 外:タテハケのち ヨコハケ	25	A類
161	後内部裾 北側	埴輪列付近	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ	36.0 4.1		硬	淡暗灰褐色	非常に粗	内:タテハケ 外:ナナメハケ 口端:ナデ	25	A類
162	後内部裾 北側	41区東埴張区 灰色小繖混粘 質土層	円筒埴輪	口縁部 高さ	4.6		やや軟	乳白橙色	やや粗	内:ナデ 外:タテハケ(口 端部ナデ)	25	A類
163	後内部裾 北側	43区 青灰色粘砂層	円筒埴輪	口縁部 高さ	8.7		非常に 硬	灰橙色	非常に粗	内:不明(ナデ か?) 外:タテハケ	25	A類
164	後内部裾 北側	41区東埴張区 灰色小繖混粘 質土層	円筒埴輪	口縁部 高さ	3.9		硬	淡暗灰橙色	非常に粗	内:ナナメハケ 外:タテハケのち ナデ	25	A類
165	後内部裾 北側	39~40区	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ	22.0 6.4		硬	淡灰橙色	非常に粗	内:不定方向ナデ 外:ナデ?	25	A類
166	後内部裾 北側	39~40区	円筒埴輪	口縁部 高さ	2.3		硬	淡灰乳黄色	粗	内:ナデ 外:ヨコ方向ナデ	25	B類
167	後内部裾 北側	43~45区	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ	18~20 4.4		硬	淡橙褐色	非常に粗	内:ナナメナデ 外:ヨコ方向ナデ	25	B類
168	後内部裾 北側	41区東埴張区 灰色小繖混粘 質土層	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ	20~22 3.1		非常に 軟	淡橙色	きわめて粗	不明	25	B類
169	後内部裾 北側	埴輪列W付近	円筒埴輪	口縁部 高さ	3.5		硬	淡暗灰茶色	粗	不明	25	B類
170	後内部裾 北側	埴輪列Z付近	円筒埴輪	口縁部 口径 高さ	20~24 3.6		やや軟	淡橙色~黑 褐色	非常に粗	ナデ	25	B類
171	後内部裾 北側	41区 東埴張区	円筒埴輪	口縁部 高さ	3.8		軟	乳淡橙色	やや粗	内:不明 外:ヨコハケ	25	B類

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	排因No.	備考
172	後内部掘北側	埴輪列付近	円筒埴輪	口縁部	口径 27.0 高さ 3.0		硬	淡灰乳橙色	非常に粗	内：ヨコハケのちナデ 外：ヨコハケ（一部ユビオサエ）	25	B類
173	後内部北	43区	円筒埴輪	口縁部	口径 22.0 高さ 2.7		軟	緑色	非常に粗	不明	25	B類
174	後内部掘北側	41区東拡張区 灰色小礫混粒質土層	円筒埴輪	口縁部	口径 20~21 高さ 5.4		硬	淡乳橙色	粗	内：ナデ 外：タテハケのちヨコハケ	25	B類
175	後内部掘北側	43区	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.6		やや硬	淡褐色	非常に粗	不明	25	B類
176	後内部掘北側	埴輪列付近	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.2		普通	淡灰茶色	非常に粗	内：ヨコハケ（のちナデ？） 外：ナデ	25	C類
177	後内部掘北側	37~40区 遺構直上	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.7		硬	淡灰茶色	非常に粗	ナデ	25	C類
178	後内部掘北側	42~43区 遺構直上	円筒埴輪	口縁部	高さ 5.0		硬	淡灰茶色	非常に粗	内：ナデ、ユビオサエ 外：タテ方向ナデ	25	C類
179	後内部掘北側	42~43区 遺構直上	円筒埴輪	口縁部	高さ 4.7		硬	茶灰色	きわめて粗	内：不明 外：ヨコ方向ナデ	25	C類
180	後内部掘北側	42~43区 遺構直上	円筒埴輪	口縁部	高さ 6.5		硬	淡灰乳橙色	非常に粗	ナデ	25	C類
181	後内部掘北側	41区 西拡張区	円筒埴輪	口縁部	高さ 5.3		硬	墨灰色	きわめて粗	内：ナデ、ユビオサエ 外：摩滅のため不明	25	C-2類
182	後内部掘北側	39~40区	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.9		やや軟	淡暗橙色	非常に粗	摩滅のため不明	25	C類
183	後内部掘北側	41区	円筒埴輪	口縁部	高さ 4.4		硬	淡灰色	粗	内：ヨコハケ 外：ヨコハケ	25	B類
184	後内部掘北側	43~45区	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.9		やや軟	淡灰棕褐色	粗	内：ナデ 外：ナデ	25	C類
185	後内部掘北側	40区 東拡張区	円筒埴輪	口縁部	高さ 6.1		硬	淡灰橙色	非常に粗	内：ヨコ方向ナデ 外：ヨコ方向ナデ	25	C類
186	後内部掘北側	埴輪列O付近	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.8		硬	淡灰橙色	非常に粗	ナデ	25	C類

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	挿図No	備考
187	後内部振北側	埴輪列X付近	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.9		硬	黒褐色	非常に粗	内:ナデ 外:不明	25	C類
188	後内部振北側	15~46区 周縫痕肩	円筒埴輪 ?	口縁部	口径 高さ 13.4 3.2		やや軟	茶灰色	非常に粗	不明(ナデ?)	25	蓋形埴輪の軸受部か
189	後内部振北側	43~45区 周縫痕肩	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ 35.3 3.8		やや軟	淡橙色	非常に粗	内:ナデ 外:不明	25	C類
190	後内部振北側	41区 西拡張区 埴土第2層	円筒埴輪	口縁部	口径 高さ 32.0 4.5		硬	淡灰橙色	非常に粗	内:ナデ、ヨコハケのちナデ 外:ヨコハケ	25	D類
191	後内部振北側	42~43区 遺構面直上	円筒埴輪	口縁部	高さ 1.1		硬	淡灰橙色	粗	ナデ	25	D類
192	後内部振北側	43~45区 西拡張区	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.6		やや硬	淡灰橙色	非常に粗	不明	25	D類
193	後内部振北側	41区東拡張区 灰色小砾混粘質土肩	円筒埴輪	口縁部	高さ 3.0		硬	黒褐色	やや粗	ナデ	25	C類
194	後内側斜面	29~30区 流入土	円筒埴輪	体部	高さ 5.8		硬	黒灰茶色	非常に粗	内:不定方向ナデ のちヨコナデ 外:ヨコハケ、ヨコナデ	25	線刻あり
195	くびれ部 (1次)	24~25区 拡張区	円筒埴輪	体部	高さ 4.9		やや軟	淡橙色	やや粗	内:ナデ、タテハケ 外:ヨコハケ	25	線刻あり
196	くびれ部 (1次)	23区 拡張区	円筒埴輪	体部	高さ 4.0		普通	灰橙色	粗	内:ナデ 外:ヨコハケ	25	線刻あり
197	くびれ部 (1次)	22区 拡張区	円筒埴輪	体部	高さ 5.6		硬	淡橙色	粗	内:ヨコ方向ナデ 外:ヨコハケ	25	線刻あり
198	くびれ部 (1次)	19~25区 拡張区	円筒埴輪	体部	高さ 4.6		やや軟	橙色	非常に粗	内:ヨコハケ 外:ナナメ方向ナデ	25	線刻あり
199	前方部頂 西	4区 埴輪列付近 流入土	円筒埴輪	体部	高さ 4.8		やや硬	淡橙色	やや精良	内:ナデ 外:ヨコハケ	25	線刻あり
200	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	円筒埴輪	体部	高さ 6.1		やや軟	暗橙色	やや粗	内:ナナメハケ 外:ヨコハケ	25	線刻あり

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	揮因No	備考
201	くびれ部 (1次)	23区 拡張区	円筒埴輪	体部	高さ 2.6		普通	淡灰橙色	非常に粗	ナデ	25	線刻あり
202	後円部裾 北側	37~42区 遺構面直上	円筒埴輪 ?	体部	高さ 3.3		軟	淡橙色	やや粗	不明(内面一部ナ メハケ?)	25	線刻あり
203	後円部裾 北側	41区 東拡張区	円筒埴輪 ?	体部	高さ 4.0		普通	淡灰橙色	粗	ナデ	25	線刻あり
204	後円部裾 北側	43~45区	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	肩部	高さ 6.6		普通	暗赤褐色	粗	内:不明 外:タテ方向ナデ (一部ヨコ方向 ナデ)	25	線刻あり
205	後円部裾 北側	41区 西拡張区	円筒埴輪 ?	体部	高さ 3.6		硬	灰橙色	粗	内:ナナメナデ 外:タテハケのち ナデ	25	線刻あり
206	後円部裾 北側	43~45区 周濠底屑	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	肩部	高さ 6.0		硬	淡灰赤褐色	非常に粗	不明	25	線刻あり
207	後円部裾 北側	36~37区	壺形埴輪 または 壺形埴輪	体部	高さ 6.6		やや硬	乳白色	粗	内:ナデ? 外:タテ方向ナデ	25	線刻あり
208	後円部東	21~22区 表土	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	口径 41.2 高さ 4.4	1/4	硬	明赤橙色	やや粗	ナデ	26	
209	くびれ部 (1次)	21~22区 拡張区 流入上	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	口径 34.2 高さ 3.7	1/8	やや軟	明赤橙色	やや粗	内:ヨコハケ 外:タテハケ 口端:ナデ	26	
210	前方部頂 西	7~8区 流入上	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	口径 38.8 高さ 5.3	1/9	硬	淡橙褐色	精良	内:ヨコナデ 外:ナナメナデ	26	外面赤色顔料 塗布
211	前方部頂 西	5区 埴輪列U北	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	口径 53.2 高さ 2.6	1/8	やや軟	暗赤色	粗	内:不定方向ナデ 外:ヨコナデ、ナ ナメナデ	26	
212	くびれ部 (2次)	蓋石南直上及 び埴輪集積	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部 ~頂部	口径 59.0 高さ 21.9	1/2	やや軟	赤橙色	やや粗	不定方向ハケのち ナデ、口端部ヨコ 方向ナデ	26	外面赤色顔料 塗布
213	くびれ部 (1次)	25区 拡張区 流入土	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部 ~下半 頸部	タガ径 32.2 高さ 14.8	1/4	硬	淡赤橙色	粗	内:ヨコハケのち ナデ 外:タテハケ、強 いナデ	26	黒斑あり
214	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	肩部	タガ径 16.2 高さ 7.25	1/4	軟	橙赤色	粗	内:ナナメハケ、 ナナメ方向ナデ 外:ヨコハケのち ヨコ方向ナデ	26	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎上	調整	標図No	備考
215	くびれ部 (1次)	21～22区 拡張区	朝顔形埴 輪		タガ径 30.4 高さ 11.1	普通	暗赤色	きわめて粗	内：タテまたはナ ナメ方向ナデ、 ユビオサエのち ヨコナデ 外：ヨコハケ、ヨ コナデ	26		
216	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	壺形埴輪 か		口径 26.4 高さ 4.1	硬	暗橙赤色	粗	ヨコナデ	26	口端部内外面 にキズミがあり	
217	前方部頂 面	埴輪列M-2	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 3.6	硬	淡暗赤橙色	非常に粗	内：不明(ヨコ方 向ナデ) 外：ヨコナデ、ナ ナメハケ	26		
218	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 2.3	軟	橙色	非常に粗	摩滅のため不明	26		
219	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 4.2	軟	暗灰乳桜色	非常に粗	内：ヨコハケ 外：タテハケ、ナ ナメハケ	26		
220	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 2.2	硬	淡橙赤色	粗	内：ナデのちヨコ ハケ 外：ヨコナデ	26		
221	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 4.1	硬	淡橙褐色	非常に粗	ヨコハケ、口縫部 ナデ	26		
222	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 5.1	硬	淡橙色	粗	内：ヨコナデのち ナナメナデ 外：ヨコハケ、ナ デ	26		
223	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 4.6	やや硬	淡橙灰色	粗	内：不明 外：ナデ、ヨコハ ケ	26		
224	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 4.4	やや硬	淡橙灰色	粗	内：ヨコハケ、ヨ コナデ 外：タテハケのち ヨコハケ	26		
225	後内部根 北側	41区 西拡張区	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 3.0	軟	淡橙色	非常に粗	不明	26		
226	後内部根 北側	41区 西拡張区	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 2.1	硬	淡暗黒灰色	非常に粗	内：ナデ 外：不明	26		
227	後内部根 北側	38区 西拡張区	朝顔形埴 輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 3.1	硬	淡灰橙色	非常に粗	ナデ(外面一部ヨ コハケ)	26		

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	埠図No	備考
228	後円部裾 北側	41区 東拡張区	輪形埴輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 2.4		硬	淡橙褐色	非常に粗	ナデ、ヨコ方向ナ デ	26	
229	後円部裾 北側	41区東拡張区 灰色小櫛泥輪 質土層	輪形埴輪または 壺形埴輪	口縁部	高さ 2.8		硬	淡灰橙色	やや粗	ナデ	26	
230	前方部頂 西	6区 埴輪集積g	輪形埴輪または 壺形埴輪	口縁部 口径 高さ 最大径	48.0 7.3	1/5	硬	赤橙色	粗	内：ナナメナデの ちヨコナデ 外：ヨコナデ、ナ ナメナデ	27	
231	前方部頂 西	6区 埴輪集積g	壺形埴輪	口縁部 口径 高さ 基部	41.0 7.7 37.6	1/6	硬	橙赤色	粗	板状工具によるナ デ(体部内面：ナ デ)	27	
232	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	壺形埴輪	跨部 底部	跨径 13.2	1/6	硬	赤橙色	非常に粗	内：タテ方向ナデ、 ヨコハケ 外：ナナメナデの ちヨコナデ	27	
233	前方部頂 西	7区 流入土	蓋形埴輪 ?	軸受部 ?	口径 14.6		硬	淡赤橙色	非常に粗	ヨコ方向ナデ	27	
234	後円部北	24~25区 流入土	壺形埴輪	跨部	口径 54.2	1/8	やや硬	橙色	やや粗	内：ナナメナデ 外：摩滅のため不 明	27	
235	後円部北	7~8区	壺形埴輪	跨部	口径 52.0	1/6	普通	灰橙色	非常に粗	内：ナデ 外：ヨコハケのち ナデ	27	外面静止痕残 存
236	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	壺形埴輪	跨部 高さ	55.0 7.9	1/4	硬	淡橙赤色	非常に粗	内：ユビオサエ 外：ヨコハケのち ナデ	27	外面静止痕残 存
237	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	口径 60.2	1/8	やや硬	橙褐色	やや粗	内：ユビオサエの ちヨコナデ 外：不明	27	
238	縄池西岸 表採	くびれ東南 近	蓋形埴輪	笠部	口径 52.0	1/6	軟	乳白橙色	非常に粗	内：ナデ 外：タテハケ	27	黒斑あり外面 赤色顔料残存
239	前方部頂 西	埴輪列A	蓋形埴輪	笠部	笠径 58.0	1/4	硬	淡赤橙色	非常に粗	内：ヨコハケのち 不定ナデ、ユビ オサエ 外：ヨコハケ	27	
240	後円部裾 北側	26~27区 流入土	蓋形埴輪	底部	高さ 6.0		硬	明赤橙色	粗	ナナメ方向ナデ	28	
241	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土 A層	壺形埴輪	底部	高さ 7.8		やや硬	淡茶褐色	普通	タテ方向ナデ	28	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	押図No.	備考
242	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	壺形埴輪	底部	高さ 8.6		硬	茶褐色	精良	不明	28	
243	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	壺形埴輪	底部	高さ 8.8		硬	棗褐色	粗	内：タテナデのち ナナメナデ 外：ナナメナデ	28	
244	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	壺形埴輪	底部	底径 14.8 高さ 6.9		硬	橙褐色	精良	内：タテナデ、ユ ビオサエ 外：ナナメ方向ナ デ	28	
245	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	壺形埴輪	底部	底径 13.8 高さ 7.6		普通	明赤橙色	精良	内：タテナデ 外：ナナメ方向ナ デ	28	
246	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	壺形埴輪	底部	底径 16.8 高さ 7.2		やや硬	棗褐色	粗	内：タテ方向ナデ 外：ナナメナデ	28	
247	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	壺形埴輪	底部	底径 17.4 高さ 6.1		硬	明赤橙色	普通	ナナメ方向ナデ	28	円筒埴輪の可 能性あり
248	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	壺形埴輪	底部	底径 19.2 高さ 9.0		やや硬	棗褐色	粗	ナナメ方向ナデ	28	
249	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	壺形埴輪	底部	底径 19.0 高さ 6.1		硬	棗褐色	普通	内：タテナデ、ユ ビオサエ 外：タテナデ	28	
250	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	壺形埴輪	底部	底径 16.4 高さ 5.8		硬	暗赤橙色	粗	内：ナナメナデ 外：ナナメナデ(一 部のちコナデ)	28	
251	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	壺形埴輪	底部	底径 15.1 高さ 8.6		非常に 軟	赤橙色	粗	ナナメナデ	28	スカシあり
252	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	壺形埴輪	底部	底径 14.6 高さ 12.1		硬	棗赤色	粗	内：ナナメナデ(下 端部板ナデ) 外：ナナメナデ、 ヨコ方向ナデ	28	スカシあり
253	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	壺形埴輪	底部	底径 20.6 高さ 13.5		やや硬	淡褐色	粗	内：ナナメナデ、 ヨコ方向ナデ 外：強いナナメナ デ	28	スカシあり
254	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	壺形埴輪	底部	底径 20.7 高さ 9.3		やや軟	棗褐色	普通	内：タテナデ 外：タテナデ、一 部ヨコナデ	28	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	押図No	備考
255	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	壺形埴輪	底部	底径 高さ	20.1 6.3	硬	暗赤褐色	やや精良	内:タテ方向ナデ、 ユビオサエ 外:ナナメ方向ナデ	28	
256	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	壺形埴輪	底部	底径 高さ	26.2 5.2	やや軟	明赤褐色	やや粗	内:ナナメ方向ナデ 外:タテナデ	28	
257	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	壺形埴輪	底部	底径 高さ	23.1 7.3	やや軟	赤褐色	粗	内:ナナメ方向ナデ(のち一部ユ ビオサエ) 外:不明	28	底部に半円切 りこみあり
258	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	壺形埴輪	底部	底径 高さ	20.9 7.8	やや硬	赤褐色	粗	ナナメナデ	28	
259	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	壺形埴輪	底部	底径 高さ	30.2 4.4	硬	暗褐色	普通	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	28	
260	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	壺形埴輪	底部	底径 高さ	18.5 9.1	硬	赤褐色	普通	内:ナナメ方向ナデ 外:ヨコナデ、下 端部に板オサエ	28	円筒埴輪の可 能性あり
261	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	壺形埴輪	底部	底径 高さ	24.5 7.6	硬	赤褐色	粗	内:ナナメナデ 外:強いナナメナ デ	28	
262	後円部北 16~17区 表土	壺形埴輪	底部	底径 高さ	25.6 7.3	硬	淡褐色	粗	ナナメ方向ナデ、 ヨコナデ	28		
263	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土A層	壺形埴輪	底部	底径 高さ	20.0 5.7	硬	淡棕灰茶色	粗	内:ヨコナデ 外:ユビオサエ、 ナナメナデ	28	円筒埴輪の可 能性残る
264	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土A層	壺形埴輪	底部	底径 高さ	20.4 5.7	硬	淡褐褐色	非常に粗	内:ナナメナデ、 ユビオサエ 外:ヨコハケのち ヨコナデ	28	
265	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	壺形埴輪	底部	底径 高さ	13.9 9.0	軟	赤褐色	粗	内:ナナメナデ 外:不明	28	スカシあり
266	後円部北 19~20区 表土	壺形埴輪	底部	高さ	3.9	硬	淡灰褐色	非常に粗	内:ヨコナデ 外:ナデ	28		

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	標印No	備考
267	前方部頂 西	2区 埴輪列K付近	蓋形埴輪	底部	高さ 6.4		やや硬	淡橙赤色	やや粗	ナデ	28	
268	前方部頂 西	17区付近	蓋形埴輪	立飾部	高さ 6.7		やや硬	淡橙褐色	やや粗	ナデ	29	
269	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土 A層	蓋形埴輪	立飾部	高さ 7.7		やや軟	明橙色	やや粗	ナデ	29	
270	後円部北	26~27区 流入土	蓋形埴輪	軸部	高さ 15.3		やや軟	橙褐色	やや粗	ナデ	29	
271	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土 A層	蓋形埴輪	立飾部	高さ 5.5		やや軟	淡橙色	やや精良	不明	29	
272	くびれ部 (1次)	拡張区	蓋形埴輪	立飾部	高さ 4.9		やや軟	淡橙色	非常に粗	摩滅により不明	29	
273	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	立飾部	高さ 3.7		硬	暗赤橙色	非常に粗	ナデ	29	
274	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土 A層	蓋形埴輪	立飾部	高さ 9.3		やや硬	橙赤色	やや粗	ナデ 端面ヘラケズリ	29	
275	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土 D層	蓋形埴輪	笠部	高さ 4.2		硬	淡灰橙色	やや粗	ヨコナデ	29	
276	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 2.0		やや硬	乳白色	精良	不明	29	
277	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土 D層	不明形象 埴輪	笠部	高さ 2.1		硬	赤橙色	粗	内:タテ方向ナデ	29	
278	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 3.0		硬	暗橙褐色	やや精良	内:不明 外:ナデ	29	
279	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 3.0		やや軟	暗淡橙色	非常に粗	内:ナデ 外:ヨコナデ	29	
280	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 3.7		やや軟	淡橙色	粗	内:ナデ、一部ユ ビオサエ 外:ナデ	29	
281	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	蓋形埴輪	笠部	高さ 2.8	普通	淡橙色	粗	ヨコナデ	29		
282	くびれ部 (1次)	拡張区	蓋形埴輪	笠部	高さ 2.4	非常に 軟	暗橙赤色	粗	ナデ	29		

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部 位	法 畳 (cm)	残存度	焼成	色 調	胎 土	調整	排岡No	備 考
283	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 2.0		硬	褐色	やや粗	内:ヨコハケのち ナデ 外:ナデ	29	
284	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 1.4		普通	淡灰褐色 (内面橙褐色)	やや精良	ナデ	29	
285	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 4.8		硬	暗赤褐色	非常に粗	内:ナデ 外:ナデ	29	
286	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 3.6		硬	暗橙色	やや粗	内:ナデ 外:ナデ	29	
287	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土 A層	蓋形埴輪	笠部	高さ 4.8		やや軟	明赤褐色	普通	ヨコナデ	29	
	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	蓋形埴輪	笠部	高さ 5.3		軟	暗橙色 (内面橙褐色)	非常に粗	内:ヨコ方向ナデ 外:不明	29	
289	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ		やや軟	橙赤色	非常に粗	内:ヨコナデ 外:不明	29	
290	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 2.9		非常に 軟	乳黄褐色	粗	内:ナデ 外:タテハケ	29	
291	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 3.7		非常に 軟	乳黄褐色	やや粗	内:ユビナデ 外:タテハケ	29	
292	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 7.1		非常に 軟	乳黄褐色	やや粗	内:ユビナデ 外:タテハケ	29	同一個体の 可能性あり
293	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 4.3		軟	淡乳黄褐色	非常に粗	内:ヨコ方向ナデ 外:タテハケ	29	
294	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	蓋形埴輪	笠部	高さ 3.6		普通	灰橙色	粗	内:ヨコハケ 外:ヨコハケ	29	
295	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積	蓋形埴輪	笠部	高さ 4.7		硬	明褐色	やや粗	内:不定ナデ、ヨ コハケ 外:ヨコハケ	29	
296	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部	高さ 4.6		非常に 硬	灰橙色	粗	ナデ	29	
297	前方部西	表土	蓋形埴輪	立脚部	高さ 5.5		やや軟	明茶褐色	精良	内:ヨコナデ 外:ヨコハケ	30	

番号	測定区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	押印No	備考
298	前方部頂東	1区 埴輪列直上	蓋形埴輪	立筋部	高さ 6.6		硬	赤褐色	やや精良	ナデ	30	
299	後内部北	35~37区	蓋形埴輪	立筋部	高さ 4.9		やや軟	淡灰乳色	非常に粗	内: 摩滅のため不明 外: ナデ	30	
300	前方部頂西	1~5区 流人土	蓋形埴輪	軸受部	口径 12.8 4.2		やや硬	橙色(内面 淡橙赤色)	非常に粗	内: ヨコナデ 外: 不明	30	
301	前方部頂	2~3区 表土	蓋形埴輪	輪部	高さ 4.1		普通	淡橙赤色(一 部朱残存)	やや粗	ナデ	30	
302	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	蓋形埴輪	笠部~ 軸受部	タガ径 13.6 高さ 7.8		非常に 硬	暗褐色	やや粗	内: ヨコナデ ユビオサエ 外: ヨコ方向ナデ	30	
303	前方部頂 内	4区 埴輪列Q付近	蓋形埴輪	笠部	高さ 2.5		普通	淡橙赤色	やや粗	ナデ、ユビオサエ	30	
304	前方部頂 西	4区 埴輪列付近 表土	蓋形埴輪	笠部	高さ 5.1		硬	淡暗褐色	粗	内: ユビオサエ 外: ナデ	30	
305	前方部頂 西	5~7区 流人土	蓋形埴輪	笠部	高さ 4.6		硬	淡暗橙赤色	粗	ナデ	30	
306	前方部頂 西	埴輪列付 近	蓋形埴輪	笠部	高さ 3.5		軟	橙色	非常に粗	ナデ	30	
307	後内部北	42~45区 東拡張区	蓋形埴輪	笠部	高さ 4.6		やや硬	淡茶褐色	非常に粗	内: 摩滅のため不明 外: ヨコナデ	30	他の器種の可 能性残る
308	前方部頂 南	21区	家形埴輪	桟木片	高さ 2.4		硬	明橙色	やや粗	内: ナデ 外: 板オサエ	30	下面赤色顔料 塗布
309	後内部東	20~21区 表土	家形埴輪	屋根部	高さ 6.5		やや軟	淡褐色	やや粗	内: ナデ 外: 不明	30	突帯貼付前の 線刻あり
310	後内部西	20~21区 表土	家形埴輪	屋根部	高さ 7.9		やや軟	淡暗褐色	やや粗	内: ナデ 外: 不明	30	
311	後内部北	24~25区 流入土	家形埴輪	屋根部	高さ 7.7		やや硬	淡橙赤色	やや粗	ナデ	30	
312	前方部頂 南	埴輪列付近	家形埴輪 か	基底部	高さ 8.1		硬	明赤褐色	非常に粗	内: ヘラケズリ 外: ヨコハケのち ナデ	30	
313	後内部頂 西	10~11区 付近 表土	家形埴輪	基底部	高さ 3.6		硬	暗赤褐色	精良	ヨコナデ	30	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	押因No	備考
314	くびれ部 東	表採	家形埴輪	裾廻り 突帯部	高さ 3.4		硬	赤橙色	粗	ナデ	30	赤色顔料塗布
315	後円部頂 東	1~2区 流入土	家形埴輪	基底部	高さ 4.1		硬	赤橙色	粗	内: タテハケのち ヨコナデ 外: ヨコハケのち ヨコナデ	30	
316	後円部頂 北	7~8区 流入土	家形埴輪	裾廻り 突帯部	高さ 2.9		硬	淡灰褐色	きわめて粗	ヨコ方向ナデ	30	
317	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土 A層	家形埴輪	基底部	高さ 5.0		普通	淡橙色(内 而暗褐色)	粗	内: ナナメハケの ちヨコナデ 外: 摩滅のため不 明	30	
318	後円部頂 北	9~10区 表土	家形埴輪	基底部	高さ 4.8		やや硬	淡暗赤褐色 (内面淡橙 赤色)	非常に粗	内: ユビオサエ、 ナナメナデ 外: ナナメナデ	30	
319	後円部頂 南	表土	家形埴輪	腰部	高さ 13.5		硬	暗橙色	やや粗	内: ナデ 外: タテハケ	30	
320	後円部西 斜面中位 付近	表採	家形埴輪 ?	壁部?	高さ 6.1		普通	淡灰褐色	粗	内: 摩滅のため不 明 外: ナデ	30	盾形か 外面赤色顔料 塗布
321	後円部頂 北	7~8区 流入土	家形埴輪	壁部	高さ 7.6		やや硬	根褐色	粗	タテ方向ナデ	30	
322	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土 A層	家形埴輪	屋根部	長さ 3.7		硬	淡茶褐色	やや精良	内: ヨコナデ 外: 不明	30	
323	前方部頂 東	1区 埴輪列直上	家形埴輪	屋根部 ?	長さ 5.9		軟	淡明褐色	やや精良	内: ナデ 外: 不明	30	
324	後円部根 北側	埴輪列H付近	家形埴輪	屋根部 ?	長さ 5.8		軟	淡赤褐色	非常に粗	内: ユビオサエ、 ナデ 外: 不明	30	
325	後円部根 北側	29区 流入土	盾形埴輪	盾面部	高さ 6.5		やや硬	根褐色	やや粗	ナデ	31	
326	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	盾形埴輪 ?	盾面部	高さ 3.6		普通	根褐色	きわめて粗	内: 摩滅のため不 明 外: ナデ	31	
327	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	盾形埴輪 ?	盾面部	高さ 3.5		普通	淡灰褐色(内 面橙褐色)	やや精良	ナデ	31	
328	後円部北	43~45区 流入土	盾形埴輪 ?	盾面部	高さ 4.0		やや軟	黒灰茶色(内 面淡灰茶色)	非常に粗	摩滅のため不明	31	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	押図No	備考
329	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土D層	盾形埴輪	盾面部	高さ 9.3	硬	淡暗褐色	非常に粗	ナデ	31		
330	後円部壇 北側	41区	盾形埴輪	盾面部 ?	高さ 4.8	軟	灰橙色	非常に粗	内:摩滅のため不明 外:ナデ	31		
331	後円部壇 北側	38区	盾形埴輪	盾面部 ?	高さ 4.1	硬	淡乳灰茶色	やや精良	ナデ	31	外面赤色顔料 塗布	
332	後円部北	26~27区 表土	甲冑形埴 輪		高さ 5.4	やや硬	褐色	粗	内:ナデ 外:タテナデ(一部ユビオサエ)	31		
333	後円部北	5~6区 流入土	甲冑形埴 輪	草摺部	高さ 5.3	やや軟	赤褐色	やや粗	ナデ	31		
334	後円部頂 西	2~3区 横乱坑 流入土	甲冑形埴 輪	草摺部	高さ 5.4	やや硬	淡橙褐色	やや粗	内:ナナメナデ 外:ナデ	31		
335	後円部頂 西	2~3区 流入土 横乱坑	甲冑形埴 輪	草摺部	高さ 5.4	普通	褐色	非常に粗	内:ナデ? 外:ナナメハケ	31		
336	後円部頂 西	25~26区 表土	甲冑形埴 輪	草摺部	高さ 3.6	やや硬	橙褐色	非常に精良	内:斜離 外:ナデ	31		
337	後円部西	29~30区 流入土	甲冑形埴 輪	草摺部	高さ 4.9	やや硬	淡橙褐色	やや粗		31		
338	後円部西	12~13区 表土	甲冑形埴 輪	草摺部	高さ 3.4	普通	淡橙褐色	やや粗	ナデ?	31		
339	後円部西	24~25区 流入土	甲冑形埴 輪	草摺部	高さ 6.2	普通	淡灰茶色	やや粗	内:ユビオサエ 外:不明	31		
340	くびれ部 (1次)	30区	甲冑形埴 輪	草摺部	高さ 3.4	硬	褐色	やや粗	不明	31		
341	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	甲冑形埴 輪	草摺部	高さ 4.2	普通	淡墨灰色(内 面淡紅褐色)	非常に粗	ナデ?	31		
342	後円部壇 北側	38区	甲冑形埴 輪	草摺部	高さ 5.2	軟	灰橙色	非常に粗	内:ナデ 外:不明	31	外面に赤色顔 料残存	
343	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	不明形象 埴輪		高さ 4.9	軟	褐色	やや粗	内:不明 外:ヨコハケのち ナデ	31	344と同一個 体か?	
344	くびれ部 (1次)	21~22区 拡張区	不明形象 埴輪		高さ 5.4	やや軟	暗褐色	やや粗	内:不明 外:ヨコハケのち ナデ	31	343と同一個 体か?	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	標図No.	備考
345	後円部西	18~19区 表土	不明形象 埴輪		高さ 3.8		硬	淡橙色	粗	ナデ	31	一部赤色顔料 残存
346	くびれ部 (1次)	23区 拡張区	不明形象 埴輪		高さ 5.5		軟	褐色	やや粗	ナデ	31	
347	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	不明形象 埴輪		高さ 5.4		やや軟	淡橙色	非常に粗	摩滅のため不明	31	
348	くびれ部 (2次)	拡張区 流入土	盾形埴輪 ?		高さ 7.8		硬	褐色	粗	内:ナデ 外:不明	31	
349	後円部西	26~27区 流入土	不明形象 埴輪		高さ 4.4		軟	淡橙褐色	粗	内:ナデ 外:摩滅のため不明	31	
350	後円部西	表土	不明形象 埴輪		高さ 7.2		普通	淡赤褐色(内 面淡灰褐色)	きわめて粗	内:摩滅のため不明 外:タテ方向ナデ	31	円形スカシリ
351	前方部頂 西	5区 埴輪列付近 表土	不明形象 埴輪	基部	底径 高さ 24.0 4.0		硬	淡橙赤色	非常に粗	内:ナナメ力向ナ デ 外:ヨコ方向ナデ	31	
352	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	不明形象 埴輪		高さ 5.5		普通	淡橙色	やや粗	内:ユビオサニ、 ナデ 外:ヨコハケのち ヨコナデ	31	
353	くびれ部 (1次)	16~17区 表土	不明形象 埴輪		高さ 5.5		やや軟	褐色(内面 淡橙茶色)	やや粗	ナデ	31	
354	前方部頂	5~7区 流入土	不明形象 埴輪		高さ 5.7		やや軟	灰橙色	やや粗	内:ナデ、ユビオ サエ 外:ナナメハケ	31	
355	後円部東 北側	45区 西拡張区	不明形象 埴輪		高さ 4.7		硬	淡橙褐色	粗	内:ヨコハケのち ヨコ方向ナデ 外:ナナメハケ、 タテ方向ナデ	31	
356	後円部東 北側	埴輪列Y付近 表土	不明形象 埴輪		高さ 6.8		硬	淡橙褐色	非常に粗	内:ナデ、ユビオ サエ 外:ナデ	31	
357	後円部西	29~30区 流入土	不明形象 埴輪		高さ 17.1		やや硬	明赤褐色	非常に粗	内:タテナデ 外:摩滅のため不明	31	外面に線刻状 痕跡あり
358	新池東岸 表土		盾形埴輪		高さ 8.4		硬	淡橙褐色	きわめて粗	内:ナデ? 外:ナデ	31	

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部 位	法 量 (cm)	残存度	焼成	色 調	胎 土	調 整	標図No.	備 考
359	後内部西	不明	土師器壺	口縁部	高さ 3.1		非常に軟	淡褐色	非常に粗	内:不明 外:ヨコ方向ナデ	32	
360	後内部東	1~2区 流入土	土師器壺	口縁部	高さ 2.2		硬	暗赤褐色	粗	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ(一部ユビオサニ)	32	
361	くびれ部 (1次)	拡張区	土師器壺	肩部	高さ 4.8		硬	淡乳褐色	やや精良	内:ナデ 外:頸部ナデ、ヨコハケ	32	
362	後内部西	19区 淡灰褐色粘性 砂質土	土師器壺	体部	高さ 3.4		軟	淡茶褐色	やや精良	内:ヨコナデ、ナナメナデ 外:ヨコナデ	32	埴丘盛土内
363	後内部西	20~21区	土師器壺	肩部	高さ 5.4		非常に軟	淡褐色	やや精良	内:不明 外:タテハケのちヨコハケ	32	
364	後内部北	27~28区 流入土	土師器壺	肩部	高さ 3.9		やや硬	暗茶褐色	普通	内:ハケメのちナデ・ユビオサエ 外:タテハケのちヨコハケ	32	
365	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土D層	土師器壺	底部?	高さ 1.1		硬	茶灰褐色	やや精良	内:ユビオサエ 外:ハケメ	32	
366	後内部西	24区	土師器 高坏	坏部	高さ 2.9		非常に軟	明赤褐色	やや粗	摩滅のため不明	32	
367	後内部西	31~33区 断削 黒色小繖混砂 質土	土師器 高坏	口縁部	高さ 4.0		普通	淡褐色	やや粗	ヨコナデ	32	埴丘盛土内
368	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	土師器 高坏	脚部	高さ 6.6		非常に軟	淡乳黃褐色 (内面淡乳 灰褐色)	やや精良	ナデ	32	
369	後内部内	21区 表土	土師器 高坏	坏部	高さ 2.5		やや硬	茶褐色	普通	タテハケ	32	
370	くびれ部 (2次)	拡張区 堆輪集積 流入土D層	土師器 高坏	脚~坏 部	底径 高さ 6.6 5.6		やや軟	明橙色	やや粗	外:板ナデ 内:ヨコ方向ヘラ ケズリ	32	ミニチュア製品
371	後内部西	不明	弥生土器 壺	口縁部	高さ 1.8		軟	淡茶褐色	非常に粗	ナデ?	32	
372	後内部西	31~33区 断削 黒色小繖混砂 質土	弥生土器 壺	肩部	高さ 2.4		硬	淡茶褐色	やや精良	内:ユビオサエ 外:タクキ	32	埴丘盛土内

番号	調査区	出土地区 および出土層	器種	部位	法量(cm)	残存度	焼成	色調	胎土	調整	坪岡No.	備考
373	後円部西	不明	弥生土器 壺	体部	高さ 3.1		硬	淡暗茶褐色	粗	内：ヨコナデ 外：タタキ	32	
374	くびれ部 (1次)	不明	弥生土器 壺	口縁部	高さ 0.9		硬	明赤橙色	精良	ヨコナデ	32	口端部上面と 端面にキザミ メ
375	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	弥生土器	頸部	高さ 1.9		やや軟	灰黒色(内 面橙色)	非常に粗	内：ナデ 外：ヘラ括き列線 文・ミガキ	32	
376	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	弥生土器	口縁部	高さ 1.7		やや軟	暗淡橙色	非常に粗	外：ヨコナデ	32	
377	くびれ部 (1次)	拡張区 流入土	弥生土器	口縁部	高さ 1.0		普通	橙赤色(内 面淡灰黑色)	粗	内：ヘラガキ列線 文 外：ヨコ方向ナデ	32	
378	後円部西	不明	弥生土器	肩部	高さ 2.4		やや硬	赤橙色	やや粗	内：ユビオサエ、 ナデ 外：ヨコナデ	32	
379	くびれ部 (1次)	20~21区	壺	頸部	高さ 4.7		硬	橙褐色(内 面暗褐色)	粗	内：ナデ、ユビオ サエ 外：ナデ	32	
380	後円部内	20~31区 表土	弥生土器 壺	体部	高さ 7.3		やや硬	茶褐色	粗	内：ヨコハケ 外：タタキ	32	
381	くびれ部 (2次)	拡張区 埴輪集積 流入土D層	土師器羽 蓋	口縁～ 体部	口径 22.0 高さ 16.1		硬	明茶色	粗	内：ヨコハケのち ユビオサエ、ナ デ 外：ヨコ方向ナデ、 タテハケ	32	
382	前方部西	流入土	弥生土器 壺	口縁部	口径 17.2 高さ 7.2		やや軟	淡茶灰色(内 面淡褐色)	非常に粗	摩滅のため不明	32	
383	くびれ部 (1次)	9区 流入土	弥生土器 高杯	脚部	脚端径 22.4 高さ 6.6		やや硬	褐色	やや粗	内：ヨコハケ、ヨ コナデ 外：ヨコハケ、ナ デ	32	内外面赤色顔 料塗布
384	くびれ部 (1次)	拡張区 24~25区 流入土D層	碑状瓦製 品		高さ 4.8 最大巾 5.4		軟	淡灰黑色	やや精良	上面・下面ヘラケ ズリ	32	
補1	前方部頂 東	1区 埴輪列直上	円筒埴輪	底部	高さ 4.6		硬	褐色	粗	内：ナデ 外：タテハケのち ヨコハケ	20	
補2	前方部東	8~10区	円筒埴輪	底部	高さ 5.1		硬	明橙色	やや粗	内：ユビオサエ 外：タテハケ、ナ デ	20	
補3	前方部頂 南	3~4区	円筒埴輪	底部	高さ 4.7		普通	淡乳褐色	粗	内：ユビオサエ 外：ナナメ方向ナ デ	20	

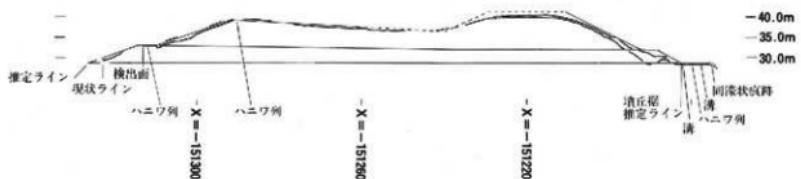
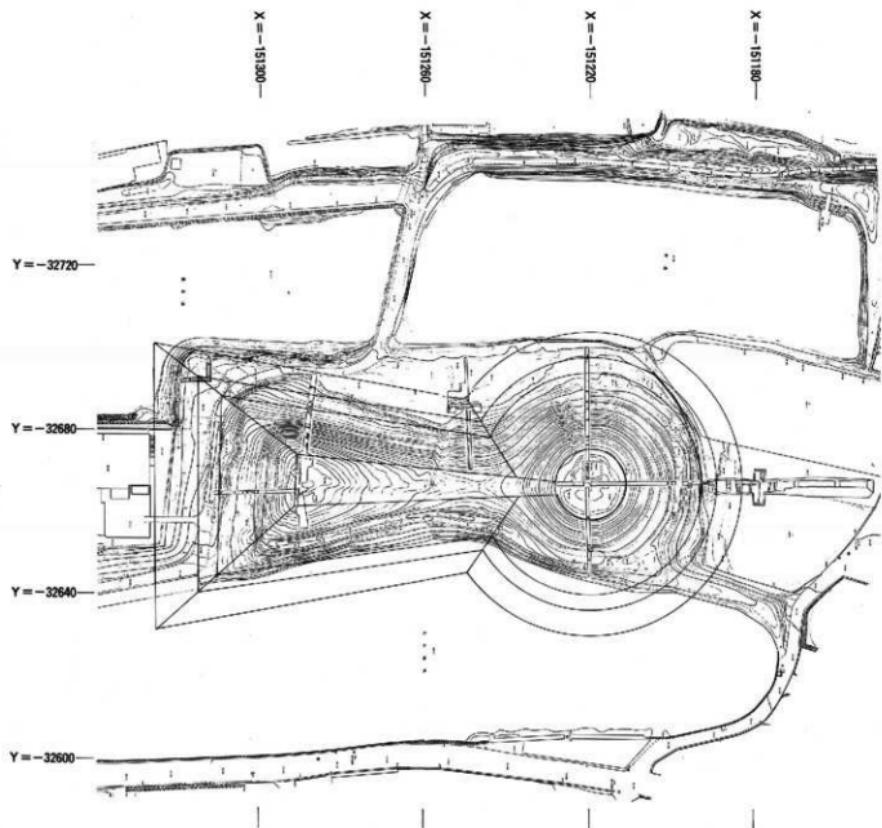
IV. 考 察

1. 墳丘プランについて

心合寺山古墳の墳丘プランについては、狭小なトレンチ調査しか行っておらず、現段階ではまったく資料不足である。また今回一定の線引きを試みたものの、筆者自身、多くの検討不足や課題点を認識する結果に終ってしまった。ここでは今回の調査で確認できた点と課題となる点を整理しておく意味で、敢えて拙い検討案を提示した。多くのご教示を賜りたい。

まず墳丘裾のラインについては、くびれ部西側で裾部基底石を確認した。後円部裾については先述したように、裾部北側平坦面埴輪列に伴う溝と墳丘残存部の高まりとの間に想定できる。さらに後円部の墳丘斜面の傾斜角を後円部各トレンチの調査成果から平均して 27° 前後と想定し、さらに段築平坦面の位置、高さをくびれ部と同じ高さと想定して裾のラインの位置を確定した。次に段築平坦面はくびれ部西側での一部を、前方部西側でその痕跡を確認した。また、昭和63年度調査時に、前方部前面で埴輪列の遺存する段築平坦面を確認している。くびれ部西側の墳丘裾の葺石残存部分の傾斜角は 30° 前後である。また裾部基底石の標高は28.9m、段築平坦面の標高は32.0mであることから、比高差は3.1mであった。この墳丘裾の傾斜の上方への延長と段築平坦面の水平方向の延長の交点を図上で求めると、段築平坦面の幅は4.2m前後に想定できる。前方部前面においては、前方部上段斜面の傾斜角は 20° 前後と推定される。また昭和63年度調査時の埴輪列の遺存していた段築平坦面の標高33m前後であった。この傾斜面の延長と段築平坦面の水平面の延長の交点を図上で求めると、前方部前面の埴輪列から北へ2.1m前後の位置になり、くびれ部で求めた段築平坦面の幅約1/2になる。このことから、埴輪列は段築平坦面の中央付近に樹立されていたのではないかと想定した。後円部の段築平坦面については痕跡すら確認できない状況であったため、くびれ部西側と同様に標高32m前後に幅4.2m前後の平坦面が存在すると想定した。墳頂部平坦面については、後円部頂は検出した墳丘面の状況から直径17m前後に想定される。前方部頂の平坦面については、今回検出した埴輪列を前方部頂全体を取り囲み、後円部につながる埴輪列と考えた。また埴輪列と上段斜面との間には幅1m程度の平坦部分があるものと考えた。

以上から次のような作図作業を行った。まず後円部の裾のラインにはくびれ部西側裾と後円部北側裾推定点を通り、後円部頂中心点を中心とする円を求めたところ、裾を通る円は後円部頂の円と同心円にならないため、後円部頂の中心を若干東にずらして補正した。後円部径は直径74m前後になる。前方部裾についてはくびれ部西側墳丘裾の基底石の延長になるが、前方部前端裾のラインについては、まったく確認できていない。このため前方部下段の傾斜角は上段と同様の 20° 前後とし、裾部の標高はくびれ部と同様の標高28.9m前後と想定して図上で交点を求め、前方部前端のラインとした。段築平坦面については、前方部について、西側くびれ部及び前方部前面の段築平坦面と前方部西側の段築の痕跡の3ヶ所を結ぶラインを想定したところ、前方部裾ライン西側隅角と前方頂部外郭西隅角との対角ライン上に載らなくなってしまった。これを整合させるためには、前方部前面段築平坦面の南辺を西側で開かせるか、前方部西裾のラインを外側に開かせるしかない。ここでは、段築平坦面の南辺を開かせて補正したが、くびれ部の墳丘裾は極く狭い範囲しか検出できおらず、また造り出し等の施設の存在する可能性もあり、前方部西裾のラインがさらに外側に開く可能性も考えられる。主軸ラインについては、当初後円部の中心点と前方頂埴輪列の特殊基部AとBの間の中心を通るラインを想定したが、これでは現況のコンターラインの示す墳頂部の位置から大きく西へ外れてしまうため、現段階では後円部中心点から前方部の現況コンターラインの頂点を通るラインを主軸とした。ただ特殊基部は埴輪列を3分して等間隔に樹



第33図 心合寺山古墳墳丘プラン検討図 (1/1200)

立されていた可能性の高いことから、前方部頂の平坦面は主軸ラインから西へ振れるものと想定した。このことと関連する可能性があるが、前方頂の東西方向の埴輪列は、前方部前面の埴輪列がほぼ国土座標の東西軸上に載るのに対し、西で北へ3.5° 振れている。つまり前方頂平坦面自体が主軸に対し西へ振れているような印象があり、西側から眺めることを意識して築造されていることと関連するものかもしれない。墳丘東側については全くデータがないため反転復元した。そのようにすると、東側の段築平坦面は大竹総池西岸付近になるが、ここでは渴水時、地表面に埴輪片などが多く散布しており注意される。

なお墳丘の外側の施設については、今回はプランの検討を行ひ得なかった。ただ後円部裾北側では周濠状の痕跡やこれと墳丘裾との間の平坦面を確認している。またくびれ部西側でも墳丘裾と周濠部との間の平坦面を確認している。墳丘裾と周濠との間に基壇状の施設の存在も予想される。また、さらに下に最下段の墳丘裾の存在する可能性もあり、そうすると3段築成の墳丘構造ということになるが、現段階では今後の発掘調査の成果を待つしかなく、ここでは二段築成の墳丘に復元した。周濠の外堤については、東側は、昭和59年度の調査成果から現況市道ラインがその痕跡と考えられるが、西北側については現況の堤が近世のものであることが、平成元年度の発掘調査でわかっている。このことから盾形の周濠が想定されるが、点的な調査しか行ひ得ていない現段階では何とも言えない。また、墳丘の北東側、西側、南側にみられる渡り土手状の部分は、古墳本来のものであるのか興味深いところであるが、これについてはまったく発掘調査のデータがなく今後の課題である。

以上の検討作業の結果、心合寺山古墳の墳丘のプランは全長140m前後、後円部径74m前後を測る、基壇状平坦面をもつ二段築成の前方後円墳に想定される。また立面プランについてであるが、今回は充分な検討をなし得なかった。ただくびれ部裾の高さは標高28.9mで、段築平坦面の高さはくびれ部では標高32m、前方部は標高33mであるので、前方部に向かってせり上がるものになるようである。頂部の高さは前方部は標高39.2mになる。後円部は現況は標高40mであるが、削平のため本来の高さは不明である。このためくびれ部段築平坦面の高さに、裾と段築平坦面との比高差を2倍にした高さを足して仮に求めているが、調査による根据に欠くものである。墳丘各部の推定法量については、下表のとおりである。なお墳丘の各部の推定法量の一部については、今回の報告以前に一部報告を行つたものと、異なるものがある。検討を行うなかで、修正を行なわざる得なかつたものであり、改めておきたい。

	後円部	前方部	くびれ部
径・長	径74.0m前後	幅(70m前後)	幅(4.2m)
標高	頂部(39.9m以上)	頂部 39.2m	頂部 —
	裾部 28.9m	裾部 —	裾部 28.9m
	段築平坦面	33.0m	段築平坦面 32.0m
裾部からの比高	頂部11.1m以上	頂部 10.3m	頂部 —
		段築平坦面 —	段築平坦面 3.1m
傾斜角度	(27° 前後)	(20° 前後)	30° 前後

() 内は推定

表6 墳丘各部の推定法量

2. 形象埴輪の出土状況について

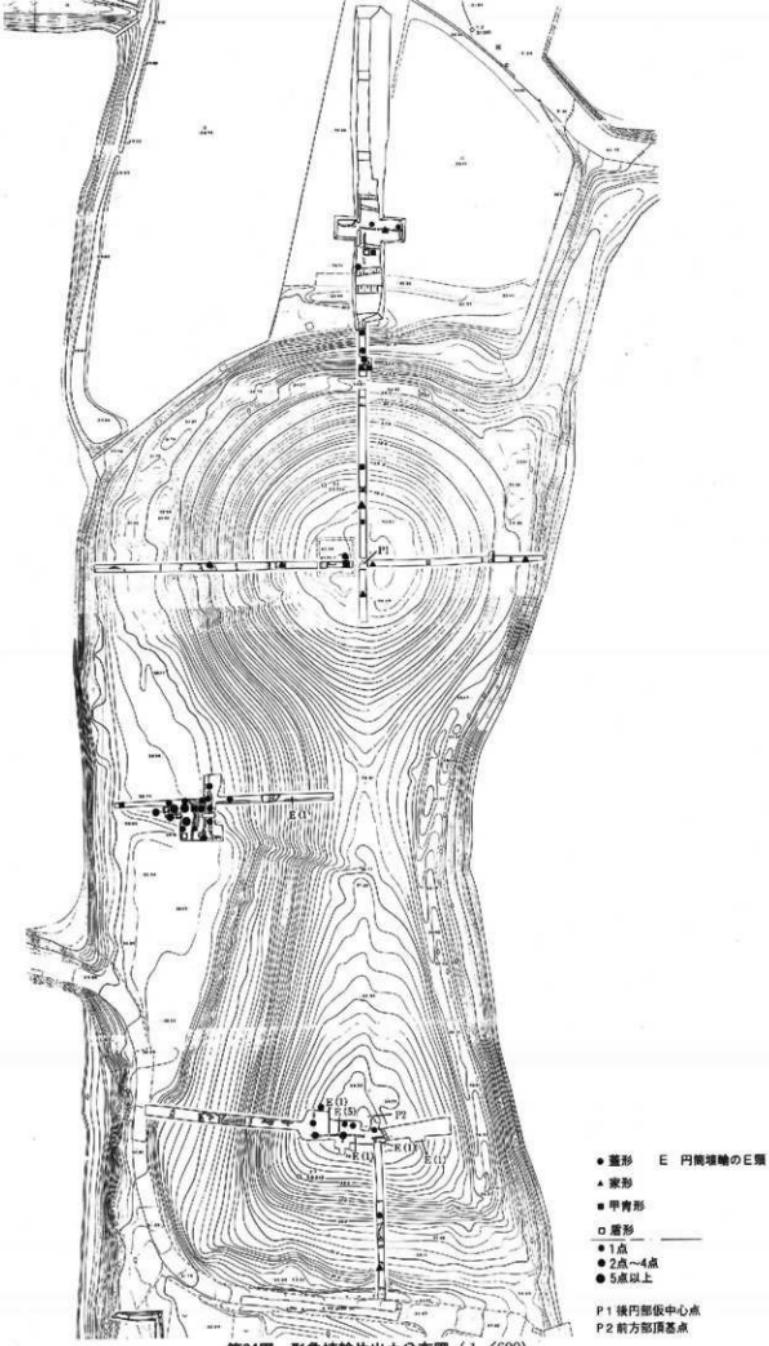
これまでの調査で埴輪列は3ヶ所を確認しているが、形象埴輪の原位置を保つものは全くないといつてよい。また小片がほとんどである。このような状況であるが、形象埴輪の配置の様相を傾向として捉えるため、器種別の分布図を作成した。壺形埴輪については煩雑になるため、分布図、表に含めなかつた。形象埴輪で器種のわかるものの総数は84点であり、器種別の出土数は壺形埴輪53点、家形埴輪16点、甲冑形埴輪の草摺部が11点、盾形埴輪が4点出土している。この他に駒形埴輪になる可能性のあるものが4点出土しており、このうち3点がくびれ部西側で、1点が後円部西側下方で出土している。また形象埴輪の器種別の分布状況であるが、蓋形埴輪はくびれ部で37点、前方部で10点、後円部で3点、後円部北側平坦面で3点である。家形埴輪は後円部で10点、くびれ部で2点、前方部で3点、後円部裾北側平坦面で1点出土している。このうち後円部の10点のうち5点が頂部付近で出土している。甲冑形埴輪の草摺部は後円部で8点、くびれ部で2点、後円部裾北側平坦面で1点出土している。盾形埴輪はくびれ部で3点、後円部裾北側平坦面で1点出土している。分布図から次のことが読みとれる。

・後円部では家形埴輪、甲冑形埴輪が多く、後円部頂にはこれらの形象埴輪が配されており、削平に伴い一部が墳丘斜面に転落したものと思われる。

・くびれ部西側の墳丘裾部付近には、蓋形埴輪、壺形埴輪が非常に多く出土している。これらの出土状況は段築平坦面が削平されて下方に転落と考えられるものであることから、段築平坦面の埴輪列に蓋形埴輪、壺形埴輪の配されていた可能性がある。壺形埴輪は昭和63年度調査時の前方部前面の埴輪列付近でも小型のもの（Bタイプ）が出土しており、壺形埴輪は段築平坦面には配されていたとみてよい。しかし蓋形埴輪は前方部前面の段築平坦面では出土していないことから、段築平坦面全体に配されていたというよりは、くびれ部の段築平坦面ないしは裾部周辺で壺形埴輪とともに集中して配置するようなことを行っていたのかもしれない。

・先述したように前方部頂部では、小型円筒埴輪による埴輪列の外側に、蓋形埴輪を載せた大型円筒埴輪を配していたものと思われる。また大型の壺形埴輪（Aタイプ）や朝顔形埴輪も埴輪列の内側に配されていた。これについては、さらに内側に埴輪列の存在することを示唆するものであり、前方頂部のみを囲む方形区画になるのかなど興味深い。ここでは小型の壺形埴輪（Bタイプ）の出土は少ない。また前方部南側トレチの下方で家形埴輪片が1点出土しており、注意される。今回検出した小型円筒埴輪による埴輪列は、前方部頂平坦面の外郭全体を取り囲み、後円部方向へつながっていくものである可能性が高いと現段階では考えているが、そうであるとすれば、くびれ部で多く出土した蓋形埴輪、壺形埴輪の破片の一部は前方部頂部からの転落も想定されよう。

・後円部裾北側平坦面の埴輪列付近の家形埴輪、甲冑形埴輪の草摺部などは、後円部上方からの転落の可能性が高く、蓋形埴輪、盾形埴輪などについても判然としないが、埴輪列中の大型の基部については注意される。ここでは前方頂部の蓋形埴輪を載せていたと予想される大型円筒埴輪の口縁部である口縁E類は出土していない。今回は大型円筒埴輪として取り扱ったが、盾形埴輪などの形象埴輪の基部になる可能性も残されている。



第34図 形象埴輪片出土分布図 (1 / 600)

表7 形象埴輪トレンチ別出土数

	家形	蓋形	盾形	甲冑形(草摺)	計
後円部西側トレンチ	2	2	0	2	6
後円部東側トレンチ	3	0	0	0	3
後円部北側トレンチ	4	1	0	6	11
後円部南側トレンチ	1	0	0	0	1
くびれ部西側(1次)トレンチ	0	21	2	2	25
くびれ部西側(2次)トレンチ	2	16	1	0	19
前方部西(頂部)及び東側トレンチ	2	9	0	0	11
前方部西側トレンチ(斜面部)	0	0	0	0	0
前方部南側トレンチ(斜面部)	1	1	0	0	2
後円部裾北側トレンチ	1	3	1	1	6
計	16	53	4	11	84

表8 出土古墳時代土師器一覧表

	出土トレンチ	出土地区	出土遺構・土層	器種	
1	後円部西側トレンチ	20~21区	表土	甕(肩部)	363
2			表土	甕(肩部)	
3		19区	淡灰褐色粘性砂質土	甕?	362
4		21区	表土	高坏(坏部)	369
5		23区	表土	器台?	
6		24区		高坏(坏部)	366
7		30~33区 西断割	黑灰色砂混砂質土	高坏(口縁部)	367
8				高坏(脚部)	
9				高坏(脚部)	
10				甕(口縁部)	359
11	後円部東側トレンチ	1~2区	流入土	甕(口縁部)	360
12	後円部北側トレンチ	9~10区	表土	甕(体部)	
13		27~28区	流入土	甕(体部)	364
14	くびれ部西側トレンチ	拡張区 21~22区	流入土A層	甕(肩部)	361
15		31~32区	流入土	甕(肩~体部)	
16		拡張区 23区	流入土D層	甕(体部)	365
17			あげ土	高坏(口縁部)	368
18		拡張区埴輪集積	流入土D層	高坏(脚~杯部)	370

3. 築造時期について

心合寺山古墳の築造時期を考えるにあたっては、埴輪と土師器の様相をみる必要があるが、土師器については船橋O-⁽¹⁾I型式の段階のものとみられ、円筒埴輪のあり方よりやや時期的に古い様相を示しているように思われる。が、土師器の出土状況は362.367gが埴丘構成層から出土している以外は、流入土層等からの出土であるので、時期を判断する材料としては、円筒埴輪の様相を主にとりあげたい。円筒埴輪は、黒斑を有する野焼成のものであり、タガの形状は台形のものがほとんどである。調整については先述したように、タガ間を一単位ないし2単位での原体で回すB種ヨコハケがほとんどを占める。川西編年のⅢ期に位置づけられるものである。心合寺山古墳の円筒埴輪は、大東市堂山1号墳の円筒埴輪と諸特徴が類似していること、さらにこれらの諸特徴は、古市古墳群の誉田御廟山古墳、西萬山古墳と共通するものであり、ほぼ同時期のものであることが既に指摘されている。⁽²⁾また焼成についても注意される点がある。心合寺山古墳の円筒埴輪は全体に硬質なものが多い。底部の残るものに注目してみると、実測を行った54点中35点が硬質なものであった。また形象埴輪ではあるが、小型の壺形埴輪(Bタイプ)も硬質なものがほとんどである。このことから心合寺山古墳の円筒埴輪は、野焼成の技術がかなり高まつた段階のものとみられる。

土師器のうち高杯(ミニチュア)の370については、大東市堂山1号墳においても、ミニチュア製品ではないが、高杯が出土している。⁽⁴⁾堂山1号墳のものは、心合寺山古墳のものと較べると、若干脚部が開いており、また心合寺山古墳のものが外面に横方向の板ナデを行うに対し、縦方向の板ナデを行っている。が、脚柱部内面にヘラケズリを行う点や全体的なプロポーションは、心合寺山古墳のものと近いものであり、時期的に近いものとみてよいと思われる。堂山1号墳においては、円筒埴輪列の内側からT K73型式併行期とみられる須恵器が出土しているが、心合寺山古墳においては同時期の須恵器はまったく確認できなかった。⁽⁵⁾心合寺山古墳が全長140m前後の前方後円墳であり、径25mの円墳である堂山1号墳と較べると、築造期間を長く見積る必要のあることを考えれば、少なくとも心合寺山古墳の築造開始時期については、T K73型式の須恵器の出現以前と考えられる。誉田御廟山古墳との前後関係については、心合寺山古墳の築造開始時期が若干先行する可能性を考えているが、大型前方後円墳の築造期間の幅を考えれば、大差のあるものとは考えられない。

以上から、心合寺山古墳の築造時期は、古墳時代中期の第2四半期あたりに求められる。

4.まとめ

これまでの調査成果を簡単に整理しておきたい。

【埴丘プラン及び埴丘構造】現段階では基壇施設の上に全長140m前後の二段築成の埴丘を築成するものとみられる。南面する前方後円墳で、西下りの傾斜面に築造されているにも関わらず、主軸は国土座標にほとんど振れないほど、南北にそろえる。また、前方部頂埴輪列が若干主軸に対し、北で西に振れることが示すように、西からの眺めることを意識して築造されている可能性がある。また埴丘の周りには全長250m前後の盾形かとみられる周濠が取りまくようであり、現況では渡り土手状の部分もあるが、古墳本来のものであるかは不明である。

【外表施設】少なくとも埴丘斜面には葺石が葺かれている。葺石の材質は八尾市東部山麓産の黒雲母花崗岩がほとんどである。(後述付論1参照)埴輪列は埴丘頂部、段築平坦面、周濠と埴丘裾部との間で確認している。後円部頂には、家形、甲冑形等が置かれ、前方部頂には、小形円筒埴輪による埴輪列を配し、内側に壺形埴輪や朝顔形埴輪を、外側に蓋形埴輪を載せた大型円筒埴輪を、区画のコーナー及びこの間

を3等分した2ヶ所に置いていたようである。段築平坦面には、壺形埴輪を配した小型円筒埴輪による埴輪列を樹立していたようである。埴丘裾と周濠の間には、小形円筒埴輪を10本はさんで大型円筒埴輪または盾形等の基部を配する。

【埴丘築成】後円部北側からくびれ部にかけては、少なくとも標高29~30m付近より上は、厚さ0.2m程度の単位で人为的に盛土がなされている。盛土を構成する土は、当墳周辺の地山を構成する土と類似するものがある。また、後円部裾北側平坦面で、一部埴丘築造前の旧地形を利用した痕跡を確認した。

【主体部】後円部頂で埴丘面の土質の変化する部分を確認しており、主体部に関連するものである可能性がある。また、後円部頂西寄りで擾乱坑を確認しており、さらに表土内で不明鉄器片が出土していること、過去に鉄斧片が採集されていることから、主体部が擾乱を受けている可能性がある。また当墳の南側市道付近で長持形石棺の継掛突起片が採集されており、当墳の主体部に伴うものである可能性がある。

【土師器】後円部を中心に、甕、高杯などの小片が出土しており、ほぼ船橋O—I型式の段階のものである。

【築造時期】主に円筒埴輪の様相から、古墳時代中期の第二四半期頃と考えられる。

註記

- (1) 平安学園考古学クラブ『船橋II』1962年
- (2) 川西宏幸「円筒埴輪船論」『考古学雑誌』第64巻 第2・第4号 1979年
- (3) 小浜 成「堂山1号墳出土円筒埴輪の検討」「堂山古墳群」(大阪府文化財報告書 第45報) 大阪府教育委員会 1994年
- (4) 木下 真「堂山1号墳出土の須恵器」「堂山古墳群」(大阪府文化財報告書 第45報) 大阪府教育委員会 1994年
- (5) 前掲註 (4) 文獻

心合寺山古墳の埴輪・土師器に含まれる砂礫について

奥田 尚

1.はじめに

八尾市の東山麓に中河内最大の前方後円墳である心合寺山古墳がある。この古墳から出土した埴輪と土師器の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。観察した埴輪の器種は円筒埴輪、蓋形や家形、壺形等の形象埴輪であり、土師器は高杯、壺、甕である。

観察は石種・鉱物種・生物片の色、形、大きさ、量について行った。砂粒を識別する目安としては、石種として花崗岩、閃緑岩、斑臘岩、流紋岩、安山岩、玄武岩、火山ガラス、砂岩、泥岩、チャート、片岩、蛇紋岩、変輝緑岩、鉱物種として石英、長石、黒雲母、白雲母、角閃石、輝石、橄欖石、柘榴石、磁鉄鉱、生物片として海面の骨片、ウニの刺、貝殻、有孔虫、炭質物等である。また、火山岩と深成岩とを区別するために、鉱物が結晶面で囲まれている自形か結晶面が認められない他形かの判断もした。特に、石英、角閃石、輝石について注意をはらった。形については、角、亜角、亜円、円の4段階に区分した。粒径についてはmm単位で目測した。量については、非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの6段階とした。

岩石片の同定については、鉱物構成で名称が変わり、粒が小さいため判断しにくい場合が多い。そのために、石英・長石、石英・長石・黒雲母、長石・黒雲母が噛み合っていれば花崗岩とし、角閃石が噛み合っていれば閃緑岩、輝石や橄欖石が噛み合っていれば斑臘岩とした。また、自形の石英がみられれば流紋岩に、自形の角閃石、輝石がみられれば安山岩とした。片理があれば片岩とした。このような岩石区分は岩石全体が判れば名称が異なる場合もある。

2.砂礫粒の特徴

識別できた砂礫種は、岩石片として花崗岩、閃緑岩、流紋岩、砂岩、チャート、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石である。各々の特徴について述べる。

花 岗 岩：色は灰白色で、粒形が角、亜角、粒径が最大7mmである。石英・長石・黒雲母、石英・長石、長石・黒雲母が噛み合っている。片麻状を示すものがある。

閃 緑 岩：色は灰白色、粒形が角、粒径が最大5mmである。長石・角閃石、石英・角閃石、石英・長石・角閃石が噛み合っている。

流 紋 岩：色は灰白色で、粒形が角、亜角である。粒径は最大9mmである。石基はガラス質で、石英の斑晶があるものがある。

砂 岩：色は暗灰色で、粒形が亜角である。粒径が最大0.7mmである。細粒砂である。

チャート：色は灰色、灰白色、暗灰色、黒色、茶褐色と様々で、粒形が角、亜角である。粒径が最大6mmである。

火山ガラス：無色透明、貝殻状、粒径が最大0.7mmである。

石 英：無色透明、粒形が角、粒径が最大2mmである。複六角錐あるいはその一部がみられるものがある。

長 石：無色透明、灰白色透明、白色で、粒形が角、粒径が最大7mmである。

黒 雲 母：金色、黒色で、板状、粒状をなし、粒径が最大3mmである。

角 閃 石：黒色、粒形が角、粒径が3mmで、粒状、柱状である。柱状で自形をなすものや結晶面があ

るものがある。

3. 砂礫種構成と類型区分

観察した砂礫種構成からみれば、花崗岩質岩起源と推定される砂礫からなるものを主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、流紋岩質岩起源と推定される砂礫からなるものが僅かにみられる。主要砂礫以外の砂礫をもとにして細分をした（区分の基準は庄内式土器研究Ⅱを参照）。砂礫が少量の場合、観察不良の場合、砂礫が細粒の場合等には類型区分不能とした。I類型は、I b類型、I bd類型、I bdg類型、I bg類型、I g類型に、II類型はII a類型、II ad類型に、IV類型はIV aeg類型、IV agn類型に細区分される。
I類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる I b類型
花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる I bd類型
花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャートが僅かに含まれる、砂岩が含まれることもある I bdg類型
花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、チャートが僅かに含まれる I bg類型
花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、チャートが僅かに含まれる I g類型
II類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる II a類型
閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる II ad類型
IV類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩・安山岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩、泥岩が僅かに含まれる IV aeg類型
流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩・閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、チャート、角閃石が僅かに含まれる IV agn類型

砂礫種構成をもとに区分すれば上記のようになるが、更に、同じ亜類型のものでも砂礫の見掛け（砂礫相）が異なる。人に例えれば人相と同じである。類型がサルやゾウ、ヒト等の区分にあたり、亜類型がゾウのなかのアフリカゾウ、インドゾウ、マンモスゾウのような区分に、ヒトであれば日本人、韓国人、中国人のような区分にあたる。更に、日本人であっても一人一人氏名があり、顔に特徴があるため誰々だと人相により判断されている。顔だけから判断して、常に個人を特定しているといえる。人の顔には目や鼻耳、口等が同じ配列で付いているが、その僅かの配列の違い、個々の大きさや形の僅かの違いがある。その違いが特定されて個人が特定されているといえる。砂礫の見た時の様子からの比較も特徴といえよう。亜類型を砂礫相を考慮して区分すれば、I b類型は更に東山麓A、東山麓Bに、I bd類型は東山麓C、東山麓Dに、I bdg類型は土師里、大和川、他に、I bg類型は石川、他に、II a類型は恩智に、II ad類型は東山麓Cに、IV類型は和泉に区分される。

埴輪や土師器の砂礫の特徴による区分と器種との関係は表1に示すようであるが、ここに示す数字はあくまでも観察した破片の数であり、個体確認ができないものもあり、個体数ではない。数は参考値

としたい。

4. 砂礫の採取地

心合寺山古墳が位置する付近は生駒山地の山麓に形成された中位段丘にあたる。段丘層には八尾市歴史民俗資料館付近で火山灰層も確認されている。高位段丘には向山古墳や愛宕塚古墳等の古墳が築造されている。段丘は砂礫や粘土層からなる。段丘に含まれる砂礫は東に位置する生駒山地の岩石分布と似ている。八尾市恩智や大窪、楽音寺の北方では流出する谷川の上流域に閃綠岩が分布するために比較的の角閃石が多い。また、大窪東方の閃綠岩には粒状を示す黒雲母が多く含まれるため、大窪付近の砂礫には粒状の黒雲母と角閃石が比較的多く含まれる。大窪の東南に位置する高安山付近には細粒の片麻状黒雲母花崗岩（織状花崗岩）が分布する。この南の八尾市黒谷には斑状黒雲母花崗岩が分布する。また、大窪の北では弱片麻状を示す黒雲母花崗岩が暗崎付近まで分布する。

このような岩石分布と山麓の砂礫とを当古墳を築造している付近を中心に近距離で求めれば、埴輪に含まれる花崗岩としたものには、片麻状を示すものが多く、高安山付近の片麻状花崗岩起源の砂礫と推定される。また、黒雲母が粒状で、角閃石が比較的多いことから I a 類型で東山麓 A とした砂礫は八尾市大窪付近の谷川の砂礫と推定され、I bd 類型で東山麓 C とした砂礫は大窪付近の段丘の砂礫と推定される⁽¹⁾。I a 類型で東山麓 B とした砂礫は片麻状を示す花崗岩片が多く、比較的の角閃石が少ないとから水呑地藏尊がある神立付近の谷川の砂礫と推定され、I bd 類型で東山麓 D とした砂礫は神立より西に位置する水越付近の段丘の砂礫と推定される。I bd 類型で石川とした砂礫は I bdg 類型の砂礫と似ており、砂岩や泥岩、チャートが認められないのみである。羽曳野市古市付近から柏原市石川付近の石川の砂礫と推定される。I bdg 類型の砂礫にはチャートと自形の石英が含まれることから大和川か古市よりも北の石川の砂礫と推定される。石川では長石が多く含まれ、大利川では石英が多く、長石は少ない。I bdg 類型で土師里とした砂礫は石川と飛鳥川が合流する付近から柏原市玉手山付近までの砂礫であり、大和川とした砂礫は石川と大和川が合流する柏原市船橋付近から下流の砂礫である。I bg 類型で石川とした砂礫は河内長野市付近から古市にかけての砂礫と推定される。II a 類型で恩智とした砂礫は庄内河内型甕の砂礫と同じで閃綠岩の媒乱した砂礫と推定される砂礫が含まれ、砂礫の採取地としては八尾市恩智神社の東方付近が推定される。II ad 類型の砂礫は I bd 類型で東山麓 C とした砂礫よりも角閃石が多くなった砂礫であり、大窪付近の段丘の砂礫が推定される。IV age 類型、IV agn 類型の砂礫は砂礫の表面が研磨されたようにザラザラしており、角が僅かに円いものからかなり円いものまであり、自形の石英を多く含み、チャート等が含まれることから、羽曳野丘陵や和泉丘陵の砂礫と推定される。地域的には堺市付近の丘陵の砂礫が推定される。

以上のように埴輪に含まれる砂礫から砂礫の採取地を推定すれば、当古墳の東方の山麓、八尾市恩智付近、藤井寺市土師里付近、堺市の丘陵付近が推定される⁽²⁾。砂礫の採取地が埴輪の製作地とすれば、観察した破片数的には生駒山地の山麓で製作されたものが多く、土師里付近や泉北付近から遙々と運ばれているものもある。

5. おわりに

時期的には異なるが、八尾市萱振 1 号墳の埴輪は観察した限り全てが土師里から運ばれているといえる。また、前方後円墳の終わりとなる 6 世紀中頃の時期では、天理市の荒古城や星塚古墳、西乘鞍古墳に奈良市菅原東遺跡付近の埴輪窯で製作された埴輪が運ばれ、桜井市の珠城山 3 号墳や毘沙門塚古墳では一部の埴輪が菅原付近から運ばれている⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

埴輪窓が使用される以前の野焼きの時期においても、古墳近くで多くの埴輪が製作されており、土師里のような一定の場所で製作された埴輪も使用されていることが今回の砂礫観察の結果からもいえる。また、土師器の壺や甕、高杯のようなものも埴輪と同じ砂礫構成を示すことから、これら土師器も埴輪と同じ場所で製作されていたと推定される。

註

- (1) 奥田 尚 (1992) 「河川の砂礫とその類型一大和・河内・伊勢湾周辺を中心として」『庄内式土器研究Ⅱ』庄内式土器研究会。
- (2) 奥田 尚 (1992) 「心合寺山古墳の円筒埴輪の砂礫構成」『八尾市文化財紀要6』八尾市教育委員会。
- (3) 奥田 尚 (1992) 「埴輪胎土に見られる砂礫種」『古代文化』第44巻、9号、古代学協会。
- (4) 奥田 尚 (1991) 「菅原東遺跡埴輪窓跡群出土埴輪の砂礫種構成」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会。
- (5) 奥田 尚 (1995) 「埴輪の表面に見られる砂礫」『桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書』15集。

		I 類型										II 類型		IV 類型	
		b		bd		bdg		bg		a	ad	age	agn		
		東麓A	東麓B	東麓C	東麓D	石川	土師里	大和川	他	石川	他	恩智	東麓C	和泉	和泉
埴輪	円筒	5	4	1	1		3	1		1	1				
	蓋形	3	1	2								1		2	1
	盾形		1				1								
	家形	2	2		1	1	1		2						
	短甲形					2	2						1		
	蓋形	2	1	2											
土師器	高坏	1		1					1						
	甕		1								1				
	壺						2		1						

表1 墓輪・土師器の器種と類型

表 1

表 2 燃油・土師器に含まれる砂礫

試料番号	岩種	花崗岩	閃長岩	淡灰岩	安山岩	砂岩	泥岩	チャート	片岩	火山ガラス	石			鉱物			物質			海綿状		
											塊状	30粒	塊状	30粒	塊状	30粒	長	石英	長	石英	母岩	角閃石
心合寺山 64	円筒形 (底部)	L-端 L-端 角 内							L-端 L-端 内 内							L-中 M-端 E-端	L-中 M-中 E-端	L-中 M-中 E-端	L-中 M-中 E-端	S-端 EF端		I-bd I-bd
心合寺山 67	円筒形 (底部)	L-端 L-端 角 内	M-端 M-端 角 外														L-中 M-端 E-端	L-中 M-中 E-端	S-端 EF端			I-b I-bd
心合寺山 40	円筒形 (底部)	L-端 L-端 角 内									M-端 M-端 内 内					L-中 E-端	L-中 M-端 E-端	L-中 M-中 E-端	S-端		I-bd 大田川	
心合寺山 44	円筒形 (底部)	L-中 L-端 角 外									M-端 M-端 内 内					M-端 M-端 E-端	M-端 M-端 E-端	M-端 M-端 E-端	S-端		I-bg 石川	
心合寺山 66	円筒形 (底部)	L-端 L-端 角 内	L-端 L-端 角 内								L-端 L-端 角 角					M-端 M-端 E-端	M-端 M-端 E-端	M-端 M-端 E-端	S-端 EF中		I-bd 土岐原	
心合寺山 43	円筒形 (底部)	L-端 L-端 角 内														M-端 E-端	L-端 M-端 E-端	L-端 M-端 E-端	S-端		I-bd 東山窓C	
心合寺山 20	円筒形 (底部)	L-端 L-端 角 外	L-端 L-端 角 外							L-端 L-端 角 角					M-端 M-端 E-端	L-端 M-端 E-端	M-端 M-端 E-端	S-端 L-端		I-bg		
心合寺山 23	円筒形 (底部)	L-端 L-端 角 外	L-端 L-端 角 外							L-端 L-端 内 内					M-端 M-端 E-端	M-端 M-端 E-端	M-端 M-端 E-端	L-端 L-端		I-bd 東山窓A		
心合寺山 48	円筒形 (底部)	L-端 L-端 角 内														L-端 E-端	L-端 M-端 E-端	L-端 M-端 E-端	S-端 EF端		I-bd 土岐原	
心合寺山 49	円筒形 (底部)	L-端 L-端 角 外														L-端 E-端	L-端 M-端 E-端	L-端 M-端 E-端	S-端 EF端		I-bd 東山窓D	
心合寺山 50	円筒形 (底部)	L-端 L-端 角 内														L-端 E-端	L-端 M-端 E-端	L-端 M-端 E-端	S-端		I-b 東山窓B	
心合寺山 280	円筒形 (底部)	L-端 L-端 角 内														M-端 E-端	M-端 M-端 E-端	M-端 M-端 E-端	M-端		I-bd 東山窓C	
心合寺山 284	圓形球體	L-端 L-端 角 外														M-端 M-端 E-端	L-端 M-端 E-端	L-端 M-端 E-端	S-端		I-b 東山窓B	
心合寺山 270	圓形球體	L-端 L-端 角 外														L-端 E-端	M-端 M-端 E-端	M-端 M-端 E-端	M-端 EF端		I-bd 東山窓C	

球輪・十脚器に含まれる砂砾

その2

試料番号	出 處	花 崗 岩	閃 長 岩	闪 长 岩	流 纹 岩	流 纹 岩	安 山 岩	安 山 岩	玢 岩	玢 岩	チ ヤ ー ト 片	片 岩	石				物				
													粗 粒	中 粒	細 粒	30倍 鏡觀	30倍 鏡觀	30倍 鏡觀	30倍 鏡觀	種 類 名	所 在 地
心合寺山 114	H.閃長岩 (口輪形A型)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	I-b	東山田													
心合寺山 84	H.閃長岩 (口輪形B型)	M-粗 角	M-粗 角	M-粗 角	M-粗 角	M-粗 M-粗	I-b	東山田													
心合寺山 196	H.閃長岩 (口輪形C型)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	I-b	東山田													
心合寺山 99	H.閃長岩 (口輪形D型)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 L-粗	I-b	東山田													
心合寺山 103	H.閃長岩 (口輪形E型)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	M-粗 M-粗	M-粗 M-粗	M-粗 M-粗	M-粗 M-粗	M-粗 M-粗	S-粗 S-粗	S-粗 S-粗	I-b	東山田						
心合寺山 198	H.閃長岩 (口輪形F型)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	I-b	東山田													
心合寺山 268	H.閃長岩 (口輪形G型)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	I-bd	東山田													
心合寺山 239	H.閃長岩 (口輪形H型)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	I-bd	東山田													
心合寺山 310	H.閃長岩 (口輪形I型)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	I-bd 十面玉 尾管	東山田													
心合寺山 307	黑雲母矽 岩(岩化)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	S-粗 S-粗	IV-aee 尾管	東山田													
心合寺山 228	黑雲母矽 岩(岩化)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	I-b	東山田													
心合寺山 227	黑雲母矽 岩(岩化)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	I-b	東山田													
心合寺山 292	黑雲母矽 岩(岩化)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	IV-aee 尾管	東山田													
心合寺山 293	黑雲母矽 岩(岩化)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	IV-aee 尾管	東山田													
心合寺山 236	黑雲母矽 岩(岩化)	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	L-粗 角	M-粗 M-粗	I-b	東山田													

直輪・土師器に含まれる砂礫

その3

試料番号	岩相	石炭												鉱物		接觸心材	接觸死材
		花崗岩	閃長岩	斑長岩	斑岩	安山岩	粉岩	流紋岩	300#	300#	300#	300#	300#	M-強	M-強		
心合寺山 295	高形斑植 (生結)	L-強 L-弱	L-強 L-弱	M-強 M-弱	L-強 L-弱									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 299	(花崗岩)	角 角	角 角	角 角	角 角									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 304	高形斑植 (生結)	L-強 L-弱	L-強 L-弱	L-強 L-弱	L-強 L-弱									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 309	高形斑植 (花崗岩)	L-強 L-弱	L-強 L-強	L-強 L-強	L-強 L-強	L-強 L-強	M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強							
心合寺山 311	高形斑植 (花崗岩)	角 角	角 角	角 角	角 角									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 319	高形斑植 (花崗岩)	角 角	角 角	角 角	角 角									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 323	高形斑植 (花崗岩)	角 角	角 角	角 角	角 角									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 312	高形斑植 (花崗岩)	角 角	角 角	角 角	角 角									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 324	高形斑植 (花崗岩?)	角 角	角 角	角 角	角 角									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 325	高形斑植 (花崗岩?)	M-強 M-強	L-強 L-強	L-強 L-強	L-強 L-強									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 329	高形斑植 (花崗岩?)	角 角	角 角	角 角	角 角									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 339	高形斑植 (花崗岩?)	角 角	角 角	角 角	角 角									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 337	高形斑植 (花崗岩?)	角 角	角 角	角 角	角 角									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強
心合寺山 339	高形斑植 (花崗岩?)	角 角	角 角	角 角	角 角									M-強 M-強	M-強 M-強	L-強 L-強	M-強 M-強

清陰・十師器に含まれる砂礫

32

根群と根葉葉裏 縦面による解剖：I=根部(m)上 M=根部2cm水槽(m)上 S=根部5cm水槽(m)上 伸長根が多い 中=地中中層 伸長根が短く、葉=葉がごくごく短い
伸長根と根葉葉裏 縦面による解剖：I=根部(m)上 M=根部2cm水槽(m)上 S=根部5cm水槽(m)上 伸長根がある W=白粉病がある E=白粉病がない
EFP=根葉面がある M=根葉面がない W=白粉病が含まれる E=白粉病がない 下の状態がある

葺石の石種について

奥田 尚

八尾市大竹に心合寺山古墳がある。西側括れ部付近から検出された1段目と2段目に葺かれた葺石の一部の石種を観察することができた。礫径は人頭大からみかん箱大で、礫形が亜角～亜円である。表面が風化してザラザラしているものや谷川に転がる礫のように滑らかになっているものがある。石種は主として黒雲母花崗岩で、ごく僅かに斑鷹岩が使用されている。黒雲母花崗岩は鉱物の粒径により黒雲母花崗岩A・B・Cに細区分される。各石種の特徴について述べる。

黒雲母花崗岩A：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1mm～2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1mm～2mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5mm以下、量がごく僅かである。

黒雲母花崗岩B：色は灰色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2mm～3mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2mm～3mm、量が多い。黒雲母は黒色粒状、粒径が2mm～3mm、量が僅かである。

黒雲母花崗岩C：色は灰色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5mm～1mm、量が多い。長石は灰白色、無色透明で、粒径が0.5mm～1mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5mm以下、量がごく僅かである。

斑 鷹 岩：色は暗緑色である。長石・角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2mm～3mm、量が多い。角閃石は暗緑色、粒径が2mm～3mm、量が多い。

心合寺山古墳が築造されている中位段丘はやや粘土質の砂礫層からなり、葺石と同質の礫も若干含まれているが、礫径が小さい。楽音寺の村内には斑鷹岩が分布し、水呑地蔵やおと越へ通じる谷には非常に弱い片麻状を示す黒雲母花崗岩が分布する。水呑地蔵へ通じる谷川には葺石に使用されている黒雲母花崗岩の岩相に酷似し、礫形、礫径もよく似た礫が見られる。心合寺山古墳に使用されている葺石の斑鷹岩、黒雲母花崗岩は水呑地蔵へ通じる谷に転がる礫を採取されたと推定される。

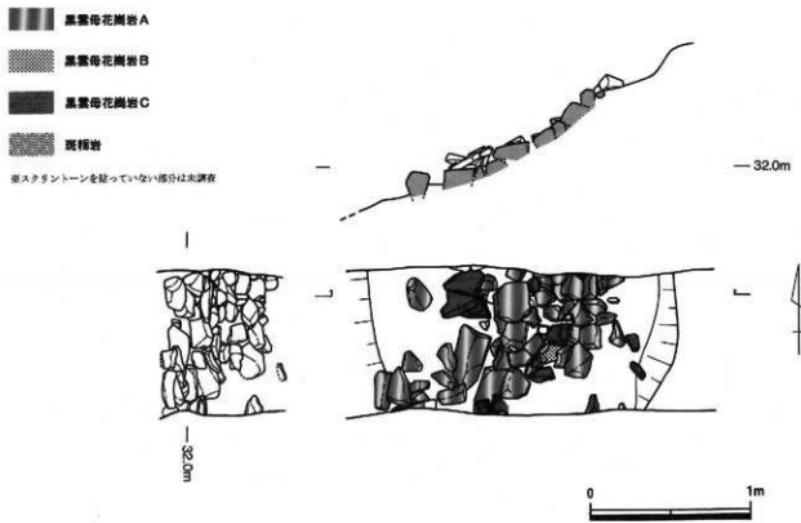


図1 くびれ部西トレンチ段築平坦面付近蓋石の石種 (1/30)

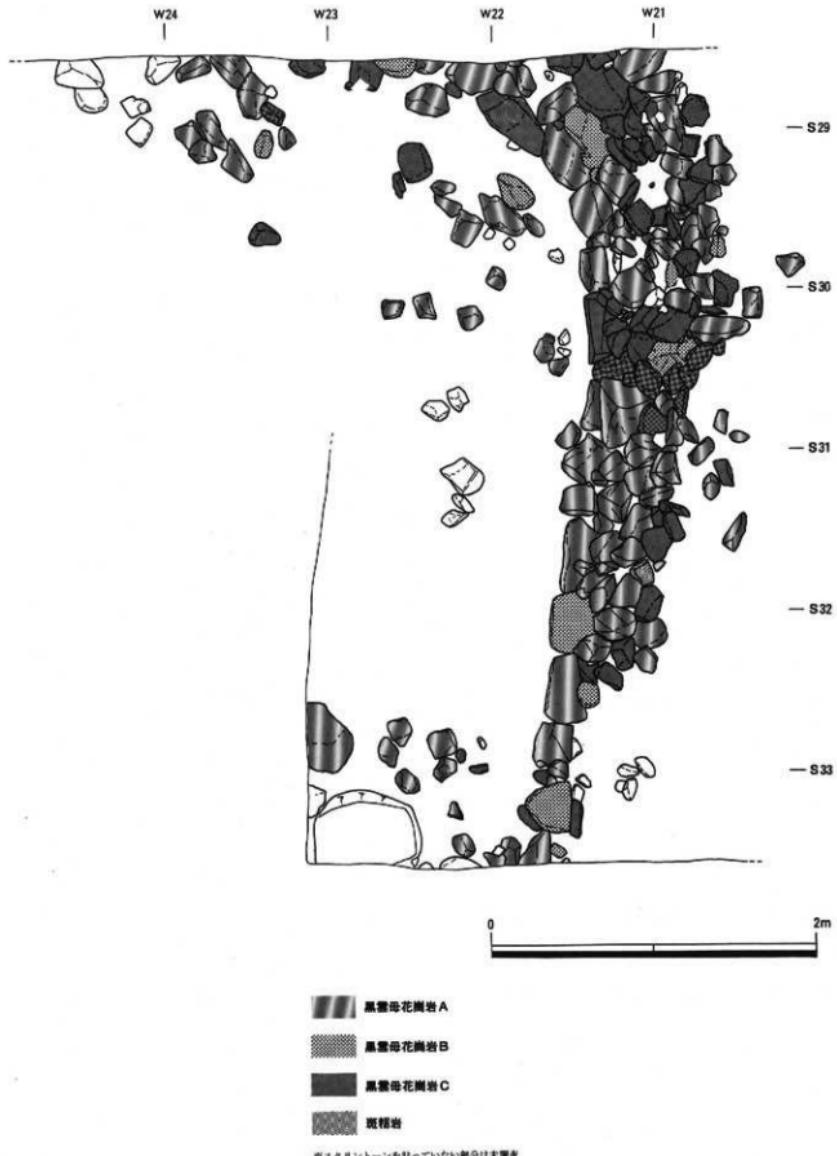


図2 くびれ部西トレンチ墳丘部葺石の石種 (1/30)

心合寺山古墳の造営背景についての一考察

吉田野々

心合寺山古墳の造営背景を考えるにあたっては、旧の大和川である長瀬川・玉串川流域を中心に、北と西は河内湖に、東は生駒山地に、南は羽曳野丘陵に画された地域を対象とした。ここではこの地域の前代からの古墳の編年上のながれと、集落の動向についてみたのち、心合寺山古墳の造営背景について考えてみたい。

1. 対象地域の古墳の編年上のながれ（表1）^(註1)

まず、古墳時代前夜の段階、庄内期においては平野部に周溝墓が顕著にみられる。東郷遺跡、成法寺遺跡、久宝寺遺跡、八尾南遺跡、跡部遺跡、友井東遺跡などである。ほとんどが一辺10~15m前後の方形周溝墓である。また山麓部では、水越遺跡でも庄内期の方形周溝墓、円形周溝墓が確認されている。古墳時代初頭において、対象地域でいち早く古墳が出現するのは、長瀬川左岸地域の久宝寺遺跡周辺である。「久宝寺南その2」の調査の第4号墓がある。割竹形木棺を1基を主体部とし、周溝内より布留式古段階の小型丸底土器等が出土している。また八尾南遺跡では、布留式古段階墳の土師器と川西編年Ⅰ期ないしⅡ期とみられる埴輪を伴う方墳が出土している。^(註2)これらより時期の下るものとして、八尾市北亀井町で出土した久宝寺古墳がある。^(註3)全長30mの前方後方墳で、小型の方墳2基を伴う。墳丘上に樹立された状態の壺形埴輪が出土した。この壺形埴輪は土師器の長頸壺、二重口縁壺が仮器化した形態のもので、美園古墳まで下らない時期のものと考えられる。

一方、山麓部では向山古墳が築かれる。以後、継続して西ノ山古墳、花岡山古墳と、前期の前方後円墳が造られる。向山古墳は全長55mの前方後円墳または円墳とみられ、壺形土器片が採集されている。西ノ山古墳は全長55mの前方後円墳で、石棺あるいは竪穴式石棺とみられる主体部から、銅鏡、銅鏡等が出土している。花岡山古墳は既に消滅したが、全長約73mの前方後円墳であり、川西編年Ⅱ期に位置付けられる円筒埴輪が出土している。これらは心合寺山古墳の北東方の山麓部に一定のまとまりをもつて築造されており（楽音寺・大竹古墳群）、心合寺山古墳の前代の首長墓とみられる。中ノ谷山古墳は、主体部とその副葬品の内容からみて、前期古墳に限定して捉える要素は少なく、中期に降る可能性もあるのではないかと考える。山麓部では、楽音寺・大竹古墳群の北方、扇状地に川西編年Ⅱ期に位置付けられる埴付円筒埴輪を伴う円墳の猪ノ木古墳が築造される。^(註4)また、猪ノ木古墳に近接する段上遺跡においても、近年これと同時期の埴輪片が出土しており、同期の古墳の存在が推測されている。^(註5)

前期末には、平野部の長瀬川右岸域から山麓部にかけて小古墳が相次いで出現する。美園古墳、萱振1号墳は小古墳でありながら、精巧な形象埴輪をもつ。また中田遺跡、東郷遺跡、小阪合遺跡、成法寺遺跡は、玉串川と長瀬川にはさまれた微高地状の地形に立地し、巨視的には同一の遺跡と見做し得るが、ここでは川西編年Ⅱ期からⅢ期に位置付け得る埴輪を伴う古墳が多く存在していたようである。東郷遺跡では川西編年Ⅱ期に位置付けられる円筒埴輪を樹立していたとみられる方墳が出土している。^(註6)また中田遺跡では、家形埴輪と小型の船形埴輪を有する円墳もしくは前方後円墳とみられる古墳が確認されている。この他に包含層内等で埴輪片を確認している箇所、埴輪棺の出土をみた箇所などを併せ、14箇所を確認している。また萱振遺跡、田井中遺跡では、埴輪は伴わないが、布留式新段階の土師器を伴う方墳が確認されている。

またこれとはほぼ同時期に長原古墳群においても造墓が開始する。径約50mの円墳である塚の本古墳を

	八尾市域			人丸市	東大阪市域	大東市域
	山麓部	長瀬川右岸	長瀬川左岸	長原地域	八尾南地域	八尾北地域
庄内期 阿波高台 被出した 遺跡	水越遺跡	[木井遺跡 成仏寺遺跡 中北遺跡 友方東遺跡	[龜井遺跡 久宝寺遺跡 藤原遺跡			
			久宝寺南第4号墓			
	向山古墳					
前 帯	西ノ山古墳		(八尾南SX1) 久宝寺古墳			
	花開山古墳	美濃古墳 萱原古墳 東郷遺跡出土方墳	東郷、中田遺跡 想定古墳群 中田古墳	長原古墳群墓地 塚の本古墳 高麗り2号墳 長原40号墳 一ヶ原古墳	猪ノ木塚 古墳	
				高麗り1号墳		
中 帯	(中ノ谷山古墳)				(保山古墳)	
	心合寺山古墳			長原古墳群墓地進行	堂山1号墳 (保山古墳?)	
					基の堂古墳	

表1 対象地域の古墳の変遷

古墳名	位置	形狀	規模	土体部	副葬品	出土埋蔵		円筒埴輪標示		備考	
						種類	状況	実数	測量		
山里陪	八尾市大村6丁目	前方後円墳主たて川横	全長55m	不明	不明	直筒土器片断集(鉢形不規)	—	—	—	墓上により試掘不明	
	西ノ山古墳	八尾市南音寺7丁目	前方後円墳	全長55m	石棺あらわし	銅鏡、鏡形、鐵劍、鐵刀、玉、出土	—	—	—		
	若聞山古墳	八尾市南音寺6丁目	前方後円墳	全長約73m	不明	不明	円筒埴輪片断集(口沿)	不明	不明	柱土により今感	
	中ノ谷古墳	八尾市東音寺	前方後円墳もしくは円墳	全長約50m	無地石棺(二字碑複)	香呑勾当、猿止小菅三、猿止勾玉、摩利音工、同白石、笠形、土製模造品、鐵刀、刀子	不明	—	—	1933年調査時発見	
半野原 長瀬川右岸	美國吉原	八尾市東音寺4丁目	方墳	辺約7.2m	削平	—	直筒、家形	周囲内(盗掘は後藤氏の跡立と軒路)	—	—	
	要塚1号墳	八尾市東音寺7丁目	方墳(二段築成)	辺27m	削平	—	横竹押出(直筒)、家形、鏡形、鐵刀、馬頭形	横筒半切面に内凹部を複数立、馬頭兩頭内	6条 5条	・タテハケ ・タテハケ ・ココハケ ・タテハケ ・ナヂ	
	中野遺跡櫛ヶ谷3丁目出土古墳	八尾市櫛ヶ谷3丁目124	方墳?	辺7m以上	削平	—	円筒埴輪(直筒)、土器器	周囲内(直筒) 馬頭形	3条	・タテハケ ・人面ヨコハケ	
中田吉原	八尾市八尾北6丁目	円墳(前方後円墳の可能性ある)	径32.5m	削平	—	普通円筒(直筒)、周囲内 鏡形、家形、船形	—	3条	・タテハケ ・ストロークの長い八 種・ココハケ ・タテハケ ・ナヂ	小型の船形埴輪	
半野原 長瀬川左岸	久宝寺古墳	八尾市北堀町3丁目1番72	前方後方墳	全長35m前後	削平	—	直筒埴輪(二重 口縁、直筒)	横筒半切面立 口縁、直筒)	—	—	
	久宝寺古墳の2第4号墓	八尾市西久宝寺	方墳	9.0m×7.0m	削平木棺?	なし	なし	—	—	周囲内より本留式古 鏡形の小型丸底土器等出土	
八尾南	八尾南S1	八尾市若林町	方墳	辺11.5m	削平	—	普通円筒(1~ 2期)	周囲内	不明	不明	周囲内に布留式古 鏡形等出土
長坂古墳群 城の本古墳	大阪市平野区長坂古原原3丁目	円墳	直径50m	不明	—	普通円筒(1期)、周囲内 鏡形、家形、船形等?	周囲内	3条少	・タテハケ ・ナヂ ・タテハケ		
	一ヶ谷古墳	大阪市平野区長坂古原原3丁目	通り出し式円墳	全長53m	削平	—	普通円筒(1期)、周囲内 鏡形、家形、船形等?	周囲内横丘周 邊	3条? 4条	・タテハケ ・ストロー クの長い八 種・ココハケ ・タテハケ ・ナヂ	土師器片出土
高麗り2号墳	大阪市平野区長坂長原2丁目	円墳	東西19.6m 南北15.7m	削平	—	普通円筒(1期)、周囲内 鏡形、家形、船形等? 鐵劍、鐵刀、玉、 鏡形、船形、船形、 さしづ灰形	普通円筒、鏡 形、鐵劍立状 態、鐵刀立曲内 部、玉立曲内 部、鏡形、船形	3条? 4条	・タテハケ ・ストロー クの長い八 種・ココハケ ・タテハケ ・ナヂ		
	高麗り1号墳	大阪市平野区長坂長原2丁目	方墳	東西15.1m 南北15m	削平	—	普通円筒(1期)、周囲内及 び鏡形内舟形、家 形、星形、帆形、 圓形、船形、船形、 さしづ灰形	周囲内及び 鏡形内舟形 立状態、鐵劍立 曲態、鐵刀立曲 態、玉立曲態、 鏡形、船形	人型品 4条以 上?	・タテハケ ・ストロー クの長い八 種・ココハケ ・タテハケ ・人面ヨコ ハケ	土師器片出土 小型品、中型品、大 型品あり
	猪ノ木古墳	大阪市平野区長坂長原2丁目	円墳	径30m	不明	不明	鏡付円筒(1期)	横生壁上位	4条	・タテハ ケ ・タテハ ケ ・人面ヨコ ハケ	墓石あり、子持らむ 玉出土

表2 対象古墳一覧

遺跡名	NO	調査地	出土位置	埴輪の種類	円筒埴輪の実測寸法	埴輪の時期	文献
八尾市							
宝誠1号墳	1	宝誠町7丁目地内	テラス部分樹立状態 周囲内郭跡	縁付円筒	タテハケーナダ、タテハケー A種ヨコハケ。	Ⅱ期	(1)
				家、井、墓標、軒			
北坂	2	緑ヶ丘1丁目17-8	包含層内鉢入	家		Ⅱ～Ⅲ期?	(2)
		緑ヶ丘5丁目65-2他	方墳2。埴輪の山上なし。衣 冠式新棺の土器出土。				(3)
美濃名塙	4	美濃町4丁目地内	方墳周溝内軒舟	家、盆			(4)
東坂	5	緑ヶ丘3丁目24-1	方墳周溝内軒舟状態	円筒	タテハケーハ種ヨコハケ	Ⅱ期	(5)
		光町1丁目43、44	包含層	云支	タテハケ	Ⅱ期	(6)
成法寺	7	湊木町2丁目2-5	包含層内	円筒	タテハケーハ種ヨコハケ	Ⅱ期	(7)
		光南町1丁目46・47-1	内築棺	円筒	タテハケ	Ⅱ期	(8)
			壇内遺土流入?	家形?		不明	(9)
小坂合	9	青山町4丁目地内	自然河川内	円筒	一B種ヨコハケ、	Ⅱ期他	(10)
				家、盆、			(11)
	10	南小坂合1丁目地内	円筒棺	円筒、埴輪	一タテハケ	Ⅱ期	(12)
	11	南小坂合1丁目地内	周溝内鉢入	円筒	一ヨコハケ?	近期?	(13)
			周溝内鉢入	円筒、壇、軒?	一ヨコハケ?	近期?	(14)
中田	12	南小坂合1丁目地内	壇内	円筒		Ⅱ～Ⅲ期	(15)
	13	八尾木末6丁目地内	円筒棺	円筒、御瓢		Ⅱ期	(16)
	14	中田3丁目地内	不明	円筒	タテハケーハ種ヨコハケ	Ⅱ期	(17)
15	八尾木末6丁目地内	周溝内鉢入	云支、楕圓、家、軒	タテハケーナダ、タテハケー A種ヨコハケ			(18)
	16	中田1丁目20他	包含層内鉢入	円筒	タテハケ	Ⅱ期	(19)
				家、不明形象埴輪			
矢作	17	高美町3丁目45-1	包含層内	円筒	一ヨコハケ	近期	(20)
東弓削	18	八尾木末1丁目地内	包含層内	円筒	タテハケーハ種ヨコハケ	Ⅱ期	(21)
田井中	19	空港1丁目81	円筒? 1. 方墳? 1. 墓跡の 山上なし。衣冠式新棺の土器 出土				(22)
八尾市	20	若林町1丁目地内	方墳周溝内壇土	円筒	タテハケ	Ⅰ～Ⅱ期	(23)
忍智	21	喜智牛町4丁目55他	包含層内	円筒	一ヨコハケ	近期	(24)
東大阪市							
猪ノ木坂古 墳	22	東大阪市南坂町	須佐上軒落	縁付円筒	一タテハケ。タテハケー A種ヨコハケ	Ⅱ期	(25)
淀の上遺跡	23	東大阪市下六方3丁目地内	台笠層内	縁付円筒	一タテハケ、タテハケー A種ヨコハケ	Ⅱ期	(26)

表3 川西編年Ⅱ～Ⅲ期埴輪出土古墳等一覧

表中文獻

- (1) 本文註10 (2) 西村公助「宝誠遺跡第4次調査(K.F.86-1)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(8)八尾市文化財調査研究会1993年 (3) 本文註13 (4) 本文註10 (5) 本文註11 (6) 佐川敏伸『東城道沿第21次埋蔵文化財発掘調査報告』1985年 (7) 斎藤千秋『第3次調査(S.H.-3)』『結果報告書』『成田山遺跡』1991年 (8) 坪田真一・成法寺遺跡(S.H.89-5)『平成4年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(9) 1992年 (9) 高畠千秋『小坂合遺跡』(昭和57年度 第1次調査報告書)・『八尾市埋蔵文化財調査研究会1987年』(10) 高萩千秋『小坂合遺跡』(昭和59年度 第4次調査報告書)・『八尾市埋蔵文化財調査研究会1988年』(11) 西村公助『小坂合遺跡発掘調査概要』(12) 山上弘『小坂合遺跡研究報告書概要』(13) 大阪府教育委員会1969年 (14) 柏木正尚「西ノ木造史」1982年 (15) 吉川野々「中田遺跡(91-230)」調査報告書『八尾市内遺跡平成4年度実地調査報告書』(16) 八尾市教育委員会1995年 (15) 本文註12 (16) 関田清一『平成6年度八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告書』1995年 (17) 原田昌嗣「矢作(1号調査)」『結果報告書』(18) 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 平成元年度』(19) 本文註13文献 (20) 本文註4文献 (21) 原田昌嗣「忍智遺跡(O.H.89-4)」『八尾市埋蔵文化財調査研究会年報 平成元年度』(22) 本文註7 (23) 本文註8

*埴輪の時期は、川西昭幸氏の編年に従る。

はじめとし、一ヶ塚、高廻り1号墳・同2号墳、長原40号墳等がある。これらはすべて川西編年のⅡ期の円筒埴輪を伴う。⁽³¹⁴⁾

中期にはいると平野部では、東郷遺跡・中田遺跡とその周辺で、包含層等から川西編年Ⅲ期の円筒埴輪片が若干出土しているものの、総体としては小古墳の造営が目立たなくなる。山麓では、中ノ谷古墳が中期初頭に位置付けられる可能性がある他、東大阪市の塚山古墳においても川西編年Ⅲ期に位置付けられる圓筒埴輪や形象埴輪が採集されている。この古墳は発掘調査がなされていないが、扇状地末端部に立地し、直径25mの二段築成の円墳の可能性が考えられている。そして中期前半末には、全長140mの前方後円墳である心合寺山古墳が八尾市の東部山麓の扇状地上に築造される。心合寺山古墳とほぼ同時期もしくは若干時期の下るものとして、大東市堂山1号墳がある。これは山麓の尾根先端部に築かれた径25mの円墳で、箱式木棺を主体部とし、武具・武器類等が出土した。円筒埴輪は心合寺山古墳のそれと形態、技法などに類似するものが認められ、ほぼ同時期の様相をもつものであることが指摘されている。⁽³¹⁵⁾

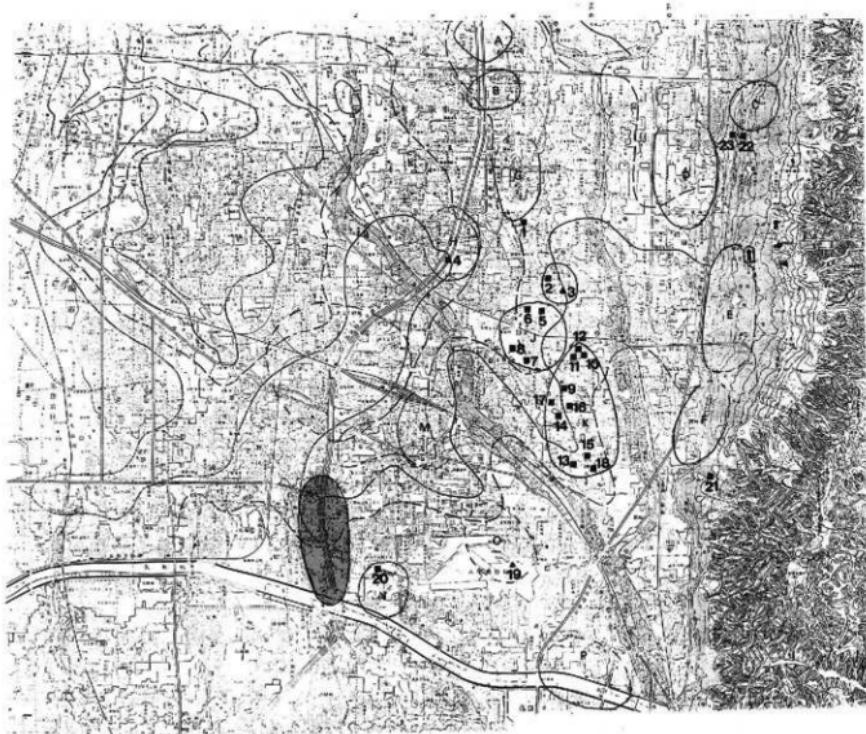
以上の対象地域の編年上の流れのなかで、前期末に小古墳が相次いで出現する事、中期前半末に中河内最大の前方後円墳である心合寺山古墳が築造されることが、大きな画期として捉えられる。

2. 古墳と集落のあり方（図1）

古墳と同期の集落遺跡のあり方を、分布図を作成して検討してみた。まず平野部からみてみたい。東郷遺跡・中田遺跡とその周辺では、集落遺構は庄内期から布留式の古段階に最も顕著に確認されているが、この後も引き続き集落の遺構が認められる。また美園古墳の立地する美園遺跡、萱振1号墳の立地する萱振遺跡も、庄内期から引き続き布留式新段階にも集落の痕跡が認められる。さらに田井中遺跡でも布留式中新段階の土師器片が出土している。⁽³¹⁶⁾ 次に山麓部では猪ノ木古墳等の立地する繩手遺跡でも布留式中新段階の土師器片が出土している。⁽³¹⁷⁾ さら山麓部では 池島・福万寺遺跡、大竹西遺跡のあり方が注意される。これらの遺跡は近接しており、遺跡の内容からも同一の遺跡とみなしてよいものと思われる。池島・福万寺遺跡では、古墳時代前期には遺跡の東方で、平行する大溝、土壙等が検出されている。ここでは人為的に埋められたとみられる土器の他に、神獣鏡、方格四乳鏡の破片や、水鳥形土製品の部分破片、堅櫛等が出土している。また、大竹西遺跡においても、古墳時代前期の掘立柱建物、井戸、溝、土壙が検出されており、土壙内から瑪瑙製鏡形石製品が出土している。⁽³¹⁸⁾ 当遺跡の北東山麓には向山古墳、西ノ山古墳、花岡山古墳といった前期の首長墓があり、これらの首長墓を輩出した拠点的な集落と考えられている。⁽³¹⁹⁾ 中期の心合寺山古墳築造段階の当遺跡の様相は今一つ明らかではないが、恐らくは当遺跡を含めた山麓の集落群が、心合寺山古墳の造墓主体の拠点であったものと思われる。

3. 時期別の古墳の動向

対象地域の古墳の動向を前期後半までの段階と、中期前半の段階とに分けてみていくたい。まず前期後半には、山麓部では相次いで前方後円墳が築造される。これらは向山古墳を始めとする首長系譜を辿ることができ、池島・福万寺遺跡一帯の集落を拠点とした在地的な集団の首長墓とみられる。一方平野部では、長瀬川と玉串川に挟まれた地域に小古墳が相次いで造られる。これらは長原古墳群の造墓開始期とほぼ同時期とみられる。これについては既に先学により評価がなされており、長原古墳群・美園古墳、萱振1号墳などの中小古墳が、大王権力により掌握された在地的な集団の墓である可能性が指摘されている。⁽³²⁰⁾ 今回検討を行うなかで、美園古墳、萱振1号墳の他に、中田遺跡・東郷遺跡とその周辺一帯にも、川西編年Ⅱ期に位置付けられる円筒埴輪をもつ小古墳が分布することが明らかになった。この中で埴輪を伴う古墳として明らかなものは、中田古墳や東郷遺跡内方墳がある。一部Ⅲ期に下る可能性もあるが、包含層内等で形象埴輪片の出土しているところは6ヶ所ある。さらに注意されるのは、これらに混在するかのようにして、埴輪棺がみられることである。成法寺遺跡、小阪合遺跡、中田遺跡でそれ



- A. 西岩田遺跡
 B. 瓜生堂遺跡
 C. 繩手遺跡
 D. 池島・福万寺（大竹西）遺跡
 E. 水越（大竹、太田川）遺跡
 F. 忠智遺跡
 G. 萱振A遺跡
 H. 美園（友井東、佐室）遺跡
 I. 萱振B遺跡
 J. 東郷（成法寺、小阪合）遺跡
 K. 中田（東弓削）遺跡
 L. 久宝寺（龜井、加美）遺跡
 M. 駿都（太子堂）遺跡
 N. 八尾南遺跡
 O. 田井中（志紀）遺跡
 P. 木郷、船橋遺跡
■ 長原遺跡、長原古墳群

圖中の数字は表3の番号に対応
 地図 土地条件図（大阪東南部）をもとに作成

図1 古墳と集落の分布

ぞれ確認されている。また萱振1号墳の存在する萱振遺跡では、埴輪は伴わないが布留式新段階の土師器を伴う方墳2基が確認されている。これらは恐らく埴輪を持ち得なかった、あるいは墳丘を築き得なかつた在地の階層の墓と思われる。埴輪を伴う古墳については、このような埴輪を伴わない古墳や埴輪棺と混在するかのようにして存在すること、先にみたように同期の集落と近接して分布することから、在地の有力層の墓とみられる。これらが長原古墳群、美園古墳、萱振1号墳のように大王権により直接掌握された層とみることができるのか、未だ判然としない点が多い。が、長原古墳群、美園古墳、萱振1号墳と同時にこの地域に相次いで小古墳の築造されることは、在地の有力層が大王権となんらかのかたちで関わることで、埴輪を樹立する古墳を築き得たとみてよいのではないかと考える。ただ長原古墳群については、羽曳野丘陵先端部の限定された墓域を有することから、美園古墳、萱振1号墳、中田遺跡・東郷遺跡とその周辺の小古墳といった長瀬川右岸域に分布する小古墳とは、性格を異にする古墳群であると思われる。

中期前半の段階には平野部での小古墳の造営は急速に後退する。一方山麓部では中河内最大の規模をもつ心合寺山古墳が築造される。これは前期に山麓に首長墓を営んだ在地の集団の首長系譜をひくものとみてまちがいないであろう。心合寺山古墳の北方に位置する塚山古墳、大東市堂山1号墳との関係が注意される。ここでは発掘調査により様相の判明している堂山1号墳と心合寺山古墳の比較を行ってみた(図3)。

4. 心合寺山古墳と堂山1号墳

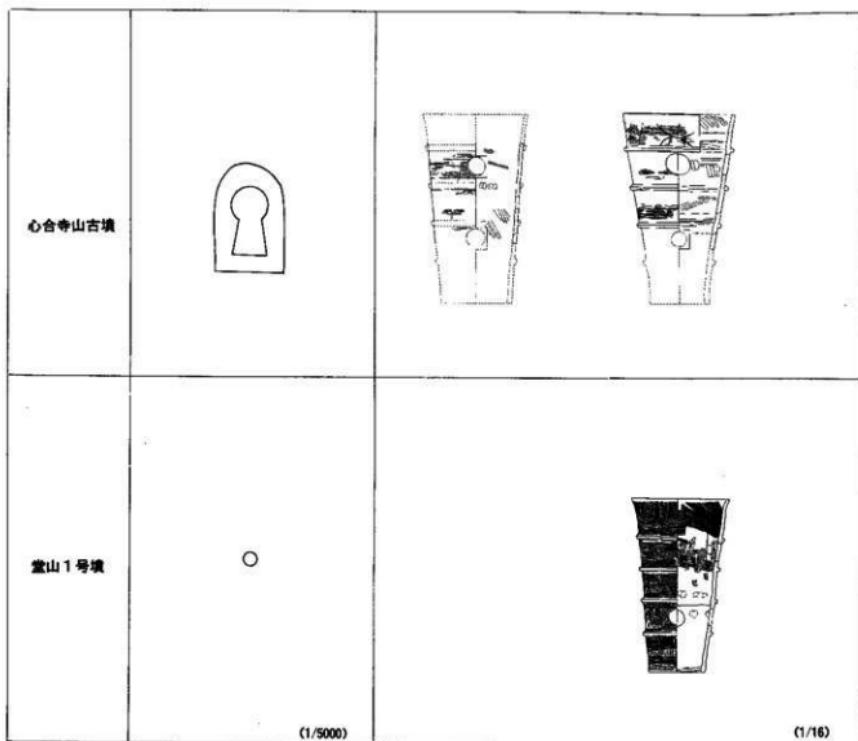
心合寺山古墳と堂山1号墳では、墳丘の形態や規模、埴輪の器種などの格差は大きい。しかし円筒埴輪の小型品は同じ4条突帯、5段構成である。両者の円筒埴輪は形態、技法などに共通点があり、さらに古市古墳群の円筒埴輪にはみられない独自性をもつことから、地域の工人集団による製作が想定される。しかし同一の規格でありながら、堂山1号墳の円筒埴輪は心合寺山古墳のそれより一回り小さい。このことは心合寺山古墳の造墓主体から堂山1号墳の造墓主体に対する、円筒埴輪の法量の格差づけという規制が働いていたことを示すものではないだろうか。のことからこの段階においては心合寺山古墳の造墓主体を頂点とする地域の範囲が現在の大東市付近まで及んでいた可能性がある。

5. 心合寺山古墳の造営背景

これまでみてきたように、心合寺山古墳は山麓部を中心とした在地の集団を母体とし、古墳時代中期前半には、現在の大東市付近の範囲までその権力を及ぼした首長の墓とみられる。この範囲を政治的、社会的なまとまりをもつた一地域と想定するならば、このような地域を治めた地域首長として心合寺山古墳の被葬者を考えることができよう。地域首長墓としての心合寺山古墳の造営の背景には、この地域の自立的な発展があることは言うまでもない。ただ古墳時代前期の段階で既に平野部では、大王権の関与を受けた小古墳が成立していること、心合寺山古墳が前代の首長墳とは隔絶した規模・内容を有していることから、心合寺山古墳の造営の背景には大王権の関与があったものと考えられる。すなわち、誉田御廟山古墳は心合寺山古墳とそれほど時を隔てずに築造されたとみられるが、その規模は墳長425m、周濠・外堤を含めた全長は700mを測る前方後円墳である。さらに円筒埴輪は、外堤で出土しているものでは7条突帯で器高が90cm前後になるものである。^(註3)心合寺山古墳は大型品の円筒埴輪、豊富な形象埴輪を有しながらも、埴輪列の主たる構成要素である円筒埴輪の小型品は、器高60cm前後で4条突帯のものである。墳丘長140m前後の前方後円墳の心合寺山古墳が、径約25mの円墳である堂山1号墳と円筒埴輪において同規格であることは、既に指摘されているような円筒埴輪の規格性にみられるような規制を、^(註4)大王権がら受けていることを示すものと考えられる。



図2 対象地域の時期別の古墳の動向



円筒埴輪の種類		形象埴輪の器種						
大 型 品	小 型 品							
心合寺山古墳 (墳丘長約140m)	底径33~44cm	全高 約60cm 底径 17~22cm (平均)	家形	蓋形 (大型、小型)	甲冑形	盾形	輪形	蓋形 (大型、小型)
大東市堂山1号墳 (墳丘径約25m)	—	全高 56cm 底径 17~19cm (平均)	家形	蓋形	甲冑形	?	輪形	—

(堂山1号墳の円筒埴輪は注16文献より転載)

図3 心合寺山古墳と大東市堂山1号墳

5. おわりに

心合寺山古墳の築造された古墳時代の中期前半頃までは、対象地域の少なくとも山麓部一帯は、一つの地域として、比較的独立性を保っていたのではないかと考えている。このことは、心合寺山古墳の埴輪の地域性としても表象されている。しかしこの地域性には、埴輪の製作技法などにみられるような先進的な要素も伺える。また円筒埴輪や形象埴輪の一部が、他地域から持ち運ばれている可能性のある事も注意される。さらに心合寺山古墳の埴丘プランは、現在わかっている範囲でも、精密な築造企画、高度な築造技術の存在を予想させるものである。このことは大王権と密接な関係を有しながらも、集団内の労働力を結集して地域首長墓を造営した当地域の多様性、先進性を示しているかのように思われる。その具体的な様相については、未だ不明な点が多い。今後の調査・研究の課題としていきたい。

末筆となりましたが、小稿を草するにあたっては、(財)大阪府文化財調査研究センターの秋山浩三氏に多大なお世話を受け、多くのご教示をいただきました。また、大阪府教育委員会の小林義孝氏、亀島重則氏、同じ職場の米田敏幸氏からは有益なご教示をいただきました。そして対象地域の集落や古墳の動向の問題を考えるにあたっては、(財)八尾市文化財調査研究会の岡田清一氏、同じ職場の菅原氏との勉強会での議論から、多くのご教示を得ました。記して謝意を表します。

本文註

- (註1) 対象地域の古墳の編年上のつながれを考るにあたっては、主に下記の文献を参考にした。
八尾市史編集委員会 増補版『八尾市史(前近代)』本文篇 1988年
秋山浩三「第6章 河内 第1節 北・中河内」、『前後円筒埴輪成・近畿編』1992年
- (註2) 一ノ郷和夫『久宝寺古墳(その2)』大阪府教育委員会 (財) 大阪文化財センター 1987年
- (註3) 川西宏幸『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2・3号 1978年
以下、各々に注文付していないが、円筒埴輪の解説は本文獻に載った。
- (註4) 米田敏幸『八尾市遺跡の調査概要』八尾市遺跡調査会 1981年
- (註5) 成海信子『久宝寺遺跡の調査概要』『大阪府立埋蔵文化財調査研究会』第25回(資料) 1992. 1. 19
成海信子『久宝寺遺跡第9号調査(TH19-1)』平成2年年度(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告書 1992年
- (註6) (財) 八尾市文化財調査研究会の高橋秀子氏へ実見の便箋を計っていただいた。さらに有益なご教示をいただいた。
- (註7) 吉岡也『八尾市南山古墳・中ノ谷古墳の出土埴輪について』『古代学研究』83号 1977年
- (註8) (財) 大阪市文化財協会の坂井義高氏へ実見の便箋を計っていただいた。さらに有益なご教示をいただいた。
- (註9) 渡辺忠宏『美濃』大阪府教育委員会 (財) 大阪文化財センター 1985年
- (註10) 広瀬哲雄『青龍座調査速報』『八尾市文化財研究』第41巻第2号(通巻162号) 1994年
- (註11) 高井千洋『東城山遺跡第一22号・第24号発掘調査報告』(財) 八尾市文化財調査研究会 1991年
- (註12) 坪田真一『中田遺跡第19次調査見地会見資料』1993年11月27日(財) 八尾市文化財調査研究会
坪田真一『中田遺跡第19次調査(TH19-1)』平成5年(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告書 1994年
坪田真一『第28回郷土文化講座第7回』『八尾を覗く』資料 1994年2月14日
- (註13) (財) 八尾市文化財調査研究会の坂井義高氏へ実見の便箋を計っていただいた。さらに有益なご教示をいただいた。
- (註14) (財) 八尾市文化財調査研究会『八尾市遺跡第12次発掘(TH12-1)』平成4年(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告書 1993年
坪田真一・西村公忠『田中遺跡第11号調査(TH9-3-1)』平成4年年度(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告書 1994年
(財) 八尾市文化財調査研究会の原田昌徳氏、西村公忠氏より有益なご教示をいただいた。
- (註15) 大阪府遺跡調査会(財) 大阪市文化財協会(改修版)『大阪府立近畿遺跡調査報告書』1978年 1982年改訂
横山伸一『一ヶ岳古墳(通巻5号)』『岸佐古墳(通巻5号)』1990年
田中勝美『京橋古墳』横井久之『高橋勝美』岡村勝行他『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』1991年
- (註16) 中西克弘『塙山古墳調査の報告』『田原市人材大大阪市文化財協会ニュース』VOL. 1, 2 1985年
- (註17) 大阪府教育委員会『塙山古墳群』1994年
- (註18) 小浜氏『塙山1号墳出土円筒埴輪の検討』大阪府教育委員会 1994年
- (註19) 舟子千鶴『塙山古墳調査の報告』1971年
- (註20) (財) 八尾市文化財調査研究会『竹竹寺遺跡現地説明会資料』1995年
(財) 八尾市文化財調査研究会『竹竹寺遺跡現地説明会資料!』1990年10月10日
- (註21) (財) 大阪市文化財センター『第7割池島・攝刀寺遺跡現地説明会資料!』1990年3月11日
秋山浩三「中・北河内の中河内と奈良県境の『研究会資料II』大阪古中近研会1996年刊行予定
- (註22) 横井久之『埴輪・中小規模古墳・長岡山古墳群の形態論』『季刊 考古学』第20号 1987年
- (註23) 一ノ郷和夫、伊藤裡文『応神天皇古墳外壇埴輪成・近畿編』大阪府教育委員会 1981年
また埴輪研究会の折りに大阪府教育委員会へ一ノ郷和夫氏より實物を実見させていただいた。
- (註24) 円筒埴輪の規格等については、主に下記の文献を参考とした。
坂井・吉田良己『古市古墳群の埴輪の規格性』『古代文化』44 1992年
笠井敏光・吉田良己『古市古墳群の埴輪』『古代文化』44 1992年

報告書抄録

ふりがな	しせき しんごうじやまこふん きそはくつちようさほうこくしょ
書名	史跡 心合寺山古墳基礎発掘調査報告書
調査名	史跡整備事業調査報告1
巻次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	35
編集者名	吉田野乃
編集機関	八尾市教育委員会
所在地	〒581 大阪府八尾市本町1丁目1番1号
発行年月日	西暦 1996年 3月 31日

より多い 所収遺跡名	より多い 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
心合寺山古墳	大竹	27212		34° 38' 10"	135° 38' 40"	19930215 ~19930331 19930720 ~19930917 19940822 ~19940908	215 55 186	史跡整備（基本構想策定のための基礎発掘調査）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
心合寺山古墳	古墳	古墳時代	前方頭埴輪列 西側くびれ部裾 西側くびれ部段築平坦面 後円部裾北側平坦面とこれに樹立された埴輪列 後円部北側周縁状底跡 後円部北側裾と周縁部、くびれ部裾と周縁部との間の基壇状平坦面	埴輪 土師器 青瓦土器	・從来考えられていたより一回り大きい全長140mを測る前方後円墳であることが判明。 ・埴丘は基壇状施設をもつ2段築成の前方後円墳である可能性があり、主軸をぴったりと南北に揃える。 ・埴輪列を2ヶ所で確認し、埴輪配列ありかたが、ある程度判明。 ・青瓦を2ヶ所で確認し、青瓦施工の作業工程がある程度判明。
		白鳳～奈良時代	西側くびれ部裾流水土等	軒丸瓦、平瓦、丸瓦、土師器	・埴丘裾付近に堆積した流水土中から大量の瓦片が出土。心合寺塔との関係が注意される。
		平安時代後期 から鎌倉時代	後円部裾北側平坦面の土坑状遺構。 後円部北側の周縁状底跡 内堆積土層。	瓦器、黒色土器、土師器 疊敷陶器、瓦	・後円部裾北側の平坦面及び周縁部では平安時代以降完全に埴輪列が破壊され、生活面として利用されていたことが判明

図 版



心合寺山古墳航空写真（南上空より）



心合寺山古墳航空写真（西上空より）



心合寺山古墳現況（新池西より）



調査状況（前方頂より）



前方部西トレーニチ（西より）



くびれ部西トレーニチ 段築平坦面付近葺石（西下方より）



くびれ部西トレンチ（西より）



くびれ部西側墳丘据（南より）



前方部頂埴輪列（北上方より）



前方部頂埴輪列（南上方より）



前方部頂埴輪列より後円部を望む。



前方部頂埴輪列（東より）



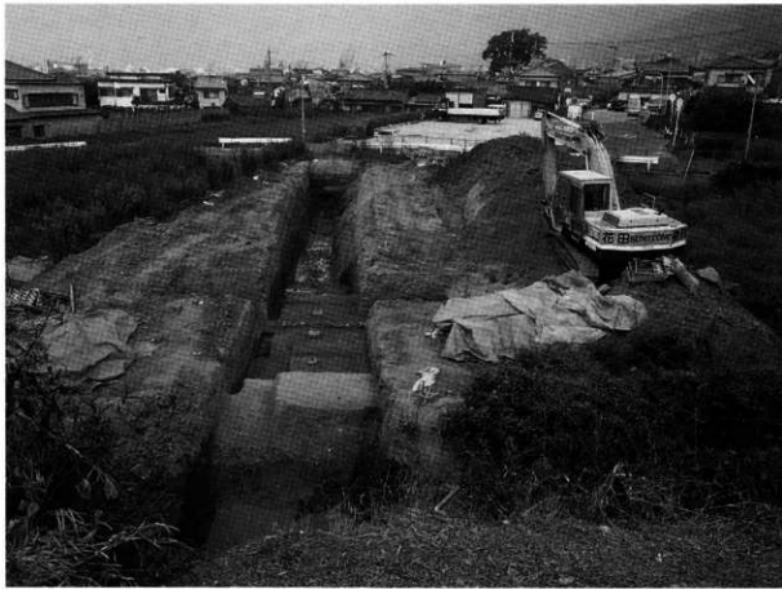
前方部頂埴輪列 壺形埴輪（東より）



前方部頂埴輪列（P-1, P-2 付近）



後円部北据及び周濠状痕跡（北より）



後円部北据及び周濠状痕跡（南より）



後円部据北側平坦面上埴輪列（南上方より）



後円部北据平坦面（北より）



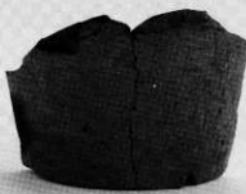
40



67



43



48



44

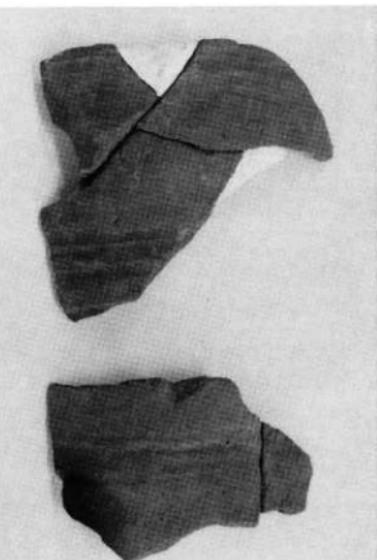


50

円筒埴輪底部

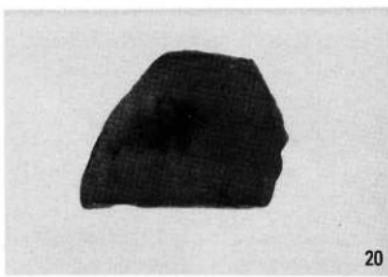


64

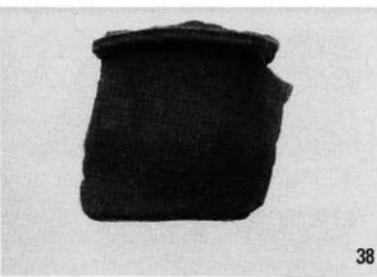


65

円筒埴輪



20



38

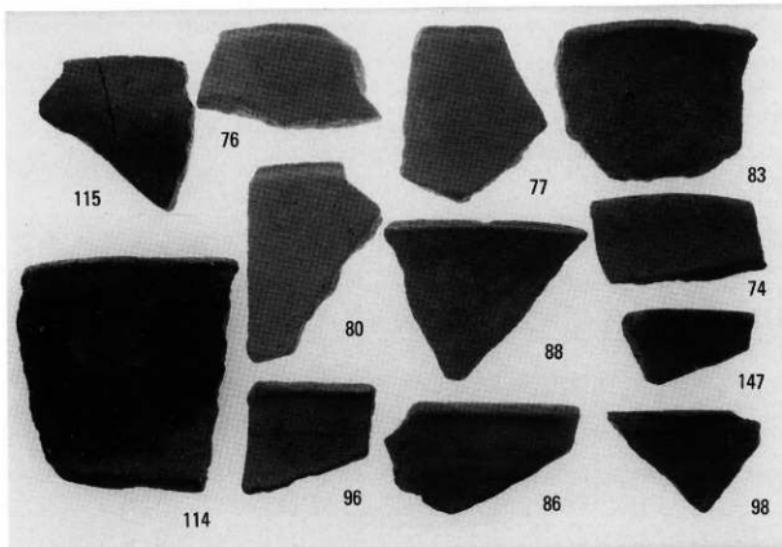


45

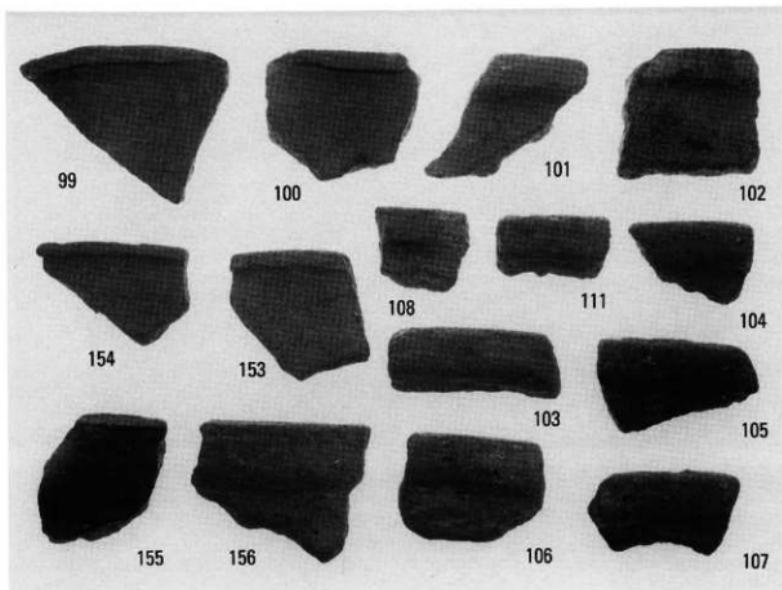


49

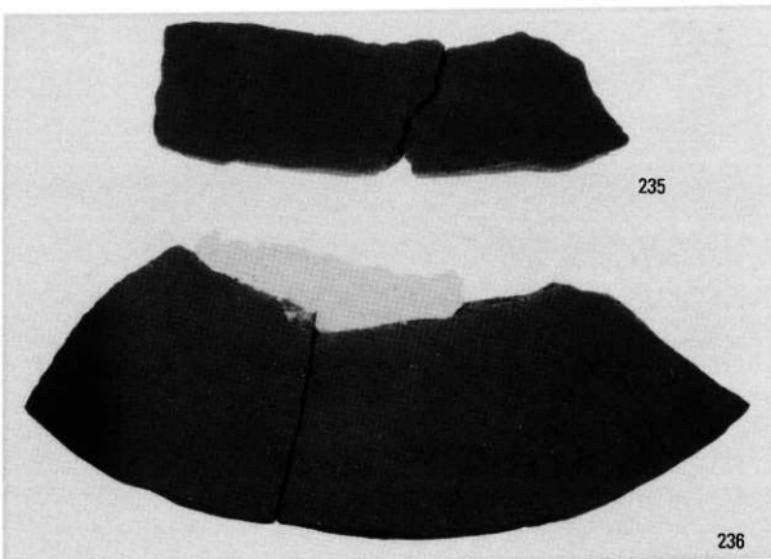
円筒埴輪底部



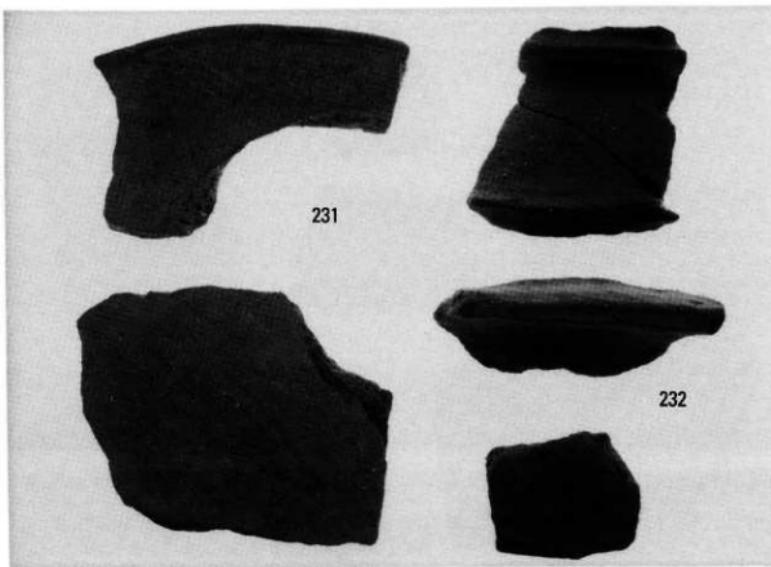
円筒埴輪口縁部



円筒埴輪口縁部



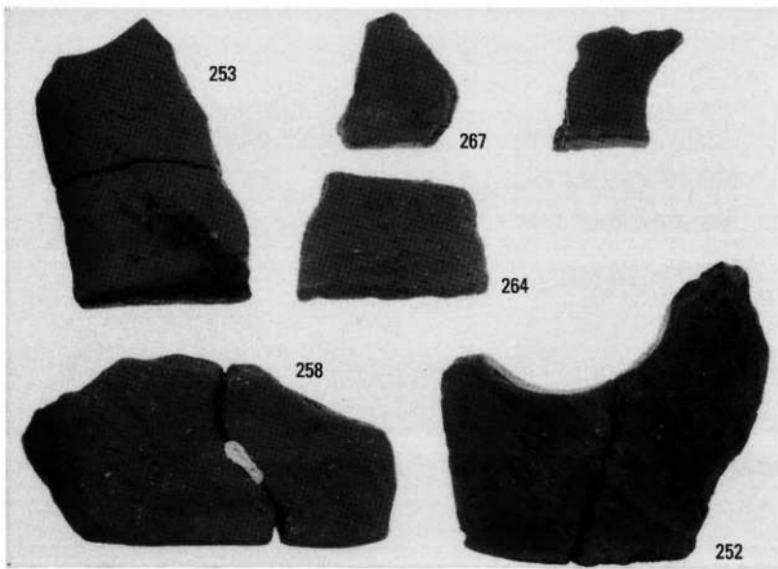
壺形埴輪



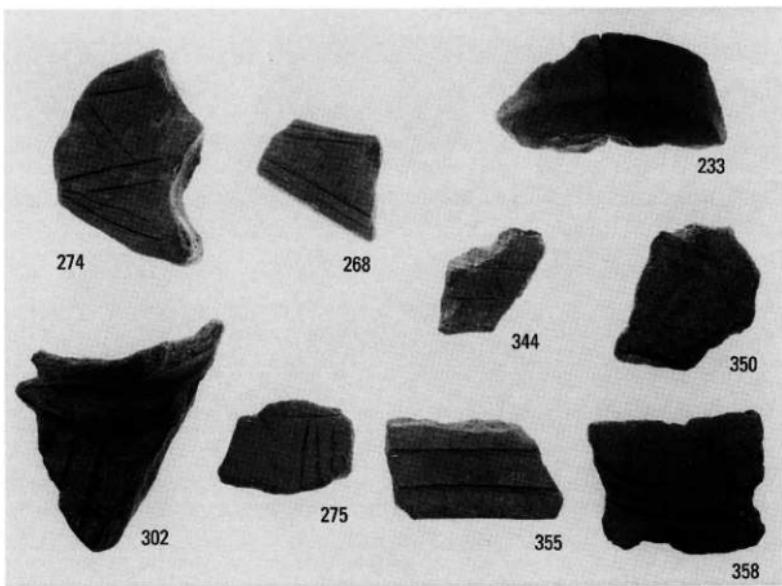
壺形埴輪



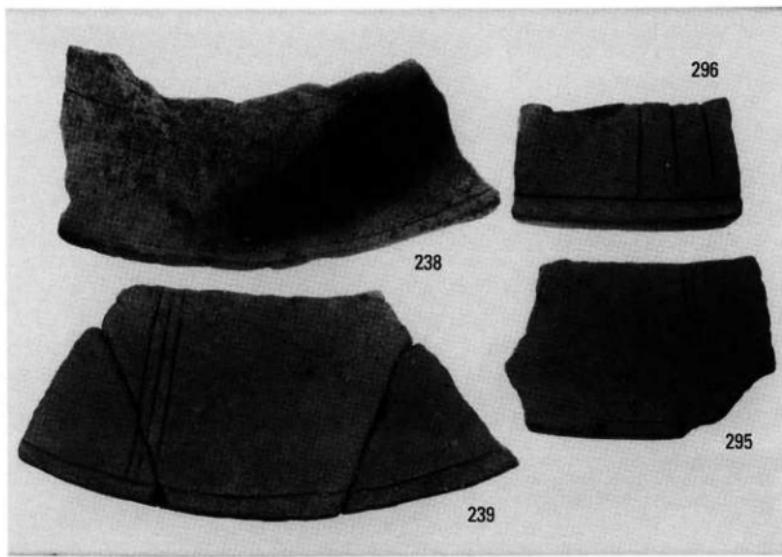
朝顔または壺形埴輪の口縁部



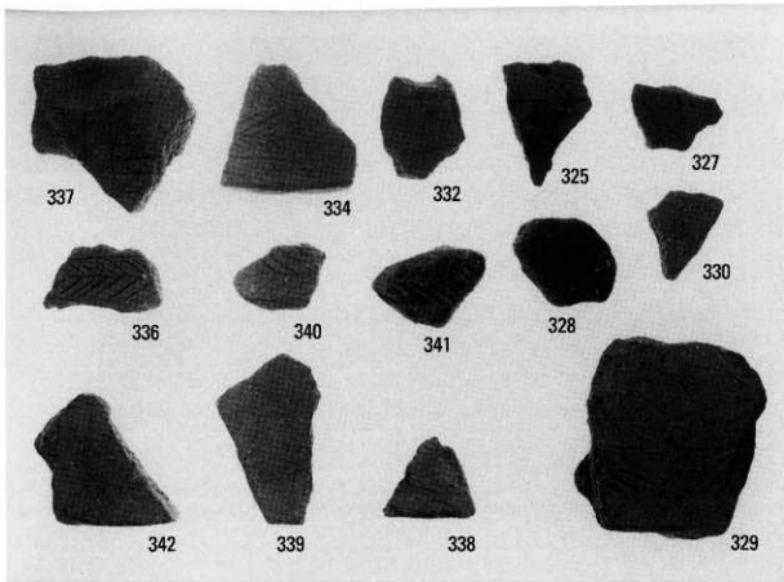
壺形埴輪底部



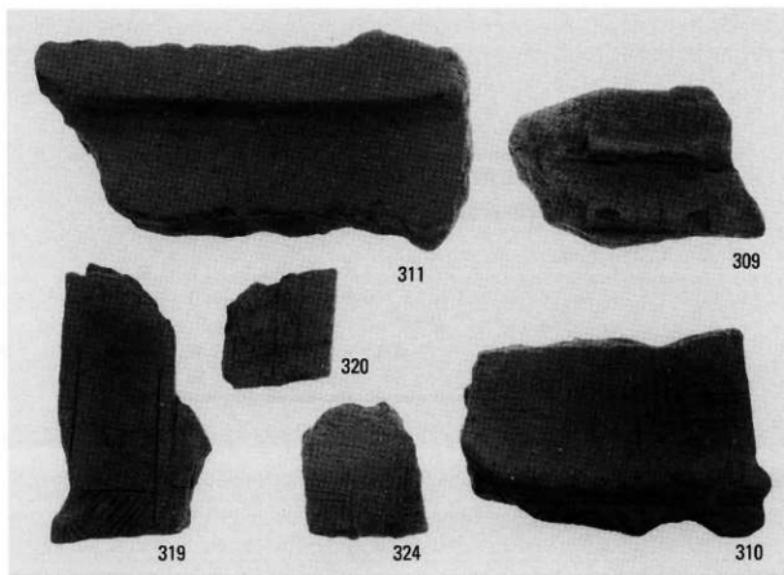
蓋形埴輪・不明形象埴輪



蓋形埴輪笠部



盾形埴輪・甲冑形埴輪



家形埴輪

八尾市文化財調査報告35 史跡整備事業調査報告1

史跡 心合寺山古墳基礎発掘調査報告書

発行年 1996年3月

発行 八尾市教育委員会

八尾市本町1丁目1番1号

編集 社会教育部 文化財課

印刷 (株)ヨーヨー 21
